

国指定重要無形民俗文化財 尾口のでくまわし

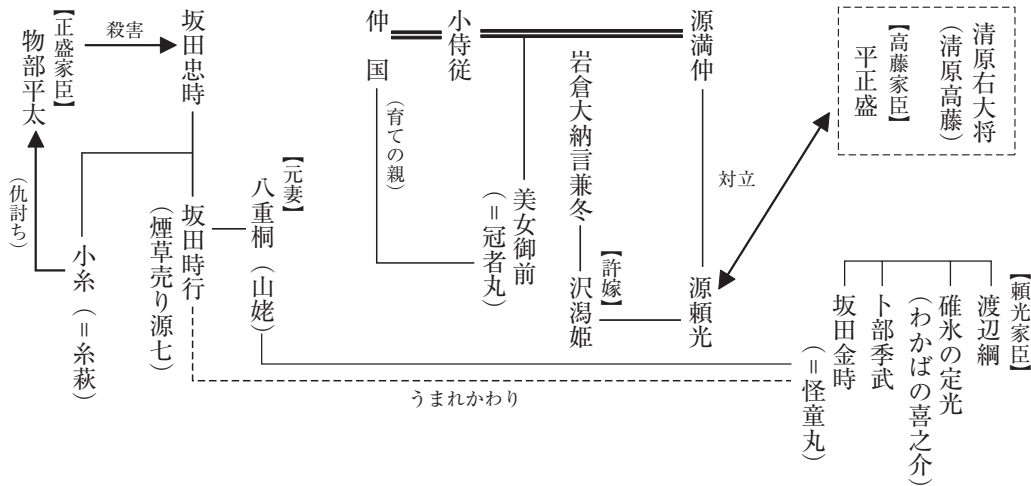
姫

山

姥



「姫山姥」登場人物



あらすじ

源頼光とその家来の渡辺綱は、父源満仲の武功を受け継ぎ、子孫に伝えるため、名剣を探し求めて浜松の宿にたどり着いた。小夜の中山に宿を取った頼光と綱は、専横を極める清原右大将及び右大将の権勢を笠に着て威を振るう平正盛と、宿をめぐる争いになる。騒動の後、頼光と綱は別の宿に泊まり、平正盛もまた清原右大将とは別宿となった。

右大将が宿った旅籠屋に奉公する下女の小糸(二糸萩)は、その昔、正盛の家臣物部平太に父坂田忠時を討たれており、右大将の庇護を求めてやってきた父の敵物部平太を、恋人喜之介の力を借りて討ち果たしてしまう。右大将の追っ手から逃れて逃げてきた小糸と喜之介を頼光は保護し、小糸から名剣「髭切膝丸」をあずかる。喜之介は頼光の臣下となり、碓氷の定光という名を与えられ、綱とともに右大将勢を追い散らしつつ逃げ落ちていく。

頼光は清原右大将の讒言により勅勤の身となり、行方をくらましてしまう。気落ちする頼光の許嫁、沢潟姫(おもたかひめ)のもとに煙草売り源七(実は小糸の兄坂田時行)が呼ばれて廓小唄を披露して沢潟姫を慰める。その小唄を聞いてやってきたのが元遊女の八重桐であった。八重桐は、時行が敵討ちを果たすまでは、と離別した時行の元妻であった。八重桐は時行に親の仇は妹の糸萩が討ったこと、そして妹をかばった頼光が勅勤の身となつたことを告げ、時行をなじる。時行は、自分の不甲斐なさを嘆き、神変希代の勇力の男子と成って今一度人界に生まれ出て正盛と清原右大将を滅ぼすことを誓い、命を絶つ。時行の魂は八重桐の胎内に宿り、八重桐は快童丸(二坂田金時)を身ごもり、鬼女となつた八重桐は勇力を発揮し、沢潟姫を奪い去ろうとした清原右大将一味を追い散らして飛び去ってしまう。

頼光は右大将の追っ手を逃れ、美濃国の判官仲国のもとに身を寄せていた。しかし、右大将はそれを知り、仲国に頼光の首を討ち取って差し出すように命じる。判官とその妻小侍は悩み苦しむが、頼光の異母弟美女御前(二冠者丸)は自らその身代わりとなつて討たれ、頼光と仲国夫婦の危機を救う。

異母弟美女御前の犠牲により難を逃れ、落ち延びた頼光は山中で盗賊と出会うが、頼光の勇に恐れをなした山賊は頼光の臣下となり、卜部季武という名を与えられる。山中を進む頼光と季武は道に迷い、信州上路の山の頂にある山姥の庵に泊まる。その庵で頼光はこの山姥が元遊女の八重桐であることを語る。魂その身に宿して生まれた子供が快童丸であることを語る。この子の豪勇を目の当たりにした頼光は坂田金時という名を与えて臣下とする。それを見て山姥は喜び、何処ともなく消えていった。

頼光と綱・定光・季武・金時の四天王は近江の高懸山へ入り、山中の鬼神を捕えて都に上る。この鬼神退治の功績により頼光は勅勤を許され、沢潟姫と結婚し、鎮守府將軍に任ぜられる。その一方、頼光等の訴えにより、清原の右大将は鬼界が島に配流、正盛は鬼神とともに誅殺されてしまった。





## 登場人物解説

- 源頼光 平安時代の武将。清和源氏。父は満仲。頼光四天王を従えての大江山の酒吞童子征伐や土蜘蛛退治の伝説で有名。
- 渡辺綱 頼光四天王の一人。
- 源満仲 頼光の父。
- 清原右大将 清原高藤。姉の胤子女院が天皇の生母であることをかさにきて、権力をふるう。
- 平正盛 右大将清原高藤に使える武将。右大将の権力の庇護により、頼光等に非道なふるまいをくりかえす。
- 小糸(Ⅱ糸萩) 坂田忠時の娘。浜松の旅籠屋に下女として奉公しつつ恋人の喜之介と協力して父の敵平正盛の家臣物部平太を討つ。その後、源頼光一行にかくまわれるが、頼光に家宝の宝剣「髭切膝丸」を預けたのち、自らは兄時行を探して落ち延びてゆく。
- 物部平太 平正盛の家臣。坂田忠時を殺害したために、その子どもたちから命をねらわれる。
- 坂田忠時 糸萩・時行の父。国司をつとめたこともあるが、のち、物部平太と口論になり殺害された。
- わかばの喜之介 ↓ 碓氷の定光
- 碓氷の定光 信濃国碓氷の庄司の息子として生れ幼名を荒童丸と称した。父の死後は諸国を放浪して苦労を重ねるが、浜松の旅籠屋でわかばの喜之介という名で下男奉公をしていたとき恋仲になった糸萩の敵討を助けて頼光一行に出会う。自分の出生を明かして頼光の家来となり、碓氷の定光という名を与えられ、四天王の一人となる。
- 沢瀉姫 岩倉大納言兼冬公の娘。頼光のいなづめ。
- 煙草売り源七 ↓ 坂田時行
- 坂田時行 父坂田忠時のために敵討をすることを宿願していたが、再会したもとの妻八重桐から妹に先を越されたことを知らされる。その恥辱をすぐため、妹をかくまったことによる讒言によって逼塞せざるをえなくなつた頼光一行の宿敵である平正盛と清原右大将を討たんことを祈念し、妻八重桐の胎内で再生するために自害し壮絶な最期を遂げる。
- 快童丸 八重桐の胎内で再生した坂田時行の生まれ変わり。山姥となった八重桐により山奥深くに育ち、頼光に見い出されて、金時の名を与えられ、頼光四天王の一人となる。
- 八重桐(山姥) 遊女。坂田時行の妻となるが、敵討のため一時別れる。沢瀉姫の邸で再会した時行は、神変希代の勇力の男子に生まれ変わることを予言して自害し、その結果、八重桐は鬼女と化し、沢瀉姫を奪おうとする清原右大将一味を追い散らす。その後、坂田時行の生まれかわりである快童丸を育てつつ、山中深く山姥として日を過ごし、やがて頼光一行に見い出される。
- 仲国 美濃国の判官。清原の右大将の讒言により逼塞している頼光をかくまう。
- 小侍従 仲国の妻。もと、源満仲の側室で冠者丸を生むが、正妻に疎まれて、いまはその子も美女御前と名を変えて育てている。
- 美女御前(Ⅱ冠者丸) 仲国の子として育てられているが、実は、満仲と小侍従の子。すなわち、頼光にとっては腹ちがいの弟になる。仲国が頼光をかくまったことにより苦境に陥っていることを知り、頼光の身代りとして自分の首を差し出すよう言い残して自害し、頼光と仲国夫婦の危機を救う。
- 卜部季武 頼光が仲国のところから落ち延びた山中で出会った盗賊。頼光の威に伏し、家来となる。

# こもちやまんば 嬬山姥 第一段

- ① 『史記』高祖本紀に見える故事。漢の高祖が天下を掌握する前のある夜、小道を通ったとき大蛇を切った。後に老婆が「白帝の子(秦)を赤帝の子(漢)が切った」と言っていたのを、高祖は天下掌握の予言と喜んだという。漢は秦の次の代の中国の王朝。紀元前二〇六年から紀元二〇〇年まで約四百年続いた。
- ② 太阿・工市はともに名剣の名前。これを振るる敵軍がすべて倒れ、流血が千里におよぶという。この剣のおかげで秦は韓・魏・趙・燕・楚・斉の六国を倒して自分の国にすることができた。秦王朝は紀元前二二一〜二〇六年。
- ③ 『孔子家語』に見える故事。子路は孔子の弟子で、剣を抜いて「古の君子は名剣で自らを守る」と歌い舞ったという。
- ④ 日本のこと。
- ⑤ 草薙の剣。三種の神器の一。
- ⑥ 代々の天皇。
- ⑦ 野宿しても危険がないほどに国が治まっているのはすばらしい。
- ⑧ 今の天皇。第六十二代天皇。在位九四六年〜九六七年。前代の醍醐天皇時代に引き続き、摂政・関白を置かず、天皇親政による政治を行った。
- ⑨ 村上天皇。第六十二代天皇。在位九四六年〜九六七年。前代の醍醐天皇時代に引き続き、摂政・関白を置かず、天皇親政による政治を行った。
- ⑩ お治めになる。
- ⑪ 上位の者(天皇)が下位の者(人民)に慈愛を注ぐこと。
- ⑫ 謡曲『高砂』の「四海波静かにて、国も治まる時つ風、枝を鳴らさぬ御代なれや。逢いに相生の、松こそめでたかりけれ」による。「遠江」は今の静岡県西部。「時つ風」は時節に応じて吹く風。謡曲の詞章「松」から「浜松」(遠江の地名)を導き出す。
- ⑬ めでたいことが起るしるし。名剣があるしるし。
- ⑭ 北方の空。北斗星と牽牛星の間。また、二十八宿(黄道にそって天球を二十八に区分したそれぞれ)の「斗」「牛」の間。
- ⑮ (雲が)鮮やかであるようす。
- ⑯ 平安前期の天皇。第五十六代。在位八五八年〜八七六年。
- ⑰ 旧国名。今の大阪府の一部と兵庫県の一部。
- ⑱ 平安中期の武將。満仲の長男。大江山の酒吞童子征伐や土蜘蛛退治の伝説で有名。
- ⑲ こうだと。
- ⑳ 「張華」は中国晋(二六五〜四二〇)の武將。「晋書」「晋書」に、「張華が「斗牛の間、常に紫気あるのを、天文による予言にすぐれる雷煥(らいかん)に観測させ、その下あたりの地中から名剣を得た話が載る。」
- ㉑ 大切なことから。
- ㉒ 決定的である。
- ㉓ 源の頼光の家来で、四天王の一人。

漢に三尺の斬蛇あつて四百年の基をおこし、秦に太阿・工市あつて六国を合す。「いにしへの君子これをもつてみずから守る」と、子路がうたいし劍の舞、かえす袂もおもしろき。我が神国の天の村雲、百王護国の御守り、野辺ふす民こそ、めでたけれ。

されば今上天曆の帝、御代しろしめすいづくしみ。波静かなる遠江、枝を鳴らさぬ時つ風。浜松の宿の辺にあたつて、空に紫の雲気たなびき、斗牛の間に英々たり。

ここに清和天皇の正統、摂津の守源の頼光、十八歳、かくと伝え聞き給い、

「唐土の張華が名剣を得たるためし、疑いもなくこの辺に天下の重宝となるべき名剣うずもれあるにきわまつたり。尋ね求めて父満仲の武功をつぎ、源氏の子孫に伝えん」

と、同年の若者渡辺の源五綱に御心を合わせ、近隣の宿々、

漢の時代、三尺の蛇を斬った名剣があつたために四百年続く国家の基をおこすことができたといひます。また、秦の時代には、太阿・工市という名剣があつたため、六国を合して大国となることができましたといひます。「古の君子はこれをもつて自らを守る」と孔子の弟子の子路が剣を持って、うたいつつ、たととをひるがえして舞ったという劍の舞は、とても素晴らしいものです。神国である我が国では、天の村雲の劍が代々国を守つており、たとえ民が野原に宿をとつても安心なのは、まことにすばらしいことです。

さて、いまは天曆の御代。天皇の慈愛のおかげで天下は平和におさまっています。波おだやかな遠江国に時おり吹く風もまたおだやかであります。

その浜松の宿のあたり、北方の空に紫の雲気があざやかにたなびいていました。清和天皇直系の摂津の守源の頼光は、今ちようど十八歳。浜松の宿のあたりの空に紫の雲がたなびいていると聞いて、「これは唐土の張華が名剣を得た例にならうべきもの。間違ひなくこのあたりに天下の重宝となるべき名剣がうずもれているはず。これを探しだし、父満仲の武功を継いで、さらに源氏の子孫に伝えよ



- ①たかがり。  
 ②かこつけて。  
 ③ありどころ。  
 ④今の静岡県掛川市にある地名。名剣の「さや」とかける。  
 ⑤天皇の母に用いられる呼び方。  
 ⑥たいしたことのない儒家。「儒家」は孔子に始まる政治・道徳についての学問を仕事とする家柄。  
 ⑦今の天皇。  
 ⑧母方の親類。ここでは清原高藤の姉の胤子女院が天皇の母であることをさす。  
 ⑨成り上がり。  
 ⑩栄華。  
 ⑪ぜいたく。  
 ⑫身の程を越えて。

- ⑬宿の割り当てを決める侍。  
 ⑭いかにも威張ったようすで。  
 ⑮むらがつてやつてきて。  
 ⑯この家でなくては。  
 ⑰貴人の泊る宿。

⑱宿泊者の姓名を書いて立てておく札。

- ⑲軽率。無礼。  
 ⑳恐れおおくも。

- ㉑やめさせようとする。  
 ㉒いや。  
 ㉓「げんじ」と音が似ているので用いた。  
 ㉔いきおい。  
 ㉕のさばれば。

二夜三夜泊まり、鷹野にことよせてありか尋ぬる名剣の、小夜の中山にお宿をめされける。

そのころ、胤子女院の御弟清原の右大将高藤とて、わずかの儒家に生まれながら当今の御外戚、姉女院の威勢をかつて中納言の右大将に経あがり、栄耀おごり身にあまり、諸国の名所を遊覧し、

「今宵この宿御泊り」

と、宿わりの侍肘をはり、むらむらと立ちかかり、「やあやあ、当宿にこの家ならで御本陣になりそうな家なし。

さき立つての宿札何者ぞ。幕も札もはやはやくれ」と呼ばわりける。亭主驚き、

「これこれ、粗忽なさるるな。かたじけなくも摂津の守源の頼光源氏の大将の御宿札」

と制すれども、

「なんの、頼光源氏でも毛虫でも、清原の右大将殿御威勢にはかなうまじ。のじまらば幕引きちぎり、宿札打ち割り、引きずり出せ」

う」と、同じ年令の家来渡辺の源五綱とともに、近くに宿を重ね、鷹狩を口実に、名剣のありかをたずね、この日は小夜の中山に宿をとったのでした。

一方、そのころ、都では胤子女院の弟にあたる清原の右大将高藤という方が威勢をふるっていました。もとは学者だったのですが、天皇の外戚ということ、姉の女院の後ろ盾によって中納言の右大将となり、栄耀榮華におごりたかぶっていました。今日も今日とて、諸国の名所を遊覧し、今夜はこの浜松の宿に泊るといふことで、宿の割当て係をつとめる家来の侍たちが、いばりちらしながら、頼光の宿所へやつてきて、

「ヤアヤアこの宿場には、この宿屋以外には御本陣になりそうな家がないというのに、わが殿にさき立つて宿札を立てているのは何者だ。幕も札もすぐにとりはらつてしまえ」と大声で叫びました。宿の亭主は驚いて、

「これこれ、軽率なことをなさるるな。恐れ多くも摂津守源の頼光殿、源氏の大将の御宿札ですぞ」

と止めようとしては、  
 「かまわぬ。頼光でも源氏でも毛虫でも、清原の右大将殿の御威勢にはかなうまい。抵抗するなら、幕を引きちぎり、宿札を打ち割つて引きずり出せ」

①「なにという」から転じた語。なにを言うか。なにい。

②ちよつと待て。

③公家をあげけた言い方。長袖の着物を着ていた。

④皇室。

⑤悪く言われておとし入れられては、まずいことになる。

⑦おだやかに。

⑧側近の人々。

⑨時間がかかる。いそげ。

⑩引きならべて。

⑪がまんできなくなつて。  
⑫下つ端たち。「ばら」は複数をあらわし、少し軽んじた気持ちを含むことが多い。

⑬大声。

⑭二枚の関札を一人分と見て、ふざけて言ったことば。

⑮としが若い者。

とののしりける。渡辺の綱聞きもあえず、

「何条、先にうつつたる宿札、指でもささば踏み殺さん」

とおどり出ざるを、頼光「しばし」としずめ給い、

「同じ武家にもあらばこそ、長袖に勝つて誉れならず。ことに

彼は右大将、女院の弟。朝家に敵するなどと讒せられては不覚

なり。ひそかにこの屋を立ち出で、宿はずれに一宿せん。汝

残つて穩便に明けわたすべし」

と、手回り少々御供にて、裏の小道の松かげより、山路に沿

うて出で給う。

「時刻うつる」

と、頼光の関札引き抜いて、「清原の右大将殿御とまり」と高々

とおし立て、ひんならべて、「右衛門の督、平の正盛同じくと

まり」と関札二本ぞ立てたりける。

渡辺今はたまりかね、おどり出でて、下人原とつてつきのけ、

大音上げ、

「清原の右大将は、右衛門の督正盛と名を二つ付かれしか。先

に打つたる宿札かゆる法はなけれども、主君頼光若輩なれど

と大声でどなりました。渡辺の綱はこれを聞くやいなや、「何を言うか。先にわれわれが立てておいた宿札に指一本でもふれてみる。踏み殺してやるわ」と踊り出ようとしました

が、頼光は、「ちよつと待て」としずませ、

「同じ武家同士で争うならともかく、相手は公家であるから、これに勝つても自慢にならぬ。それに、右大将は女院の弟。朝家に敵するなどと告げ口されてはまずいから、いまは目立たぬようにここを出て、宿場はずれに宿をとることにしよう。お前はここに残つて、おだやかに宿を明けわたすがいい」

と、側近のお供を数人だけつれて、裏の小道の松かげから山路にそつて出ていきました。

右大将の家来たちは「急げ」と、頼光の宿札を引き抜き、「清原の右大将殿御とまり」の宿札を高々と立て、さらに、これと並べて「右衛門の督平の正盛同じくとまり」という宿札も立てました。渡辺綱はこれを見て我慢がで

きなくなり、走り出で、下つ端の侍をつきのけ、大声を上げて、

「清原の右大将は、右衛門の督正盛という名もお持ちなのかな。先に打つた宿札を替えるということは普段ならしなはずなのに、わが主君頼光は若輩ながら思慮深いお方ゆえ、おごり者の右大将に張り合つて、後日讒言されるのは犬にかまれるのと同じと、おとなし

く宿をかえたのだ。



①お考え。  
②競争して。

③同じ宿に泊まり合せること。「めす」は「宿に」するの尊敬語「るる」は、さらなる敬意を添える。

④鋭い眼光でにらみつける様子。

⑤お前は。  
⑥子どもをののしって言う語。

⑦「あくち」は、幼鳥のくちばしの付け根の黄色い所、または、子どもに多く見られる湿疹などの出る症状。ここは頼光一行を年少者と見、「青二才のくせに」といった意味で、ののしりたしなめる言葉。  
⑧「源氏」は頼光一門を指す。「我々の一門では」ということになっている。  
⑨あなた。貴殿。男性が同輩または肉親を呼ぶときの敬称。綱は皮肉をこめて慇懃に対応している。  
⑩「前がみ立ち」は元服以前の少年の髪型で、まだ元服していない少年を指す。「請け取り」は仕事を引き受けることで、ここでは正盛の相手をするを指す。あなたのよう(程度の低い)人物の相手は幼い子どもがすることになっていきます、の意。  
⑪何げないふりで抜け目なくやっつけてのけるさま。  
⑫いい気になって、ずうずうしいさま。のうのうとしているさま。  
⑬踏みこむならば。  
⑭むき出しのすね。  
⑮「なぐ(薙ぐ)」は刃物などを勢いよく水平に振り払う意。  
⑯仏教の世界観で、大地の最も底にあり、金剛でできていて大地を支えている部分。

①も御思案深く、おごり者の右大将にはり合い、後日の讒を受け  
んこと、犬に食われし同然と、おとなしく宿をかえられしに、  
②定めてこれは平家の大将正盛な。彼と相宿めさるるからは頼光  
も相宿」

と、正盛が関札取って引き抜き、たたき割らんとするところへ、  
平正盛怒れる声にてはったとにらみ、

「やあ、おのれは頼光が下人、綱と言うわつばよな。このたび  
右大将殿東の名所御遊覧に御同道申すからは、相宿の関札誰

に憚ることあらん。主従ともにあくちも切れぬ小倅ども。もと  
のごとくに札立てなおせ。但し割られれば割って見よ」

と、太刀の柄に手をかくる。渡辺につこと笑い、  
「おお、源氏のならない、御辺の様なる相手は大人の手を出すま

でもなく、前髪立ちの子どもの受け取り。主君頼光に宿を空け  
させ、右大将の威をかって、御辺ぬつくり泊まらんとや。あた

たかなこと。右大将一家の外ふんごまば空脛ながん」  
と、関札微塵に踏みくだき、仁王立ちに立ったるは、金輪際よ

り忽ちにはえぬいたるがごとくなり。

これはきつと平家の大将の平正盛だな。武家の正盛が同じ宿にいるなら、頼光殿も宿を替えることは必要なかったはず」

と、正盛の宿札を引き抜いてたたき割ろうとしました。すると、平正盛が怒り声できつと睨みつけ、

「お前は頼光の家来の綱とかいう小僧だな。

この度、右大将殿が東国の名所を見物なさるのにお供した自分が、同宿の宿札を立てることを誰に遠慮する必要がある。頼光もお前も、主従そろって憎たらしいやつらじゃ。元通りに札を立て直せ。もしも割れるものなら割ってみろ」

と言いつつ太刀の柄に手をかけました。綱もにっこりと笑い、

「源氏方では、そなたごときは、大人ではなく、前髪立ちの子供が相手をする事になつておる。主君頼光殿に宿替えをさせ、その威光で、自分はその泊まろうなどは、なんともいい気なもの。右大将一門以外の者が狼藉を働くようなら、遠慮なく蹴散らすぞ」と言いつつ、宿札を粉々に踏み割って仁王立ちになりました。その姿は、地の底から突如立ち現れたようであります。

①心の根本。

②気後れしない様子。「おむ」は恐れて尻込みする意。

③身分のある人が、行列を作り先駆の槍持ちが槍を振って威儀を示すなどして、宿所・宿駅に入る事。

④「はがい」はもと鳥の左右の翼の重なり合った所。ここでは翼の全体。「のす」はのぼす、ひろげるの意。「夕鳥」は夕方にねぐらへ帰りを急ぐ鳥で、夕方の宿場の様子を言い出す言葉となつてゐる。

⑤粋な客や野暮な客にもまれきたえられて、宿引きの女たちも世慣れてずるくなつて。

⑥もとは宿場の女たちが客を招く呼び声。ここではその女たちを指す言葉ともなつてゐる。

⑦末永く添い遂げようの意。

⑧莫塵で作つた枕。「莫塵」は畳表に用ゐる藁を編んだ敷物。添い寝をする意が込められる。⑨がたひし。秩序がなく、混雑してぶつかり合うさま。屋号「菱屋」と掛ける。

⑩本来、参勤交代の大名が道中で宿泊する旅宿。⑪宿場の客引き女。旅客と契約ができると完春もした。

⑫雑用のために雇われた男。

⑬「わかば」は年若いことの形容。「喜之介」は「喜」の音が「木」に通じ、「わかば」は「木の縁によりつけられたあだ名」。

⑭この前の入れ替わり。奉公人は半年から一年で入れ替わる風習があつた。

⑮額の左右を剃りこんだ前髪。元服前の若者の髪型。「角」は「住み」と掛け、住み込みで奉公する意を表す。

⑯田舎くさく、野暮つたこと。

⑰白瓜のなます。喜之介が垢抜けたことを示す顔の色の「白」と掛ける。

⑱刃の薄い包丁。

⑳またたくま。

正盛そぞろ恐ろしく、身はふるえどもおし静め、

「おのれ、生けておくやつならねど、高官の御同道、騒動も恐れあり。ここはそれがしおとなしく宿はずれに別宿す。よつく性根に覚えておれ」

と、おめぬ顔にて立ち帰れば、渡辺は見向きもせず、右大将の宿入りの中おしわつてのさのさと、はがいのしたる夕鳥。

「とまりじゃないか」

旅籠屋の門にぎわしく暮れかかる。のぼり下りの旅人の、粋と野暮とにすれて揉まれてともずれの、まねくすすきも「おじやれおじやれ」が恋を呼ぶ。かりの契りも「末かけてそなた百

切りおりや九十」でも、心次第のござ枕。笠も預かる、股引洗

う。洗足の湯と膳立てと、ぐわつたひし屋の門がまえ。本陣宿

の忙しさ、あまたの出女下男。中にわかばの喜之介が、跡の

季よりも角前髪、土けもとれて顔の色、白瓜鱧夕飯の、拵え

急ぐ薄刃の音のちよきちよきちよつきちよつきちよつき。ちよ

つきり切り盤百人前を夢の間に、仕立てすまして息休め、煙草

くわえて立ち居たる。

正盛はそれを見てぞつと身震いしましたが、震えを鎮め、

「おのれ、生かしてはおけぬ奴じやが、いまは右大将殿のお供の身。騒ぎを起こすのはつしまねばならぬ。ここは私が宿場はずれに泊まることにするが、よく覚えておれよ」

と言つて、負けん気の様子で帰っていきまし。しかし、綱は見向きもせず、右大将が宿に入る行列の中を突つ切り、羽を伸ばした夕鳥のようにのびのびと自らの宿へと帰つていつたのでした。

「お泊まりなされ」と旅人を呼び入れる宿の女の声が賑わしい宿場の日暮れ時。都に向かう旅人、都から下る旅人がごつた返すなか、粋と野暮にもまれながら、人慣れた宿場女郎がすすきのように手をさしのべて旅人を招き、「いらつしやい、いらつしやい」と客に声をかけ、男たちを呼び入れて、かりそめの契りをおぼすのです。

足すすぎの水の用意や食事の用意でせわしいこ菱屋という宿では、忙しく立ち働く下女下男のなかに、まだ年若い喜之介という男が、半年前から住み込みで働きはじめています。角前髪もとれ、もうすっかり垢抜けして、夕食の白瓜鱧を薄刃包丁で、ちよんちよんちよんとまたたく間に百人前を調理し終わり、一休みと煙草をくわえて立つておりました。

① 怠け者。

② 「わら」の音が似ていることから用いた。  
③ 我慢しようと分別すること。

④ 家来衆のくせで。家来のいつもやることで。

⑤ 文句を言わせないでください。「いじる」は文句を言うこと。「たもんなや」は「給ふなや」の音便化したもの。  
⑥ 手際よくさつさと事を処理するさま。てきぱき。

⑦ なげかわしいとか。

⑧ 鼓を打ったり舞を舞ったり、の意で、何でもいろいろとひとりですることを意味する。  
⑨ 自分の手一つでムカデの手百分の仕事もできる、の意。

⑩ 煮炊きせずふるまえる加減のよい料理。自分の身を提供して売春することという。  
⑪ 金銭が多く蓄えられているさま。  
⑫ それとこれとは別である、の意。

⑬ 「さいたり」は「さしたり」のイ音便化。(銭は紐に通して保管していたが) 銭を紐から抜いて勘定し、その後紐に戻したりすることだろう。「ぬいたりさいたり」に房事をかける。歌の文句の一部とみられる。  
⑭ 歌の文句のとおりだ、の意。

⑮ 聞き逃すことができない所。  
⑯ 帯を解いて仕事をする、すなわち売春で身体を提供する。

⑰ 同じ勤務についている仲間。

下女の小糸いそがしげに、

「これのら松<sup>①</sup>。ひまのない旅籠屋奉公、殊<sup>②</sup>に今日は清原様とやら麦<sup>③</sup>わら様とやら、お公家様の<sup>④</sup>大客。上<sup>⑤</sup>つ方は物静<sup>⑥</sup>かで御了<sup>⑦</sup>簡<sup>⑧</sup>もあるべきが、下<sup>⑨</sup>々のくせに口<sup>⑩</sup>わるく、膳<sup>⑪</sup>が遅<sup>⑫</sup>いのなんのとてい<sup>⑬</sup>じらせてたもんなや。なぜにきりきり働<sup>⑭</sup>きやらぬ。きせるはわ<sup>⑮</sup>しが預<sup>⑯</sup>かる」

と、ひつたくれば喜<sup>⑰</sup>之介、

「ええ、小<sup>⑱</sup>やかましい。男<sup>⑲</sup>の仕事<sup>⑳</sup>がもどかしそうな。これ、料理<sup>㉑</sup>したり水<sup>㉒</sup>くんだり腕<sup>㉓</sup>ふいたり門<sup>㉔</sup>はいたり、打<sup>㉕</sup>ったり舞<sup>㉖</sup>うたりこの手<sup>㉗</sup>一つで百<sup>㉘</sup>足の代<sup>㉙</sup>も仕<sup>㉚</sup>る。貴<sup>㉛</sup>様の様<sup>㉜</sup>に毎<sup>㉝</sup>夜毎<sup>㉞</sup>旅<sup>㉟</sup>人寝<sup>㊱</sup>屋へ引き<sup>㊲</sup>入れ、煮<sup>㊳</sup>焼<sup>㊴</sup>きもせぬ加<sup>㊵</sup>減<sup>㊶</sup>のよいうまい手<sup>㊷</sup>料<sup>㊸</sup>理<sup>㊹</sup>ふるまうて、うめく程<sup>㊺</sup>銭<sup>㊻</sup>もうけてゆるりと朝<sup>㊼</sup>寝<sup>㊽</sup>めさると我<sup>㊾</sup>等<sup>㊿</sup>が仕<sup>㊿</sup>事は各<sup>㊿</sup>別<sup>㊿</sup>。  
⑬ ためた銭<sup>㊿</sup>ざしぬいたりさいたりせまいか。さればいの、お嘘<sup>㊿</sup>じゃない」  
とぞ笑<sup>㊿</sup>いける。

「むむ、これは聞き所<sup>㊿</sup>。なんじゃ、毎<sup>㊿</sup>夜<sup>㊿</sup>帯<sup>㊿</sup>ときつとめするとの言<sup>㊿</sup>い分<sup>㊿</sup>か。これ、そんな小<sup>㊿</sup>糸<sup>㊿</sup>じゃないぞや。傍<sup>㊿</sup>輩<sup>㊿</sup>衆<sup>㊿</sup>は面<sup>㊿</sup>々<sup>㊿</sup>につ

下女の小糸が忙しそうに、「これ、なまけ者。忙がしい宿屋の奉公に休む暇などありませんぞ。そのうえ今日は、清原様だか麦わら様とかいうお公家様がお泊まりです。身分の高いお方は物静かでするさいことも言わないでしょうが、家来衆は口が悪いから、膳の出ようが遅いとすぐに文句を言ってきます。そんな文句を言わせないう、せつせと働いてください。きせるは私が預かっておきます」と取りあげたので、喜之介は、  
「ええい、うるさい。俺の仕事が簡単にすんだからいらいらしているのか。料理をしたり水を汲んだり、腕を拭いたり門の前を掃いたり、俺ひとりでムカデの手を持っているくらいに百人分くらい働いておる。そなたのように、毎晩毎晩旅人を寝間に引き入れて、うなるほどの銭をもうけて、ゆつくり朝寝しているのとはちがう。稼いだ銭を抜いたりさしたり、楽しんでるのであろう」  
と笑いながらからかいました。すると、  
「これは聞き捨てならぬことを言う。私が毎晩身体を売って稼いでいるというのか。私はそんな女ではありません。同僚の女中衆はそうやって金を稼ぎ、

- ① (親の)援助のために金品などを送って。仕送りして。  
 ② 一重のきもの。  
 ③ 深く思いつめ。  
 ④ 信頼し合つての口約束。

⑤ 酒宴の場のちよつとした座興。

⑥ 義理に迫られ、金が必要なこともあるうと。

⑦ 私があなたを思うほど、私を思つてくれない憎らしい男。

⑧ 首にかみつてつけた歯型こそがまぎれもない恋の証だ。「極印」はもと金銀貨などが本物である証明として打つけたしるし。

⑨ 「こらへあれ(やれ)」の変化した語。堪忍さつぱりと。  
 ⑩ さつぱりと。  
 ⑪ 盃を取り交わして婚礼をすること。

⑫ 「わたし」の転。近世、おもに女性が用いた自称。  
 ⑬ 「さした」の音便形。注(一) いただ。

⑭ 得意の道具。  
 ⑮ 魚や野菜を煮て、飯や酒とともに売る商売。  
 ⑯ 謡曲『邯鄲』に「まことや名に聞し、寂光の都喜見城の、楽しみもかくやと、思ふばかりの気色かな」のものじり。

⑰ 「あい」「すけ」は飲酒の作法の一。「あい」は二人が酒を飲む間に第三者が入つて一方に代つて盃を受けて飲む法、「すけ」は他のものを助けるかたちで盃を受けて飲む法。  
 ⑱ 出女は赤前垂をかけるのが普通。その赤前垂を「夕紅前垂」と表現し、「夕」に「言ふ」を掛ける。

とめ、次第に銭金ため、親里みつぎ、身に一重もかざれども、

わしはこなたを思い染め、『面倒見よう見らりよう』と、頼も

しづくの言い交わせ。『もし末の縁あつて、一所にも暮らした

い』と随分と身をたしなみ、旅人の酒の挨拶肴に小歌歌うた

り、わずかの銭をいただく時は涙がこぼれて口惜しけれど、若

いこなたが奉公の身で義理順義もあるものと、一銭も身に付け

ず、みんなこなたに渡すぞや。一言『かわいい』と言うたとて罪

にもなるまい。ほんに思う程にもないにくい男」

と、首筋に歯形ぞ恋の極印なる。

喜之介ほろりと涙ぐみ、

「おお、あやまった。こらやこらや。さあ、わつさりと仲直り、

機嫌なおして盃ごと。幸い肴はこの鱈」

まず祝言の心持ち。

「そんなら祝うて女房から。わしが手酌で、これさいた」

「我等は得物のこの茶碗、吸物は煮売の豆腐。めでとう謡おう、

「寂光の豆腐・茶碗酒の楽しみもかくやと思つてばかりの鱈かな」

「あいよ」「すけよ」と夕紅の前垂膝に打ちもたれ、

親元に仕送りましたり着物を買つたりしている  
 かもしれないが、わたしはそなたと恋仲に  
 なつて、互いに面倒を見ようと約束したでは  
 ありませんか。それゆえ、将来は夫婦になつ  
 て一緒に暮らしたいと、身をつつしみ、旅人  
 たちの酒の相手に小歌を歌つてわずかの銭を  
 いただくだけ。そんなときは情けなくて涙が  
 出ますが、若いあなたは奉公の身、義理に迫  
 られてお金のいることもあるうかと、わずかの  
 銭すら自分のものにはせず、みんなあなた  
 に渡しているのではありませんか。せめて一  
 言、かわいい奴と言つてくれても罰はあたら  
 ないでしょうに、ほんとにまあ、憎い方じゃ」  
 と喜之助の首筋につける歯型が小糸の恋心の  
 しるしです。

喜之助はほろりと涙ぐんで、

「おお、私が悪かつた。許してくれ、許して  
 くれ。さあ、さつぱりと仲直り。機嫌をなお  
 して婚礼のしるしのさかずきをかわそう。酒

の肴はこの鱈だ」

二人は祝言の心持ちです。小糸が、

「そんなら祝いに、女房の私から手酌でさ  
 あ酒をつぎました」

と言うと、喜之助も

「ならば、私は呑みなれたこの茶碗にしよう。  
 吸い物はこの煮売の豆腐。めでたくひとつ歌  
 いましょう。『寂光の豆腐、茶碗酒の、たの

しみもかくやと思つてばかりの鱈かな』

互いに酌み交わしているうちに、喜之助は、  
 紅の前垂れをかけた小糸の膝にもたれかかり、



①口上の趣意。「口上」は、武家において表向き  
の伝達を口頭で行うこと。

②向かいあった席に招き。

③中世に男性が用いた、相手を呼ぶ言い方。あ  
なた。同輩または肉親に用いた。

④わたし。自分。

⑤物語・歴史で知られた所。

⑥することがなく、暇をもてあますこと。たい  
くつ。

⑦邪魔され。

⑧つつしんで。遠慮してかしこまり。

⑨以前に国司であった者。前国司。  
⑩奉公先を失った侍。

「かわいい奴」

とぞたわむるる。

かかる所へ、

「右衛門の督平の正盛参上」

と案内すれば、喜之介小糸、口上の趣を奥へかくとぞ取り次ぎ  
ける。清原の右大將出で向かい、

「やあ正盛、近う近う」

と対座に請じ、

「さても御辺とそれがし、昨日まで泊々同宿にて、名所古跡  
の物語、旅宿の徒然忘れしに、今宵は頼光めにさえられ、思  
わぬ別宿。明日の泊まりを待ちかぬる。今宵の寂しさ推量あ  
れ」

とありければ、正盛つつしんで、

「御懇意の余り、申し上げたき子細の候。その故は、それがし  
が家来物部の平太と申す者、先年坂田の前司忠時と申す浪人侍  
と口論し、かの坂田を討ちは討って候えども、彼には男女の子供  
あり。親の敵と狙い、もし平太めを討たせては、それがし武道

互いに「かわいい奴じゃ」とむつみ言をかわ  
していました。

とそこへ、

「右衛門の督平正盛殿が参上いたしました」

と案内を乞う声。喜之助と小糸は急いで奥へ  
取り次ぎました。清原の右大將が出迎えて、

「やあ、正盛。近くへ」

と招き入れ、

「そなたは昨日まで同じ宿であったゆえ、名  
所古跡の物語で宿所での暇をなぐさめること  
ができたのに、今宵は頼光めの邪魔で、思い  
もよらず別宿になってしまいましたな。はや  
く明日になってくれぬかのお。今宵のわびし  
さを推察してくれ」

と右大將が言います。正盛はつつしんで、  
「懇意にしていただいているゆえ、お願いし  
たいことがございます。私の家来の物部の平  
太と申す者、以前、坂田の前司忠時という浪  
人と口論し、討つには討ったのでございます  
が、この坂田には男と女の子供がおりまして、  
その子供達が今も平太を親の敵と狙っており  
ます。が、平太めを討たせては、私の武士と  
しての面目が立ちませぬ。それゆえ、側を離  
さず、この旅にも召し連れてきたのでござい  
ます。

① 武士として不名誉なこと。

② おつぎのま。主人の居室に隣接する予備の間。付人が控えることが多い。

③ 前世・現世・来世を通して未来永劫。

④ (駕籠を) かついでこさせ、安定した所に据え置かせ。

⑤ 六尺を超える。「六尺」はおよそ一八〇センチ。

⑥ 日光。

⑦ 近世までの成年男子の頭髪のありかたで、額際から頭頂までを半月形に剃り上げていた部分。

⑧ おまえ。対等以下の相手に対して用いるのが普通。

⑨ 敵としてつけねらわれていること。

⑩ 乱暴なふるまい。  
⑪ 手を出したりすれば。

⑫ 堂々と大きな態度でいる。  
⑬ 漢の高祖に仕えた勇士。

⑭ 漢の高祖につかえた智将。

立ち申さず。一寸もそばを離さず、旅の末まで召しつれ、幸い君と御同宿。御威勢を以て、昨夜まで心やすく臥したるに、今宵野はずれの別宿。平太めにあやまちも候いては弓矢の不覚あわれ、かの者、御次に一宿せさせ下されば、生々世々の御厚恩」

と言いまきらぬに右大將、

「おお、何より以てやすいこと。その者これへ」

と言う間に、駕籠を内へかきすえさせ、六尺ゆたかの大男、ひかげ見ぬ目の色青く、月代のびてひげ長く、野辺のすすきに異ならず。

右大將近く招き、

「物部の平太とはわぬしよな。敵持の用心もつともながら、この高藤が匿うたり。それがしが威勢の程、人間はおろか、鬼神にてもそれがしがそば近く狼藉し出し、指でもささば天子に弓引く朝敵同然。身を知らぬ者やあるべき。なんの用心。月代そらせ櫛けずり、世間広くのさばれ。高藤がかく言うからは、樊噲張良に抱かれていますと思ふべし」

幸い、これまでは右大將殿と同宿できましたゆえ、右大將の御威勢のおかげで安心して眠ることができましたが、今宵は宿外れの別宿となりました。平太に何か間違いでも起こりましては、武道の不名誉。なにとぞ、この平太を右大將殿のとなりの部屋に泊めていただければ、ありがたいのですが」

と言いつらぬうちに、右大將は、

「おお、そんなことならたやすいことじゃ。その者をこれへ連れてまいれ」

と言いました。すぐに、平太を乗せた駕籠がやってきましたので、なかへ入れさせますと、駕籠から六尺を超える大男が降りてきました。日にあたりぬため、肌の色は青く、月代はのび放題、ひげは長く、その様はさながら野原のすすきのようにでした。右大將は平太を近くへ招きよせ、

「物部の平太とはそなたか。敵としてつけねらわれている身の用心としてはもつともであるが、この高藤がかくまってるからには、私の威勢で、人間はもちろん、鬼神にも乱暴・狼藉はたらかせぬ。もしも私に手出しをしようものなら、天子に弓引く朝敵も同然、じゃよって、身の程を知る者なら、誰も手出しはできぬはず。もう用心はいらぬ。月代を剃り、髪を整えて、世をはばかりことなく好きに振舞うがよい。この高藤がこのように言うからには、樊噲・張良に守られているも同然じゃ」



① 言い過ぎ。

② 挨拶に行くこと。

と、過言<sup>①</sup>上なくののしれば、正盛<sup>まさもり</sup>悦び、  
「ありがたしありがたし。いよいよ頼<sup>たの</sup>み奉<sup>たてまつ</sup>る。明朝<sup>みょうちよう</sup>お見舞<sup>みま</sup>い申<sup>もう</sup>さん」

と一礼<sup>いちれい</sup>してぞ帰<sup>かえ</sup>りける。

喜之介<sup>きのすけ</sup>小糸<sup>こいと</sup>はふすまの陰<sup>かげ</sup>、後先<sup>あとさき</sup>とつくと聞き届<sup>とど</sup>け、

「あれあれ父様<sup>とつさま</sup>討<sup>う</sup>った平太<sup>へいた</sup>めに極<sup>きわ</sup>つたり。日ごろ頼<sup>たの</sup>みし契約<sup>けいやく</sup>は今宵<sup>こよい</sup>ぞや。女<sup>おんな</sup>の腕<sup>うで</sup>にて仕損<sup>しそん</sup>ずるは必定<sup>④</sup>。必ず跡<sup>あと</sup>を頼<sup>たの</sup>みます」

④ (〜となるのは) 確実だ。  
⑤ 「褌」は着物の衿先からすそまでの部分。「小」は接頭語。

と、小褌<sup>⑤</sup>引き上げ身<sup>み</sup>づくろう。

喜之介<sup>きのすけ</sup>おさえて、

⑥ 物事をするに当って、その前に大体の処理をすること。

「せくまいせくまい。そなたに兄御<sup>あにじ</sup>もあるげな。その兄<sup>あに</sup>も出合<sup>いであ</sup>わず、まして女<sup>おんな</sup>の仕損<sup>しそん</sup>じては恥辱<sup>ちじよく</sup>なり。あらごなししてやろう。

とどめを刺<sup>さ</sup>せば同然<sup>どうぜん</sup>」

と踊<sup>おど</sup>り出<sup>い</sup>ずれば、

⑦ どうせならと。  
⑧ 刀鍛冶の銘がきざみつけてある名剣。

「ああ忝<sup>かたじけな</sup>い。とてもものことに、父様<sup>とつさま</sup>のゆずりの銘<sup>⑧</sup>の物、常<sup>つね</sup>に人<sup>ひと</sup>の氣<sup>き</sup>のつかぬ、思<sup>おも</sup>いがけのない所<sup>ところ</sup>にとっておいた」

⑨ 「腰」は刀の数をあらわす語。  
⑩ 金具を金で作った刀。  
⑪ 冒頭本文7行目参照。

と一間床板<sup>ひとまこいたたみ</sup>畳<sup>ひ</sup>を引き上<sup>あ</sup>ぐれば、一腰<sup>⑨</sup>の金作<sup>⑩</sup>り、人<sup>ひと</sup>こそ知らね紫<sup>⑪</sup>の、虹立<sup>にじた</sup>ちのぼる名剣<sup>めいけん</sup>の、不思議<sup>ふしぎ</sup>と後<sup>のち</sup>に知<sup>し</sup>られける。喜之介<sup>きのすけ</sup>鞆<sup>たもと</sup>

と好き勝手なことをしゃべりちらしておりま  
す。正盛は大喜びで、

「本当<sup>ほんとう</sup>にありがとうございます。では、確<sup>たしか</sup>か  
にお頼<sup>たの</sup>み申<sup>ま</sup>します。明朝<sup>みょうちよう</sup>、ご挨拶<sup>あいさつ</sup>に参<sup>まゐ</sup>ります」  
と一礼<sup>いちれい</sup>して帰<sup>かえ</sup>っていききました。

さて、喜之介<sup>きのすけ</sup>と小糸<sup>こいと</sup>の二人<sup>ふたり</sup>はふすまのかげ  
で、この話<sup>わ</sup>の一部<sup>いちぶ</sup>始終<sup>しじう</sup>をすつかり聞いてしま  
いました。

「あれが父上<sup>ちちのうへ</sup>を討<sup>う</sup>った平太<sup>へいた</sup>めに間違<sup>まちが</sup>いありま  
せん。日ごろの約束<sup>やくそく</sup>を果<sup>は</sup>たすのは今夜<sup>こんや</sup>です。  
女の腕<sup>うで</sup>だけでは仕損<sup>しそん</sup>ずるやもしれませぬから、  
あとをくれぐれも頼<sup>たの</sup>みますよ」

と言<sup>い</sup>いつつ、着物<sup>きもの</sup>の裾<sup>すそ</sup>を引き上げて、身<sup>み</sup>づく  
ろいをしておりました。喜之助<sup>きのすけ</sup>はそんな小糸<sup>こいと</sup>  
を引きとどめて、

「あせるでない。そなたには、兄御<sup>あにじ</sup>もいよう。  
その兄<sup>あに</sup>がこの場<sup>ば</sup>におらず、いうまでもなくそ  
なたは女<sup>おんな</sup>の身<sup>み</sup>、討<sup>う</sup>ち損<sup>そん</sup>じたりしては恥<sup>ち</sup>になる。  
この私<sup>わたし</sup>が先に平太<sup>へいた</sup>めをおおかたやつつけてお  
いて、そのあとで、そなたがとどめを刺<sup>さ</sup>せば  
よいではないか」

と飛び出<sup>で</sup>します。小糸<sup>こいと</sup>が、  
「ああ、本当<sup>ほんとう</sup>にかたじけないうこと。この日<sup>ひ</sup>の  
ために、父上<sup>ちちのうへ</sup>から譲<sup>ゆづ</sup>り受<sup>う</sup>けた銘<sup>めい</sup>刀<sup>とう</sup>を人の氣<sup>き</sup>づ  
かないところにひそかにかくして置<sup>お</sup>いたので  
す」

と、畳<sup>じやう</sup>を引き上げ床板<sup>とこ</sup>をはずして取り出<sup>で</sup>して  
きたのは一振り<sup>ひとふり</sup>の金<sup>かね</sup>ごしらえの刀<sup>やいば</sup>。さきに頼<sup>たの</sup>  
光<sup>ひかり</sup>が、紫<sup>むらさき</sup>の虹<sup>にじ</sup>が立ち上<sup>あ</sup>る雲<sup>くも</sup>氣<sup>き</sup>を感じ、名剣<sup>めいけん</sup>の  
ありかとさぐりあてたまさにその刀<sup>やいば</sup>なのでし  
た。

①よく切れる刀の刃の様子を、澄んで鋭く光る水に形容した言葉。

②もとから持っている望み。ここでは敵討の望み。

③「関」は小糸がせく(あせる)意を掛ける。「朝鳥」は夜明けを知らせて飛び立つことから、「飛び立つ」を言い起す語。

④まばたきして相手に合図を送ること。

⑤すばやく、さっと。

⑥何くわぬ顔。

⑦「玉」は美称。清掃に用いるほうき。

⑧午前六時ごろ。

⑨時刻。

⑩事情。わけ。

⑪もともと。

⑫近世、江戸・大阪・京都などの各町に置かれた役人の補佐をする人。自身番や町会所に詰めて、名主・町年寄の下で町政の事務をおこなった。大阪では会所守(かいしよもり)、江戸では書役(かきやく)ともいった。大阪・京都では、初め髪結を兼ねたという。

⑬額の髪の生え際。

⑭頭頂部を剃る剃り方。

⑮毛の生え方に逆らって剃る剃り方。根まで剃れる。

⑯暗に首を切り落とす意をこめた言葉。

⑰縁起が悪い。

⑱むだ口。

口抜き見れば、氷の焼刃玉散るばかり。

「さあ本望はとげたるぞ。必ずせくまいせくまい」

と、言うも関路の朝鳥、飛び立つ心ぞ道理なる。

「それぞれ奥から行燈さげて誰やらくる。あやしめられな」

と目はじきし、ちやつと忍べば、小糸はそらさぬ顔、鼻歌で座敷

取りおく玉箒、紙屑拾うていたりけり。敵の平太燈火そむけ、

「こりや女、物頼もう。明日のお立ちは明け六つ。その点にあ

うように月代ひとつ頼みたし。上手な髪結あるまいか」

「ああ、ああ、おやすいこと。どりや呼んであげましょ」

と立たんとすれば、

「いやいや少し様子あって、男はならぬ。女の髪結あるまいか」と言えははつと心つき、

「のうのうお前はお幸せ。私は自体町代の娘。髪月代一通りは、

小額眉際中剃り逆剃りこそげ剃り。お顔はたった一剃刀にござ

ごしごし。くちびるなりと鼻なりとお首なりとも、ころりつと

剃り落としてあげましょ」

「ああいまいましい、気味悪い。あだ口きかずとはや剃れ」

喜之助が鞘から刀を抜くと、刃が氷のような澄んだ光を放っています。

「この名刀があれば、そなたの望みはかなえられたも同然。決してあせってはならぬ」

と言われても、小糸が飛び立つばかりに気がせくのもまた道理というものです。

「ほれ、奥から行燈をさげて誰か来る。怪しまれるなよ」

と目配せして喜之助はすつと隠れ、小糸は何食わぬ顔で鼻歌などを歌いながら、座敷に置

いてあつたほうきを取って紙くずなどを拾っていました。やってきた敵の平太は、燈火を

わきへ向け、

「これ、女、用事がある。明朝六時の出発に間に合うよう月代を剃ってほしいのだが、ど

こそに上手な髪結いはおらぬかな」

「ああ、おやすいことです。すぐに呼んであげましょ」

小糸が立ちあがろうとすると、平太は、

「わけがあつて、男はだめだ。女の髪結いがないか」

と言うので、小糸ははつと気がつき、

「ああ、あなたはお幸せな方。この私はもともと町代の娘ですから、髪結いもできます。

月代、小額、眉際、中剃り、逆剃り、こそげ剃りなど、一通りはできます。お顔を一剃刀でござしごと、唇でも鼻でも首でもすつかり剃りおとして差し上げますよ」

「ああ、縁起が悪い、気分が悪い。むだ口をたたかずに、早く剃ってくれ」

①「もむ(揉む)」に掛け、「こがるる」の縁語となつてゐる。

②燃えるように激しく思う。

③あたま。

④ここでは、剃り落した髪の毛を受ける道具。扇の地紙の形に作った板。「(命が)散る」にかける。

⑤首の後のくぼんだところ。急所。

⑥音がしないようにそつと開け。

⑦きつと。

と、かみそり出だし髪おっさばき、縁先の水桶に頭ひたして紅葉葉の、こがるる小糸が心の内。喜之介はふすまのかけ。

「今や出ん、今や出ん」

と、互いに目くばせ。気をかよわし、

「これこれつむりがまだ揉めぬぞ。こう剃りかかつて気をせくことはちつともない。揉めぬうちに剃りかかれば剃刀がはずれる」

と、言えどもさらに気もつかず。消ゆる命はちりとり、落つる雫のはかなさよ。

「さあ、今が大事のほんのくぼ。うつむかんせ」

と髪なであぐれば、喜之介はふすまをそつとしめ開けにうしろに立つても、「親の敵」、声をかけぬは口おしと、ためらう色を女はさとつて、

「申し旦那様、お前は強そうなお侍。定めし人斬らんしたこともあるうの」

「おお、斬ったとも斬ったとも」

「おお、その斬った坂田が娘糸萩。親の敵」

そこで、平太の頭を縁先の水桶に浸し、髪を揉みはじめましたが、その小糸の心は、ただもうはやりにはやっています。喜之助はふすまのかけから、今か今かと飛び出す時機をみはらからい、小糸と互いに目配せをします。小糸は喜之助に分かるように、

「まだ頭が揉めていません。剃りかかつてしまえばもう急ぐことはありません。よく揉めないうちに剃りかかつては、剃刀がすべつてうまくいきません」

と言うのですが、平太の方はまったく気がついていません。平太の命はいまやちりとり落ちて消えるはずで、しづくのような便りなさです。

「さあ、いまが大事なところで、ほんのくぼですよ。よくうつむいてください」

と髪をなであげたところで、喜之助はふすまをそつと明けて、平太の後ろに立ちました。

しかし、真正面から「親の敵」と声もかけずにやみ討ちにするのは残念と、ためらつている様子を察して、小糸が、

「もしもし旦那様、あなた様はお強そうなお侍でございますが、さぞかし人を斬ったこととおありでしょうね」

と声をかけると、平太は、

「おお、斬ったとも斬ったとも」と答えます。

そこで、

「そなたが斬った坂田の娘の糸萩とは私のこと」

①源満仲が作らせた源氏重代の名剣「鬚切」「膝丸」を意識した表現。

②事をなすとげた。

③驚いて発した語。もと、「仏・法・僧」に帰依する意の祈りのことば。

④口惜しくてその場で強く足踏みして。

⑤捕らえて縛らないでは。

⑥怒る声が大きく遠くまで届くことを表現。  
⑦月日の明るさにも負けないくらい目をはつきりとさせ。「さや」は明るくはつきりしたさま。「小夜」を言い出す語となった。  
⑧地名。既出。名剣を探す頼光と、遊山の清原高藤ら一行が宿泊している所。

⑨「落ちんとす」で、逃げようとする、の意。

⑩なまじつか。中途半端に。  
⑪あなた。  
⑫殺して。

というより早く抜きうちちの、首につらねて鬚一ふさ、両ひざかけて一太刀に、水を斬ったるごとくなり。

「さあしおおせた、立ちのかん」

と、かいがいしくも首ひっさげ、女を小脇にしつかと抱き、一散にこそ落ちうせけれ。

右大将が侍ども、「こは何ごと」と走り出て、

「南無三宝、平太討たれ候」

と、呼ばれる声に高藤かけ出で、地団駄踏んで、

「ええ口惜しや、無念やな。正盛にむかつて言葉なし。よし地をくぐり雲に入るとも、高藤が威勢にて、からめ取らでおくべさか。追っかけ討ち取れ、者ども」

と、怒れる声は松吹く嵐、月日にまがう目のさやの、小夜の中山手わけをして、上を下へとかえしける。

二人はようよう宿はずれまで走りつき、振り返れば追手の提灯八方を取りまきて、落ちんず様こそなかりけれ。

「ええ、口惜しや。なまなか追手に討たれんより、御身を害し腹切らんとは思えども、敵に首を取りかえされ、我らが首を

と言うより早く、喜之助は平太を抜き打ちに斬りつけました。その切れ様は、首を切り落とした一太刀が、鬚ひと房、そして両膝をも切り、水を切るように鮮やかなものでした。

「さあ、事は成し遂げた。立ち去ろう」

と、喜之助は敵の首をひっさげ、小糸を脇にしっかりと抱きかかえて、一目散に逃げていきました。

右大将の家来たちが「これは何事だ」と走り出て、

「南無三宝、平太殿が討たれた」

と叫びますと、その声を聞いて、高藤がかげ出してきて、地団駄を踏みながら、

「ええい、いまいましい。無念なことじゃ。正盛に何と言いつくをしようぞ。たとえ犯人が地にもぐり雲の中に飛んでいったとしても、この高藤の名にかけて、必ず見つけ出して討ちとるぞ。ものども、追え」

と言うその声は、松吹く嵐に負けないくらい響きわたり、家来達はすみずみまで探しまわり、小夜の中山一帯は大騒ぎになっています。さて、小糸と喜之助の二人はようやく宿場のはずれまで走ってきましたが、追っ手の提灯が廻りを取り囲んでいて、逃げられません。「ええい、いまいましいこと。追っ手に討たれるくらいなら腹を切ってしまいたいが、そうなるに敵に平太の首を取り返され、我々の首も渡ってしまう。」

① 死んだあととまで無念である。

② お互いに刺し合って。

③ 突然なことだが。

④ 本当のことかどうかわからないが。

⑤ 日本中の人間が押しかけてきても。

⑥ かんぬき。扉が開かないように、扉にかけわたす横木。  
⑦ しつかりと。

⑧ 家の名。一つの氏から出た家々を区別する名。仮名(けみょう)。  
⑨ 本名。男子が元服の際に、幼名に代えて烏帽子親に付けてもらう名。

も渡さんこと、屍の上の無念なり。誰が泊まりか知らねども、ここを頼んで刺し違え、死骸を隠してもらわん」

と、碎くるばかり門の戸叩き、

「疎忽ながら、我々は親の敵を討って立ちのく折から、追手きびしく候えば、どなたかは存ねども、御庭を借り、切腹仕りたく候。御めぐみ頼み奉る」

と大音あげてぞ申しける。所こそあれ頼光の泊まりの宿。渡辺聞くよりとんで出で、

「実否は知らねど、敵討ちとは心地よし」

と、手づから門をおし開き、

「さあ匿うた、お入りやれ。摂津の守頼光の旅宿。かく言うは渡辺の源五綱。日本国がおこつても、蚊の食うほどにも思わばこそ。ゆつくりと休息あれ」

と、もとの貫の木しつととおろし、御前に伴い出でにけり。

頼光対面しましたし、

「かれらは夫婦か兄弟か。家名実名、敵討の首尾つぶさに聞かん」

死んだあととはいえそうなつては無念なこと。誰のお宿かは知らぬが、お願いして、ここで互いに刺し違つて死に、われらの死骸の始末を頼むことにしよう」

と決心し、激しく戸を叩きながら、  
「突然でございませうが、お願いでございませう。私も親の敵を討って逃げようとしておりますが、追つ手に追われております。どなた様か存じませんが、お庭を借りて切腹させていただけますと、お情けをお願いする次第でございませう」

と大声で言いました。ちようどそこは頼光の宿所。渡辺綱はこれを聞くやいなや飛んで出て、

「本当かどうかはともかく、仇討ちとはおもしろい」

と言いつつ門を開いて、

「さあ、かくまってあげましょう。お入りなさい。ここは摂津守頼光の宿。私は渡辺の源五綱と申します。何が起ころうと、ここにいれば安心。ゆつくりお休みなさい」と言つてかんぬきをしつかりおろし、頼光の前に連れて行きました。

頼光は二人と対面し、

「お前たちは夫婦か、それとも兄弟なのか。名は何という。ともあれ、敵討ちの次第を詳しく聞かせてくれぬか」



- ①相手の問い掛けに答えるときの言葉。「さこそうろう」の転で、そのことわざいいます、その意。
- ②旧国名。今の長野県。
- ③地名。長野県と群馬県との境にある峠。
- ④荘園領主から任命されて荘園を管理し、荘園内の一切の雑務をつかさどった役人。
- ⑤死んで。
- ⑥「下司」は身分の低い者、また、下男。喜之介が自分の仕事「下男」をへりくだって言った。
- ⑦友だち仲間。
- ⑧平安時代以降、代々にわたり貴族の家や武士の棟梁の支配下にいた侍。主人の家来。
- ⑨同じ空の下では生きてくれないという深い憎み。父の敵は必ず討つという意。「礼記」の「父之讎、弗与共戴天」による。
- ⑩ゆくえ不明。

とのたまえば、

「さん候。それがしは信濃の国、碓氷の庄司が伴、幼名は荒童丸父没してみなし子となり、当所にいやしき下司奉公。

この女と傍輩のよしみに承れば、この女が父坂田の前司と申せし者、平の正盛が家人物部の平太に討たせ、ともに天をいただかぬ恨みを一太刀報ぜんと狙えども、一人の兄は行き方知らず、女の力にかないがたき物語見捨てがたく、今宵清原の右大将の泊りに敵を見出し、思いのままに討ち取り、首持参仕る。

打ち物はこの太刀。この女が重代、智恵文珠の化身と伝えし、平泉の文珠宝寿が千日潔斎して打ったる利剣のしるし、片手なぐりの一打ちに御覧候え、この大首、女が持ったる髭一ふさ、両股両膝ただ一刀に、大の男七つに切ったる業物。今宵の御情を謝せんがため、この女が献上。御佩きがえとも思しめさば生前の悦び。なお御芳志には死骸を隠し給われ。さあ、今生に思い置くことはなし。いざ来い、刺しちがえんと、つっと寄る。

- ⑪打ち鍛えた武器。
- ⑫一重代の太刀の略。先祖伝来の太刀。
- ⑬智恵をつかさどる文珠菩薩のこと。刀鍛冶「文珠」の名を導き出す。
- ⑭今の岩手県にある地名。
- ⑮文珠と宝寿。刀鍛冶の名。「平治物語」に名刀鑿切丸を作った人物として文珠（文寿）の名が見える。
- ⑯神の加護を得るために、肉食や飲酒などをつつしみ、身を清めること。
- ⑰切れ味のよい刀剣。
- ⑱敵の男（平太）の体を、一振りで首・髭・胴・両股・両脛の七つに切ったことを表す。
- ⑲名工が鍛えた、切れ味のよい刀。
- ⑳時に応じ、とりかえてさすために用意しておく刀。
- ㉑（今から死のうとしている二人の）死ぬ前の喜び。
- ㉒好意ある行き届いた心遣い。
- ㉓生きているこの世。

と言葉をかけたので、まず、喜之介が進み出ます。

「私は信濃の国、碓氷の庄司の息子で、幼名を荒童丸といました。父が亡くなってみなし子となり、この宿場で奉公をしておりましたが、この小糸は傍輩です。

聞けば、小糸の父坂田の前司は平正盛の家来の物部平太に討たれたとのこと。不倶戴天の敵とつけねらい、なんとか一太刀でも浴びせたいと狙ってはいるものの、一人の兄は行き方知らず、女一人ではなしとげがたい話とのことなので、見捨てるわけにもいきませんでした。が、今夜、清原の右大将の宿で敵を見つけ、首尾よく討ち取って、こうして首を持参した次第でございます。

敵を討った太刀は、小糸の家に先祖伝来伝わる名刀、平泉の名工で文珠菩薩の化身と伝えられる文珠とその弟子の宝寿が千日間身を清めて打ったすばらしい剣です。それが証拠に、片手の一振りです、この大首・小糸の持つ髭一ふさ・両股・両膝と、大の男を七つに切ってしまうというすぐれもの。今夜のお礼に、頼光殿に小糸から献上いたします。佩きがえの剣として使っていただければ本望でございます。

ここで私どもは自害する覚悟でありますので、死骸の始末をどうぞよろしくお願いいたします。もうこの世に思い残すことはありません。いざ、差し違えよう」と言って喜之助は小糸に近寄りました。



①蓮の花のこと。

②きらきらと細かく光る形容。  
③波のわき立つように強く光ることの形容。

④中国古代の名剣二振の名。「干将」は春秋時代の呉の刀工、「莫邪」はその妻の名。二人でつくった名剣の雄剣に「干将」、雌剣に「莫邪」と名付けたという。ただし、「雷換という者天文を考え」て手に入れる名剣は「童泉」「太河」で、説話に混同が見られる。

⑤鷹狩り。

⑥名はそのものの実体を示すので。

⑦『平家物語・剣巻』その他に見える源氏累代の重宝とされる剣。

⑧日本の国。

⑨あとで。

⑩貴人の仰せ。

「やれ渡辺、あれとどめよ」

と押し分けさせ、太刀を抜いて御覧あれば、明々として芙蓉の  
開くがごとく、焼刃は星のつらなるがごとく、光は波のわく  
がごとし。

「唐土晋の武帝、天下を治めて、呉国の方に紫の雲氣立つをあ  
やしみに、雷換という者、天文を考え、土中を掘って干将莫邪  
の二剣を得たり。然るに、この宿にあたって紫の雲氣たな引き  
しこと、遠き異国の昔を思い、必ず名剣あるべしと鷹野にこ  
とよせ一宿せしに、今宵この太刀手に入ること、源家の武功  
天にかないしその威徳。首を討つあまりの切つ先、風にも散る  
髭を切り、両膝かけて落ちたること、日本無双の名剣。名は体  
を顕せば、すなわち髭切膝丸と名付くべし」  
と、謹みて頂戴あり。御子孫長く伝わりし和国の宝となり  
ける。  
「さて、その女に兄もありとや。重ねて故郷へ送るべし。荒童  
には我が頼光の光をゆずって、碓氷の定光と名乗り奉公せよ」  
との御諚の趣、二人はあつと頭をさげ、悦び涙を流しける。

が、頼光はすかさず、「渡辺、早く止めんか」と、二人を押し分けさせました。そして、献上の太刀を抜いて御覧になると、蓮の花が開いたような明るい美しさで、刃渡りは星がつらなるようにきらびやか、放つ光は寄せくる波のように力強いものでした。

頼光は、「中国の晋の武帝が天下を治めていた頃、呉の国に紫の雲氣が立つのを不思議に思つて、雷換という者に調べさせ、土を掘り出して干将・莫邪の二振りの剣を得たという。私も、この宿近くに紫の雲氣がたなびいていたので、遠い異国の話を思い合わせ、ここに必ず名剣があるはずと思ひ、鷹狩りにこつつけて宿ることにしたのであつたが、今夜こうしてこの名剣を手に入れることができたというのは、源家の武功が天に届いたしるしじゃ。首を討つた勢いで、風にもなびくような髭を切り、さらには両膝を切り落としたというのだから、日本一の名剣のはず。これにちなんでこの刀は髭切膝丸と名付けることにしよう」

と、つつしんでこの刀を受け取りました。この名剣は、源氏代々に長く伝わり、日本国の宝となつたのであります。

「小糸には兄がいたのであつたな。あとで故郷に送り届けてやろう。荒童の方は、わたしの名から光の一字をゆずるから、以後は碓氷の定光と名乗るがよい。以後はわしの家来となつてしっかり働いてくれよ」とのお達し。二人は頭を垂れ、「わつ」とうれし涙を流しました。

①「かかりし所へ」の転。そこへ。

②殺した。

③勝手気ままに。

④互いにはりあい争う。

⑤宿駅で武士や一般庶民を宿泊させる食事付きの旅館。  
⑥前出「下司」に同じ。身分や素姓の卑しい人。  
⑦御家来。

⑧旅籠の出女が旅人を呼び込む決まり文句。

① かつし所へ平の正盛、大勢引率し、門をたたいて、

「やあやあ頼光、かたじけなくも右大将殿の御前近く、人を殺めしあばれ者を引っこみ、天子同然の右大将殿をかるしむるは朝敵にもまさったり。女童に繩をかけ、頼光渡辺主従ともに切腹せよ。異儀に及ばばふんごんで、かたはしにふみ殺さんと、傍若無人にののしったり。

渡辺「くつく」と吹き出し、

「ヤイ、天子同然とは誰がこと。おのれら腕はかなわず手は立たず、口ばかりは人らしく、官位を以てのおどしはくわぬくわぬ。さりながらぎしみ合うもおとなげなし。さあ渡す。請けとらば取ってみよ」

と、門の戸さつと押し開き、すつくと立ったるその勢い、正盛と、主従色ちがい、膝わなわなとぞなりにける。

荒童続いて飛んで出で、

「これ旦那、宵までは旅籠屋の下主喜之介。今は頼光の御家人碓氷の定光。渡せよ出せと言わずとも、幸いここも旅籠屋なり。ここへ来て絡め取れ。入らんせ泊らんせ、泊りじゃないか

と、そこへ、平正盛が大勢を引き連れてやってきて、門をたたき、

「ヤアヤア頼光、かたじけなくも右大将殿の御宿所で人を殺したならず者を引き入れたとは、天子様同然の右大将殿を軽んずるしわざ。朝敵よりも罪が重い。女と小僧に繩をかけ、頼光と綱は切腹せよとの命令じゃ。抵抗するなら宿に踏み込んで、片っ端から踏み殺すぞ」と勝手気ままにののしっております。渡辺綱は「くつく」と笑って、

「やい、天子様同然とは誰のことじゃ。おのれら、力もなく腕もないくせに、口ばかりは達者じゃな。官位をかさにきた脅しなどなるともない。しかし、こんなところで争うのも大人げない。さあ二人を渡すから、受け取れるものなら受け取ってみよ」

と言いつつ門を押し開き、すつくと立ちふさがるその姿に、正盛一行は顔色が変わり、膝もわなわなと震えるのでした。荒童の喜之助があとから飛び出してきて、

「宵までは旅籠屋の下男喜之介であったが、今は頼光の家人碓氷の定光じゃ。『渡せ。出せ』と言わずとも、ここは旅籠屋。はやく来てつかまえてみる。いらっしゃい、おとまりなさい。

- ① 野菜、また色々なものを粗く切り刻んで入れた汁。
- ② 胴を横に輪切りにすること。
- ③ 冥途の道は一緒に泊まる客がなくて、ゆつたりとしていられる、という意。
- ④ 八熱地獄の二で、亡者を猛火で焼き苦しめるという。「焼物」の縁。
- ⑤ 「水風呂」は一説に「据え風呂」の転で、風呂桶の下に直接かまどを取り付け、水を沸かす普通の風呂という。「焦熱地獄」の連想による。
- ⑥ たらいなどに湯や水を入れ、その中で簡単に体の汗などを洗い流すこと。
- ⑦ 八熱地獄の二で、銅が熱湯のようにたぎるところもあるという。亡者を間断なく苦しめる地獄で、無間地獄とも。「浴びる」を掛ける。
- ⑧ 他人よりおくれてその場所につけること。
- ⑨ 鬼神ならばともかく、鬼神ではないのだから（恐れる必要はない）。
- ⑩ 後にひかえるもの。
- ⑪ 勇みはじめ。力み出し。

- ⑫ 一人残らず討ってしまおう。
- ⑬ 「火水になる」は危険な状態に至ることを言う。激しい勢いで戦った。
- ⑭ 真正面。
- ⑮ うで。戦う意か。
- ⑯ まっすぐ縦に切りさくこと。
- ⑰ 輪切り。胴などを横に切ること。
- ⑱ はげしく横に切りはらい。
- ⑲ はげしく追い散らす。
- ⑳ よれよれに乱れるさま。

え。旅籠の料理はお望み次第。頭から爪先まで、刻んで刻んで

でぎくぎく汁。真つ二つに胴切りの血生臭い焼物。冥途の道は

相宿なし。焦熱地獄の水風呂も沸いてござんす。ざつと行水阿

鼻地獄。泊まらんせ泊まらんせ、泊まりじゃないか

と招きける。右大将高藤遅れ馳せにかけ来り、

「やあ、臆したるか正盛。頼光渡辺なればとて、鬼神にてもあ

らばこそ。後詰めは高藤」

と、言うより正盛いきり出し、

「乗り込んで踏み潰せ」

「承る」

と切つて入る。源氏方にも、

「あまさじ」

と、両勢どつと入り乱れ、火水になれとぞ戦いける。

頼光は忍びの旅、小勢の供人大半討たれ、定光・渡辺ただ二人、

責め来る敵の真つ向腕骨、胴切り縦割り車切り、薙ぎ立て薙

ぎ立て追い捲くる。さしもの大勢、しどろになつて見えけるが、

近郷の農人浪人、右大将が威勢に与し、我も我もと入れ替え入

旅籠の料理はお望み通り。野菜のように頭から爪先まで切り刻んで入れた、ぎくぎく汁にしようか。真つ二つに切つた胴を血生臭い焼物にしようか。冥途の道に相宿はおらぬぞ。

焦熱地獄の風呂も沸してある。阿鼻地獄の行水がよいかな。さあ、お泊まりなさい、お泊まりなさい」

と招きよせました。右大将高藤はようやく駆けつけてきて、

「正盛、気後れしたか。頼光・渡辺綱といつても、鬼神でもあるまいに、わしが後詰めに控えておる。それ行け」

と言うやいなや正盛は勇み立ち、

「さあ、乗り込んで踏み潰せ」

「承知しました」

と、どつと攻め入りました。源氏方も、

「二人も打ち漏らすな」

と応戦し、両軍入り乱れて、はげしい戦いになりました。

頼光は、お忍びの旅ゆえお供は少なかったのですが、その大半が討たれてしまい、残るは定光と渡辺綱の二人。攻め来る敵を真つ向から切りつけ、胴を切り、唐竹割りに切つたりしつ、追い散らしました。

さすがに数を誇る敵軍も敗色濃厚になつてきた時、近郷の農民や浪人たちが右大将に味方して「我も我も」と弓矢を持って敵軍に加わってきました。

① 気持ちはますます勇み立つが。

② 遠くから飛ばして敵を撃つ武器。ここは飛んでくる矢。

③ 身をかすって過ぎる矢。

④ のちの時代。後世。

⑤ わずかなきず。恥。

⑥ 高く造った塀。

⑦ 大勢で入り込む。

⑧ うるさい。面倒だ。

⑨ 門のとびらの下のすきま。

⑩ 二本の柱の上に切妻破風(きりづまはぶ)造りの屋根を棟高くつけた門。

⑪ 屋根を、瓦でふいてある。

⑫ 一尺以上。「尺」は長さの単位で、およそ三〇センチ。

⑬ 断面が正方形の柱。

⑭ めいめいに。各自。

⑮ 土台石。

⑯ 仏法守護のため寺の門の左右に立つ二王。仁王尊。  
⑰ 通行をさへぎるものがない。

れ替え、射る矢は雨のごとくなり。定光も渡辺も心は弥猛には

やれども、飛び道具を防ぎかね、

「なんと定光。もし我が君に掠り矢でも当たっては末代の瑕瑾

ひとまず落とす奉らん」

と、あなたこなたと見巡れども、皆高塀に巡りは堀、裏門堅

く閉ざしたり。

「この門一つ押し破るは易けれども、後より寄せ手の込み入る

も喧しし。上へそつと持ち上げて、蹴込みの下より落とす申さ

ん」

「もつとも」

と、棟門高き瓦葺き、尺に余りし四角柱、二本を二人が面々

にひっかかえて、

「やあ、えいや、うん」

とさし上ぐれば、さしもの大門礎離れ、天より吊つたると

くなり。頼光も笑わせ給い、

「門を守る金剛力士二王を家来に持ったれば、我が行く先は関

もなし。女は兄が行方を尋ね、兄弟打ち連れ来れ。一足もは

彼らの放つ矢は雨のように降ってきますので、定光も渡辺綱も飛び道具は防ぎようがなく、

「定光。もし万一この矢が一本でも頼光殿にあたりすれば、我ら末代までの恥辱となるぞ。ここは、ひとまず、逃げることにしよう」

と、まわりを見まわしますが、どこも高い塀

に堀、裏門は堅く閉ざされていました。

「裏門を押し破っていくのは簡単だが、また敵が攻め寄せて来よう。門を上へ持ち上げて、

頼光殿はこの蹴込みの下より落ちのびさせることにしよう」

「わかった」

ということ、瓦葺きの高い棟門を支えている、太さが一尺以上もある四角い柱二本を、

二人がそれぞれに抱えて、

「やあ。えいや、うん」と持ち上げました。すると、あれほど大きかった大門が礎から離れて、天から釣ったよう

な形になりました。それを見て頼光も笑い、

「門を守る金剛力士二王を家来に持っているから、我が行く先に妨げとなるものはない。小糸は兄の行方を尋ね、兄弟一緒になつてから私のもとに来られよ。」



①美濃の国。今の岐阜県。  
②だいたいのところ。

や落ちよ。我は美濃路を登るべし。汝らもあらましに切り散らして追い付け」

と、悠々として退き給う御有様ぞ不敵なる。

その隙に寄せ手の軍兵、「あますまじき」と込み入ったり。

両人、

③下級の武士たち。雑兵。  
④手間がかかってはかどらない。

「今は心安し。雑人原一人ずつ切っては手間遠、はか行かず。後日にこの門建て直してやるばかり」

⑤それぞれの手に。  
⑥酒に酔った象。狂暴なものたとえ。

⑦空を飛び回る龍。  
⑧刀を横に払って切りまくる。

⑨もちこたえられればともかく。

が岩を割り、飛竜の波を叩くがごとく、はらりはらりと薙ぎ立つる。馬も人もたまらばこそ、さしもの大勢打ちひしがれ、高藤正盛力なく、後をも見ずして逃げ去れば、

⑩とくとく。はやくはやく。

「おお面白し、心地よし。君に追いつき奉らん。とうとう急げ、どうどうどう」

⑪街道。  
⑫古くから仕えていること。

⑬新たに仕えること。  
⑭日天子と月天子。また、梵天と帝釈天。

⑮四人のすぐれた者たち。もと仏教の世界観による四守護神。世界の中央に須彌山（しゆみせん）という高山があり、その中腹の天を東方の持国天、西方の広目天、南方の增長天、北方の多聞天または毘沙門天とし、それぞれを主宰する王の総称。

参の碓氷の定光奉公始め、門に手柄を顕して、二王二天に四天王出ずべき印と聞えける。

私は美濃路へ向かう。おまえたちも敵軍を追いか散らして、わしのあとを追ってくるのじゃぞ」

と、悠々たるさまで、退いて行きました。その姿はまことに大胆不敵なものでした。

その間に、寄せ手の軍兵が、「一人も逃がさぬ」と攻め込んできましたが、二人は、

「もう安心じゃ。雑兵達を一人ずつ相手にしては手間がかかる。後日、門は建て直すことにしよう」

と言いつつ、門の柱を引き抜き、それぞれが持ち上げて、大勢の兵士を左右になぎ倒して

いきます。その姿は、酔象が岩を割り、飛竜が波を叩くようで、敵軍はばらばらとなぎ倒

されていきます。馬も人もひとたまりもなくやつつけられていき、あんなに多かつた軍勢

はすべて打ち砕かれ、高藤と正盛は跡も見ずに逃げていってしまいました。綱と定光は、

「おお、気が晴れた。では、頼光殿のあとを追うことにしよう。さあ、急げ急げ」

と、武勇一筋に街道を駆けていきます。古参の渡辺綱と新参の碓氷の定光、やがて一門で

手柄を立て、四天王となる二人の活躍ぶりでありました。

## こもちやまんば 嬭山姥 第二段

- ① 佐賀県の地名。百済へ渡る大伴狭手彦（さでひこ）を見送り領巾（ひれ）を振り続けた佐用姫が石になってしまったという伝説が『古事記』『万葉集』にも見える。
- ② 領巾。細長い薄布。の意をあらわし、また、「互（想）いが深い」の意をあらわし、また、「互（互）を言い起す」。
- ③ 「縁篇」は、縁組みの結果、親類縁者になること。
- ④ 婚約。「縁篇」は、縁組みの結果、親類縁者になること。
- ⑤ 月にかかる枕詞。時間が長かった意も表す。
- ⑥ 色気盛り。時間がかかった意も表す。
- ⑦ 事実を曲げたり、でっち上げたりして他人を悪く言うこと。
- ⑧ ゆくえ。
- ⑨ 間違になる意の「離（か）る」とかける。

- ⑩ つらいとき。
- ⑪ あさはかな考え。ここでは「自害」を遠まわしにあらわす。
- ⑫ 寝室の保安をとりしきる役目の者。
- ⑬ 一晩中寝ないで番をすること。また、その者。
- ⑭ 女性。
- ⑮ 女性ばかりが住んでいるとされる伝説の島。女性ばかり集る奥御殿をたとえる。
- ⑯ 高級女中職にある女性の敬称。
- ⑰ 「ここな」は、ここにいる、の意。「子」とともに、説教する立場で姫を一段低く見た呼び方。
- ⑱ 世間のいろいろなわざ話。また、特に色恋の話。
- ⑲ 元気づけ慰めること。
- ⑳ 病気。

㉑ 忠言されても。

①まつら 松浦潟ひれふる山の石よりも、積もる思いは猶重き、岩倉大納言兼冬公の御娘、澤瀉姫と申せしは、源の頼光と御縁篇の契約も、互に待てば久かたの、月日重なり年も立ち、情け盛りもいたずらに、右大将高藤が讒言ゆえ、頼光は行き方なく、御文のおとずれさえ、枯野に弱る秋の虫。

「世に便りなきうき節に、もし御短慮のこともや」と、御寝間の奉行寝ずの番。女中の外は男ませずの大役は、女護の嶋に異ならず。

お局の藤浪、お側に立ち寄り、「のうここなお子、なぜにうきうきなされませぬ。これほど大勢集まって浮世咄の高笑いも、皆お前をいさめのため。お煩いでも出た時は、親御様への御不孝、日ごろのお気には似合いませんぬ」と、いさめられても勇まぬ顔。

松浦潟の領巾振山で夫を想うあまり石になつてしまった佐用姫よりも、積もる恋の想いはもつともつと深い、岩倉大納言兼冬公の娘沢瀉姫。源頼光とすでに言い交わした仲なのに、祝言の日も月日は過ぎていくばかり、ただむなしく待ちわびるだけです。頼光はというと、清原の右大将高藤の讒言によって、行方不明、手紙さえ届くことがなく、姫は冬の寒さに弱りきった秋の虫のようにしおれきっています。

「この世に頼りとするものないつらさのあまり、まさか早まったことをなさつたりするのでは」などと、おそばに控えて、寝ずの番をつとめる女中たちは心配しています。まわりにいるのは、女性ばかり、男が一人もない奥のあたりは、女護の島のようなのです。

お局の藤浪が姫のお側に寄り、「のう、姫様。どうして陽気になされませぬのじゃ。こうして大勢が集まってあれこれと世間話をして笑っているのは、すべてあなた様を元気づけるためなのですぞ。ご病気にでもなつたりすれば、ご両親への不孝になります。日ごろ孝行なあなたにも似合いませんぬ」と諫めますが、少しも元気は出てきません。



① うつつうしい。

② 婚礼が行われるめでたい日。

③ 妊娠するはず。妊婦が五か月目に腹に布を巻くことからいう。

④ あまつさえ。その上。

⑤ 宛先。

⑥ 頼光がお問になる。

⑦ 共寝用の長い括り枕「無い」の意に掛け、次の「長の夜」を言い起こす。

⑧ おれは。自分は。

⑨ 涙が次々と出るようすを表わす。  
⑩ 侍女。主人に仕え、その身の世話をする女。  
⑪ 召使いの一種で、台所と奥の間や客間との間の部屋に控え、茶の準備や給仕に奉仕した。諸使用の一種で、腰元と下女との間にあって、その通りでございませう。

⑬ 何ということでしょう。  
⑭ めそめそと。

⑮ 16にががしい。気に入らない。

⑯ やめてください。「たも」は「たもれ」の「れ」がない形で、女性が用いた。

⑰ 実在の煙草売りをモデルにしているという。

⑱ 気性のさつぱりとした人。

⑲ 世情に通じていて風流で洒落た人。

⑳ まじりに。

㉑ 子どもの遊びで、鬼ごっここの一種。子どもが二手に分かれて陣につき、陣と陣の間にいる鬼につかまらぬように向かいの陣に移る遊び。

㉒ 青松葉を柔らかくして作った煙草の代用品。「待つ」と掛け、「やはらこき」を言い起こす。  
㉓ 「やわらかい」の転。なごやかな。

「ああ、また局の氣づまりな異見聞きとうない。日本国の花もみじを今この庭に移しても、なんの心がいさもうぞ。吉日極まり頼光様へ嫁入りして、今ごろはおなかに帯をも結ぶはずを、あの右大将づらめにさまたげられ、あまつさえお行方知れず。どこをあてどに一筆の、問合わせの文さえ長枕。この長の夜を誰と寝よ。おりや泣くまいと思えども、涙がどうも堪忍せぬ。こらえてたも」

とはらはらと、玉をつらぬく御目もと、腰本茶の間仲居まで、「お道理様や」と諸共に、もらい涙にくれければ、お局は気の毒がり、

「ああ、なんぞいの。お力は付けもせで、そなた衆までめろめろと。いまいましい、おいてたも。やあ、それはそうと煙草売の源七はまだ見えぬか。気さく者の通り者、今にも来たたら、お姫様まじくらの向い鬼して遊ぶまいか」

「こりや気のかわった思い付き。早うたばこが来たれかし。たばこたばこ」

と待つ宵の、松葉たばこのやわらこき、女中仲間ぞにぎわしき。

「ああ、そなたの気詰りな意見はもう聞きとらぬ。たえ、日本じゅうの花や紅葉をこの庭に移してきたとしても、わたしの心は晴れませぬ。日柄のよい日に頼光様のもとへ興入れし、今ごろはきつと身ごもつて腹帯など巻いているはず。なのに、あの右大将とやらにさまたげられて、頼光様まで行方知れず。消息を尋ねる手紙さえどこへ出してよいかわからぬ。頼光様からの文も、いくら待っても届きませぬ。長枕を敷いたところでこの長い夜を誰とともに過せというのか。泣くまいと思ふものの、涙は堪えきれず流れてしまふ。許しておくれ」

と、こらえてもこらえても流れ出る涙が袂にはらはらと落ちていきます。そばに控える腰元はもちろん、茶の間に控える者、仲居までもが、「まことにもつとも」と、皆一緒にもらい泣きしています。藤浪は困ってしまい、「ああ、ああ、はげますはげますが、あなた方まで泣いてしまつては。おやめなさい。ああ、それはそうと、煙草売りの源七はまだかいかの。あの気さくな粋人が来たたら、お姫様といつしよに鬼ごっこでもして遊ぶうではないかいの」

「それは気分も変わつてよい思い付き。早く煙草売りが来ないかねえ」と、待っているさまは、松葉煙草のようにやわらかくて、やさしく和やかな女達の賑わいです。

- ① 色恋に夢中になり。
- ② つらい境遇に下り。「うき世」はつらい世。「坂田」に「くだり坂」「時行」に「くだり坂の」時をかける。
- ③ 人に知られないでいる。
- ④ あだ。父が殺されたうらみ。
- ⑤ 離縁状。多く三行半に書かれたうらみ。
- ⑥ 「骨柳」は「行李(こうり)」のこと。皮で作ったかぶせぶた式の箱状の入れ物。(涙の)川と「皮」を掛ける。
- ⑦ 生きていくための仕事。
- ⑧ かついで。

⑨ 煙草売りの売り口上。「刻みたばこ」は、タバコの葉を細かく刻んだもので、キセルに詰めて吸う。「油引かず」とは上等の刻みタバコのこと。下等なタバコは、刻みやすいように包丁や葉の面に油を引いたので、その臭気が残っている。

- ⑩ 動きやすいように、着物の裾をまくって後ろの端を帯にはさむこと。
- ⑪ おろしなさいな。「しゃい」は「しゃり」の音便形で、尊敬の気持ちを表す。
- ⑫ お考え。おほしめし。
- ⑬ 由緒があり格式の高い家。
- ⑭ 酒色・ばくちなどの遊興好きで好色な人柄。しくじる。
- ⑮ なってしまっただろうですね。
- ⑯ 遊女。遊郭。周囲を囲われた一定の区画に、多くの遊女屋が集まっていた。
- ⑰ もとは内裏をさす言葉。こは、岩倉家の邸宅。
- ⑱ 願。
- ⑲ 女郎の一つも買ったことがある、という謙遜の言い方。また、沢山の中から特によいもの一つ選んで買うこと、という。
- ⑳ 三味線に似た小形の絃楽器で、バイオリンのように、弓で弾く。
- ㉑ 酒席などで、地口・秀句などを即興で作ること。
- ㉒ 遊蕩。道楽。
- ㉓ 一式。ひととおり。
- ㉔ 「奥」に「置く」を掛ける。
- ㉕ 小歌の名。「吉野たばこ」を言い起す。
- ㉖ 琴・三味線・胡弓などの弦楽器を、二人以上で合奏すること。
- ㉗ すでに昔のこと。ほんの少し前でも、今日から見ればもう昔のことである。

昔は色に上りつめ、今はうき世に下り坂田の時行とうずもれし名も、父のあた晴らさんと思う志。飽かぬ夫婦の中をさえ、三くだり半の生きわかれ。袖は涙の皮骨柳を、今は身過ぎとひつかたげ、

「刻みたばこ油引かず」  
と売り歩く。

「そりやたばこが来たわ」

と、腰本中、「早う早う」と呼び入れ、

「これ源七、まずこの皮籠は預かる。尻からげもおろしやいの。お姫様より御意がある。そなたも以前は歴々で、悪性ゆえにし

そこない、そのなりになりやっただげな。傾城とやら廓とやら、

大内にはめずらしき三味線の一曲を常々のお望みゆえ、これ

三味線も調え置く。さあさあ所望」

とありければ、

「ああ、つがもない。もつとも以前は傾城の一つ買ひも仕り、

三味線鼓弓浄瑠璃文作、のら一卷の諸芸なら、こつちへ任せ

て奥座敷に、『よしのの山』のつれ引きも、昨日の昔今日はま

きて、こちらは、煙草売りの方。昔は色恋沙汰でうわさになった身ですが、今はしがない煙草売り。とはいえ、坂田の時行が本名で、父の敵討ちを果たそうという志を持ってます。その志のために、仲よく暮らしていた妻にわざと三行半をつきつけて生き別れになり、いまは他人同士になってしまいました。そうして、革行李を肩に担ぎ、「刻み煙草の油引かず」と売り声をあげながら行きますと、「そりや、煙草売りが来ましたよ」

と、待ちかまえていた腰元たちは「早く早く」と中に呼び入れます。

「これ源七さん、まずこの革行李はこちらに預かっておきましょう。尻からげももともどしてくだされ。お姫様からたつてのお願いがあります。あなたは、以前は立派なお方で

したのに、女関係でしくじつて、そのような姿になってしまったとか。傾城とやら廓とやら、こちらのようなお屋敷にはなじみのない三味線の曲を前々からお望みで、ほれ、こ

こに三味線も用意しました。さあさあ、よろしく頼みますよ」

ということなので、

「ああ、しようのないことを。たしかにわた

しは廓遊びの一つもしましたし、三味線やら鼓弓、浄瑠璃、文作やらと、道楽者がやる一

通りのことは身につけました。『吉野の山』の曲を合奏したりもしましたが、それはもう昔

の話、いまは吉野煙草の刻み売りが商売ですよ。

- ①大和国吉野で産した煙草。良質であった。  
 ②「ひしこ」は鱈や鯖を塩漬にした、下等な食物。茶づけのタネにしたりする。場違いなことをあらわす。  
 ③ひたすら。

④なにとぞ。丁寧に頼むときの言葉。

⑤もともと芸道に熱心な性質であり、の意。「下地」は生まれつき、本性の意。

⑥あてもなくやぶれかぶれの出まかせにすること。えいままよと。

⑦妹の糸萩を暗示する。

⑧おちぶれはた姿。糸と胴が触れないためのも。「撥」は「罰」に掛ける。

⑨三味線の胴の下部につけた駒。糸と胴が触れないためのも。「撥」は「罰」に掛ける。

⑩三味線の音を小さくするために用いる紙製の駒。忍び弾きに用いる。貧寒・零落の境遇にあることを表し、また、軽いので旅の用具とした。

⑪紙で作った衣類。貧寒・零落の境遇にあることを表し、また、軽いので旅の用具とした。

⑫登場する八重桐の身の上を表わす。涙のたとえ。

⑬夫婦。ここでは八重桐と源七の関係。

⑭遊女の太夫(たいふ)の異称。

⑮冬景色の、寒く草木が枯れた寂しいさま。「松」を受ける。落ちぶれたことを表す。

⑯貴族の邸宅・寺社などの周囲に巡らす、土を築き固めて造った塀。

⑰三味線はおもに遊郭でもはやされた楽器。それが大内(武家の屋敷)で弾かれているので「めずらしい」とし、「洒落の浮世にめぐり」きたとする。

⑱どれほど。

⑲しゃれた世の中になったことよ。「めぐりくる」は「車」を言い起す。

⑳高貴の人の邸宅の、来客が車を寄せて乗り降りするための入り口。平安時代には、母屋の正面の階のところであるが、後世には、母屋の東または西の妻戸の前に廂の屋根を延ばして出し、下に敷石を置いた。

㉑ここでは、近世に行なわれた俗謡小曲の総称。三味線を伴奏とする。

㉒前出の坂田前司忠時の子。

㉓替え歌。

㉔なんとかして。

た、吉野たばこの刻み売り。股引がけで三味線とは、茶づけにひしこの御望み。ひらさら御免」

と逃げ出るを、女房たち引きとめて、

「その言い様がもう面白い。何を言うもお気慰め、ひらに頼む」

としいられ、源七下地すきの道、

「てんぼの皮、やりましよう」

と、箱より出だす三味線の、糸は昔に変わらねど、引くその主

のなれの果て。親の撥ごま紙ごまの、音色やさしくひきなせり。

紙子の袖におく露と、ともに離れし妹背の中。あわれ昔は全

盛の、松の位も冬がれし、風呂敷づつみ行く先は、知らぬ旅路

にとぼとぼと、築地のかげに休らえば、

「やあめずらしい三味線。なんぼ大内がたでも洒落の浮世にめ

ぐりくる」

車寄せより立ち聞けば、

「はああ、不思議や。あの小歌は我が身廓にありしとき、坂田

の蔵人時行殿になれそめ、作り出だせし替え唱歌。かの人なら

で誰が伝えた。なつかしや。どうぞ入りこみ見たいものじゃ」

こんな股引をはいて、三味線を弾くなどと、まるで、茶づけにひしこいわしを乗せるようなお願いは、御免こうむります」

と逃げ出すのを女房たちは引き留め、

「そういう話しぶりが、ほれもう、みんなおもしろがっているのですから、何を話してくださってもかまいません。なにとぞお願いします」

と頼み込まれますと、源七もともと好きなことですから、

「ではまあ、どうなるか知りませんが」

と、箱から三味線を取り出し、おちぶれた身にひきかえ、昔にかわらぬ三味線の糸を、やさしい音色で弾きはじめるのでした。

さて、その三味線の音を、外で聞いている女の人が一人いました。夫婦の仲も離ればなれになり、全盛の松の位を誇った姿もいまはおとろえてしまい、あてもない旅路の空の下、風呂敷包みを背負ってとぼとぼと歩き、築地塀の陰で休んでいます。

「まあ、めずらしく三味線の音がする。こんなお屋敷で三味線をひくと、しゃれた世の中になったもの」

と、車寄せに立ってその音に耳を傾けます。

「あら、不思議なこと。この小歌の文句は、私が廓にいたとき、坂田の蔵人時行殿となじみになっていっしょに作った替え歌。誰から伝え聞いたのでしょうか。なつかしいこと。どうにかしてなかに入り、歌っているのが誰なのか見たいもの」

①口から出るままに。

②大坂の遊女町。瓢箪町など。

③遊女の代筆人。「傾城」は遊女。「右筆」はもと武家で文書を書く係として仕える人などという語。ここでは遊女の代りに文書を書く人の意。

④色恋に関する書状。

⑤「恐らく」の誤りか。原本「おそく」。

⑥平仮名を書くのに用いる筆。「かなはぬ恋もかなう」と掛ける。「右筆」「状文」「二筆」の縁で用いた語。

⑦筆跡がやわらかくくねるさま。

⑧かすれた墨跡。

⑨まだ男性に接しない女性。以下、恋の対象としての女性の種類。

⑩側室。そはめ。めかけ。

⑪家で伝えている奥義。

⑫さても。

⑬男女が取り交わす恋文。色文。

⑭女中の名。

⑮いらっしやい。「おじやれ」の転。

⑯「そなた」の最初の文字「そ」に「もじ」をつけた文字ことば。

⑰お目にかかること、の意の文字ことば。目見え。目通り。「様」は敬意を表す。

⑱花の名。「言うかお」に掛ける。

⑲庭園の通路に、少しずつ間隔をおいて配置された敷石。

⑳しなやかに身を動かすさま。しずかに歩むさま。

㉑狭い歩幅で急ぎ足に歩くさま。

㉒並んでいた「並み」は「無い」を掛ける。

㉓もと、宮中に仕える女性。ここは岩倉家に仕える女性。

㉔大勢の人の前や暗れがましい所などに出て、その場の空気に押されて緊張し、気後れがすること。

㉕どちらにしても。

と出放題に声はりあげ、

「これは難波の遊女町に、たれ知らぬ者もない傾城の右筆。濡

一通りの状文ならおそおそわたしが一筆で、かなわぬ恋も仮名書

筆。びらりしやらりのかすり墨。生娘・遊女・手かけ者・後家

・尼・人の女房まで、段々の書き分けは、わたしが家の伝授ご

と。もしそんな御用ならお頼みあれ」

とぞ言い入れたる。奥には女中耳をすまし、

「さつても変わった売物。いざ呼び入れて痴話文書かせてお慰

み。更科・掃部、呼んでおじや」

「あい」

と答えて、二人づれにて走り出で、

「これ、のう。傾城の右筆殿はこなたか。この御殿の姫君、何

やらそもじに御用あり。こなたへいざ」と手をとれば、

「はあ、御用とは何ならん。おめもじ様に」

と夕顔の、庭の飛び石すなすなすな、ちよこちよこちよこと奥

座敷へ、何の遠慮も並みいたる、内裏女郎に場うてせぬ、いず

というので、いきなり大声をはり上げ、

「私は難波の遊女町で誰知らぬものもない傾城の代書屋でございます。私が一筆書けば、

かなわぬ恋もたちまちかないます。生娘に遊女、お妾さんに後家さん、尼さんに他人の女

房まで、相手次第に書き分けるのが、わが家に伝わる秘伝。どんな用でも承ります」

と屋敷のなかにむけて言い入れました。奥の女中が聞いて、

「これはまた変った売物なこと。では、ここへ呼び入れて恋文でも書かせて楽しみましょう。更科と掃部、呼び入れなさい」

「はい」と答えて、二人連れで走って出ていき、

「これこれ。傾城の代筆屋はそなたか。こちらのお屋敷の姫君がそちに御用があるそうじや。さあ、こちらへお入りなされ」

と手をとりまします。

「ハア、どんな御用でしょうか。とにかくお目にかかりましょう」

と言いつつ、夕顔の咲いている庭のなかを抜けて、奥座敷へはばかりることなく入っていき、

その場に並み居る女房たちにもまったく気おくれすることない様子はいかにも遊女あがりらしい様子でありました。



①色道のくろうとで、遊女・芸者の類をさす。

②不意のことで驚き、発した語。もと、祈りの言葉。

③ちよつと顔をかくすこと。

④親しい間柄であるのに、他人行儀でよそよそしい。「それと見」を掛ける。

⑤男としての義理や道理をわきまえない男を、女性がののしっている語。

⑥人前でかく恥。「のけようか(あえてしてしまふ、の意)」の転。

⑦しまおうか。「のけようか(あえてしてしまふ、の意)」の転。

⑧喜びやうれしさなどでじつとしていられないほどの胸の内の思い。

⑨人目が関のように邪魔をしている、の意。

⑩横目。流し目。

⑪紙子を着ていることから、名前の代りにこのように呼んでいる。

⑫態度。身のこなし。もと、棲のさばき方の意。

⑬きつと。おそろく。

⑭そのようなすがた。紙子は零落した者が着た。

⑮「あつた」の転。軽い敬意を表す。

⑯同じ河の流れをくむ(飲む)のも前世に決まっていた縁(とく)が、こうして会つたのも何かの縁。「他生」は、仏教で、生れる前の世界のこと。前世。

⑰抑えようとしても抑えきれないように込み上げ。

⑱「浮き」「憂き」の両意を表し、遊女のつらい勤めをさして用いる語。

⑲他の本では「萩野屋」となっているものもある。正徳・享保期に京坂で活躍した若女形をモデルにしていると考えられる。正徳二年(一七二二)春、大坂で上演した『ひがし屋』の中で演じた(長咄)がことに好評であったという。本話でも八重桐がこの長話をとうとうとくりひろげる趣向となっている。

⑳近世、廓の遊女の最高位。

㉑仲間うちや、その筋の者の中で代表的人物。人気者。

れそれ者と見えにけり。たばこ売りの源七も何心なくそば近く、顔と顔とを見合すれば、

「やあ、離別せし女房。南無三宝」

とこがくれの、女はそれと、

「みずくさき男畜生人でなし。あか恥かかせてのきようか」

と、飛び立つ胸も人目のせき。押ししずめ押ししずめ、心を

くだき、折々にしり目ににらむも恋なれや。姫君何の気もつか

ず、

「これ、のう、紙子。そなたの物ごし・棲はずれ、いかさま常

の女子でなし。そうしたなりになりやつたはさだめし深いわけ

あらん。一河の流れも他生の縁。つつまず語りや」

とありければ、

「ああ、どなたかはおやさしいお言葉。お尋ねなくとも言いと

うて言いとうて、胸のたぐる折しも、さらばおはなし申しまし

よう。

恥ずかしながら、わたしが昔は、うき河竹の傾城、萩野屋の

八重桐とて太夫中間の立者と、いわれしほどの全盛の末もとげ

さて、たばこ売りの源七がなにげなくそばに寄り、顔と顔を見合せ、

「あ、そなたは別れた女房。南無三」

と顔を背けます。が、女もすぐに気がついて、

「この、水くさい男畜生の人でなしめ。赤つ恥をかかせてやる」

と思いましたが、人目のあることなので気をしずめ、いらいらしながら時折にらみつけて

います。これもまた、恋のなせるわざであります。姫君の方は二人の様子に気がつかず、

言います。

「これこれ、紙子姿のそなた。その物ごしも身のこなしぶりも、どうも普通の女とは見えませぬ。そういう姿になったのはきつと深

いわけがあるはず。一河の流れも他生の縁と

いいます。かくさずに話してください」

と言うことばに誘われ、身の上話が始まりま

す。

「ああ、やさしいお言葉に感謝いたします。とはいえ、そのお尋ねがなくても、私から話したくてしようがなかったのです。包み隠さず、すべてをお話しいたしましょう。

恥ずかしながら、私はもとは、うき河竹の傾城の身でございました。その名も萩野屋の

八重桐といって、太夫のなかでもちよつとは知られたものでございました。が、全盛を誇るそのさなか、恋にやつれて、これこの通り

の身と相成った次第でございます。

- ① むなし恋。
- ② のぼせ上がって。夢中になって。
- ③ 豪遊する客。近世の公娼街に遊び、最上位の太夫妓を揚げて豪遊する客のこと。
- ④ なかでも。
- ⑤ だれそれ。わざと名前をはっきりさせないための方。
- ⑥ 遊女が初めて客をとること。
- ⑦ のぼせ上がって夢中になる。
- ⑧ 夢中になって。以下、「のぼる」→「登楼」→「切利天」→「宙」→「中二階」の連想による表現になっている。仏教で、切利天では常に娯楽嬉戯している。とされることから、恋が最高潮にある状態にたとえられ、これが高所にあるとされることから「宙」を連想し、同音ではじまりかつ「のぼる」ことから「中二階」へと言いつないでいる。
- ⑨ 普通より一段低く造った二階の部屋。
- ⑩ 小鯛を腹合わせにした形の正月用の飾り物。
- ⑪ 男女の仲のよい様子を連想させる。
- ⑫ 「駄」は馬の背負う荷を教える語。一駄は四十貫、一五〇貫。
- ⑬ 本来は米千石分の重量を積む船の稱。
- ⑭ 木やり・音頭は、皆で気をそろえて重い物を運ぶときに歌う歌で、小田巻の恋文の量が多いことを言う。直前の車を引くかけ声「えいやらさ」は木やりの文句の一部にもあり、「木やり」を言い出すきかけとなっている。「祈つてもまじのうても」はその対句となっている。
- ⑮ 下に打消の語を併せて、少しも、決して、の意。
- ⑯ 何の徴候もないさま。「け」は「気」。
- ⑰ 裾を一〇疋から十五疋、白いままにし、上のほうにいくに従って色が濃くなるようにした染め方。月がおぼろに霞んで上る意とうちかけのおぼろ染の両方の意を表わす。
- ⑱ 帯を縮めた衣服の上から打ち掛けて着る長小袖のかたちをしたもの。
- ⑲ 染めてない白い着物。新吉原の遊廓では、八月の八朔の紋日に、遊女がそろいで、この衣装をつけて仲の町に出る習慣であった。
- ⑳ 女性の腰帯の一つで、一幅の布をそのまましごいて帯にしたもの。しごき。
- ㉑ すわってよりかかり。
- ㉒ あんまりなこと承知できない、の意か。
- ㉓ 胸倉。胸の正面で、着物の左右の襟が重なるあたり。
- ㉔ 一生の大事。

ぬあだ恋に、のぼりつめてこの通り。夜な夜なかわる大臣の中も坂田のなにがしとて、水上げの初日よりふとあいそめて丸三年。何が互いの浮気盛り、のぼるほどにのぼるほどに、切利天の中二階。夜昼なしの床入りに、掛け鯛様と異名を受け、水もらさぬ仲なりしに、また同じ廓に小田巻という太夫、かの男にゆきついて、毎日百通二百通、書きも書いたり痴話文は大方馬に七駄半。舟に積んだら千石舟。車に乗せたらえいやらさ。木やりでも音頭でも、祈つてもまじのうても、微塵もない二人が仲、いよいよつって会うほどに、小田巻大きに腹を立て、忘れもせぬ八月の十八日の雨あがり、月は山よりおぼろ染の、打掛ひらりと取って捨て、白むく一つにひっしごき、脛もあらわに駈け来たり、わたしが膝にふうわりとんと居かかって、『これ八重桐、あんまり見られぬ。いやじゃぞや。さあ、男をたもるかたもらぬか。いやかおうか、おうかいやか。二つに一つの返答が聞きたい』

と、むなづくしをひつつかむ。こっちも一期の大事ぞと弱みを見せず、

と申しますのも、夜な夜なかわるお客のなかに、坂田の何がしといって、水揚げの初日から逢いはじめて丸三年。ふたりとも若い盛りで、互いののぼせあがり、夜昼なしの床入り、いつも二人でいるので、掛け鯛の飾り物のようだとあだ名がつくくらいに仲のいい二人でございました。ところが、同じ廓に小田巻という太夫がこの男に岡惚れしてしまい、毎日百通二百通と、書きも書いた恋文は馬に七駄半。舟に積んだら千石舟いっぱい。車にのせれば人夫を雇って木やり音頭で運ばねばならないほど。しかし、いくら祈つても小田巻の恋がみのる気配は微塵もありません。それどころか、ますます仲良くするので、小田巻は腹を立ててしまい、忘れもしません、八月十八日の雨のあがった月の出のころでした。おぼろ染の打掛けをひらりとぬいで白むく一枚になり、脛もあらわに駈けてきて、わたしの膝に乗って寄りかかり、『これ八重桐、あんまりな仕打ちではないか。サア、いますぐその男をこちらにわたせ。イエスカノーか、いますぐその返事をしろ』と、むなぐらをひつつかみます。が、こちらにしても一生の大事、弱みを見せるわけにはいきません。



- ① 酒に酔ってたわごとを言うもの意。「小田巻」と音が似ていることから悪口に用いた。
- ② 威光。威勢。威嚇。
- ③ たとえ：たととしても。
- ④ 慕わしい。
- ⑤ 「いき」は接頭語で、のしりさげすんでいうときに用いる。傾城め。
- ⑥ 今日普通にいう障子。
- ⑦ 携帯・保管が便利のように、棹の取り外し・継ぎ合わせのできる三味線。
- ⑧ ひのき科の常緑低木。よく庭に植えられ、地面をばうように広がる。「這」に掛ける。
- ⑨ ころけていて乗りかかり。
- ⑩ ツバキ科の常緑小高木。
- ⑪ なんてん。
- ⑫ (木樨南天が)折れたりきしんだりするさまを表わす語。「切り石」を言い出す。
- ⑬ 切ったそろい形の石を並べて造った石畳の道。また、その石畳。
- ⑭ まともにつむげの状態になること。
- ⑮ 「石」は量を表す単位。十斗。約一八〇リットル。「斗」は「石」の十分の一。升・合・勺と、順次十分の一ずつの単位。
- ⑯ 不利。負け。また、気後れ。引け目。
- ⑰ そのままでは済まされないうらう、の意。
- ⑱ 近世の公娼街の女郎屋で、遊女の身仕舞の世話や勤め方の取り締り、遊女・売のしつけをする中年女。以下廓に関する職が続く。
- ⑲ 高原・新町の廓で、太夫に随従している女郎。
- ⑳ 近世、京坂の遊廓・岡場所の揚屋・色茶屋にいる女中で、客への接待を務めとする。
- ㉑ 飯を炊くことを仕事とする女。
- ㉒ 当道座に属する剃髪した盲人の称。近世には幼年から師について平曲などの語り物や歌を習い、宴席に列するのを業とし、また、按摩・鍼治・金融などもしていた。
- ㉓ もみ療治をする職業の人。
- ㉔ 神を祭り、神楽を奏したり、神託を伝えたり、死霊の口寄せなどする人。一定の神社に属しない歩き神子もいた。女性が多い。
- ㉕ 特に、修験道の行者。
- ㉖ 占い者。売卜者。客寄せの呼び声が「うらやさん」であったことからの称。
- ㉗ 竹の皮草履の裏に牛馬の革を打った履物。
- ㉘ 対になったものの片方。かたいつぼう。
- ㉙ わらじばき。
- ㉚ 棒・杖、また、手でたたきあうこと。
- ㉛ 勢いよくとびはね合。
- ㉜ 茶道具をおさめておく棚。
- ㉝ 火入れ、灰吹、煙管、時には煙草人など、喫煙具一式を載せておく盆。
- ㉞ 手当たり次第に。つぶす。
- ㉟ 打ち壊す。つぶす。
- ㊱ 木などの硬い物がたわむときに発する音。
- ㊲ 地震・雷のとき、その災厄を逃れるために唱える呪文。

『こりや、小田巻とやらくだ巻とやら、光りはくわぬ、出な  
おしや。この広い日本にあの人ならで男はないか。よし、ない  
にせよあるにせよ、それほどゆかしい男なら、なぜに先にほれ  
なんだ。男ぬす人、いき傾城』  
と、言いきま取ってなげつくれば、あかり障子打ちやぶり、つ  
ぎ三味線を踏みくだき、縁より下へころころと、這い柏杉  
までこけかかり、木樨南天めつきりめつきり切り石の上へまう  
つむけ。鼻血は一石六斗三升五合五勺。  
『そりやこそ、喧嘩がはじまった。大事のこっちの太夫様に、ひ  
けをつけてはかなうまい。加勢をやれ』  
と、言うたほどに、やり手・引舟・中居・またまたき・出入りの座頭  
あんま取り、神子・山伏に占算、雪駄片足に下駄片足、草鞋  
がけで来るもあり。台所から座敷まで『太夫様のしかえし』と、  
あそこではたたき合い、ここではぶち合い、おどり合い、茶棚  
・へつつい・煙草盆、あたる物を幸いに、打ちめぐ・打ちわる  
・踏みくだく。めりめりひしやりと鳴る音に、  
『そりや、地震よ雷よ、世直しくわばらくわばら』

『こりや、小田巻とやらくだ巻とやら。そんな脅しにのるものか、顔を洗って出なおしてこい。この広い日本に、あの男以外に男がないわけではあるまいに。だいいち、それ程恋しいという男に、なぜわたしより先に惚れなんだのじゃ。この男泥棒め』  
と、言うやいなや、小田巻をつかんで投げつけましたところ、あかり障子を打ちやぶり、三味線を踏みくだいて、縁の下へころころと、ところがり、庭のはい柏杉にひっかかり、木樨・南天はめりめりと折れて、切石の上につむけになったのです。鼻血がなんと一石六斗三升五合五勺も出ましたとか。  
『それ、喧嘩だ、喧嘩だ。うちの太夫が負けぬように、みんな加勢しろ』  
と、やり手・引舟・中居・またまたき・出入りの座頭あんま取りから神子・山伏に占師まで、片足に雪駄片足に下駄、また草鞋を引つけて集まってきました。台所から座敷まで、『うちの太夫のかたきうち』と、あつちでもこつちでもはたたき合いや殴り合いが始まり、茶棚・へつつい・煙草盆など、手にあたるを幸いに投げつけますから、めりめりひしやりと家具・調度がこわれます。  
『それ、地震じゃ、雷じゃ、くわばらくわばら』

①竹の輪で締めた木製の桶(を)け。水を担(にな)い運ぶため、上部の縁に天秤棒を運すつり手が付いている。

②原本は「ひさも」となっている。鼠は危険を予知して他へ逃げる性質があると考えられており、猫は子を加えて引越すをするという驚天動地のさわざにあわてふためくさまを大げさに表現するため、猫と鼠の立場を逆にし、さらに鼠を「馬程な」と表現したか。

③「猫が鼠とや、馳が笑ふ」という童話を踏まえ、猫・鼠に続けたか。

④日本建国以来。

⑤やきもち。嫉妬。

⑥特に近世、親が子を絶縁すること。親としての保護を停止し、親との対面・同居を許さず、相続権を取り上げる。

⑦夜逃。夜のうちに他の地に逃げ去ること。

⑧恋路のおおもとだ、という色っぽい評判。

⑨「つぎを」とるから「とる」ものうち所帯じみた例をあけ、次の「なれぬ世帯の其の日過ぎ」へ言いつながる。

⑩そのひぐらし。毎日、その日に稼いだわずかの日銭によって過すこと。また、その貧しい暮しぶり。

⑪愛する男に真心をささげる女。  
⑫つれそう。夫婦として暮らす。

⑬根も葉もないまっかな嘘。  
⑭男女間の愛情が薄らぐ。いやげがさす。「秋」に「飽き」を掛ける。

と、我先にと逃げさまに、水担桶・たらいにこけかかり、座敷も庭も水だらけになるほどに、

『南無三、津波が打ってくるわ。のう、悲しや』

とわめくやら、秘蔵の子猫を馬程な鼠がくわえ駈け出すやら、屋根ではいたちが躍るやら、神武以来の恪気いさかい。このこと世上にかくれなく、かの男はその場より親御様の勘当受け、我が身も廓を夜抜けして、根本恋路のうき名とる、鍋のふた取る杓子取る。なれぬ世帯のその日過ぎ。男め故でござんする。ああ、あんまりしゃべって息切れた。お茶一つ下さんせ」とぞ語りける。

姫君を初め、腰本衆、

「さて心中の女郎や。たとえいかなる身になっても、思う男と添うからは面白かろう」

とのたまえば、

「されば末を聞いて下さんせ。その男の父親が、やみ討ちに討たれ、敵討たねば叶わぬと、私とは縁を切り、行方ものう別れて、親の敵を狙うとは跡かたもない赤嘘。我が身に秋風立ち

と、我先にと逃げるものもいて、その拍子に水桶やたらいがひっくり返り、座敷も庭も水だらけ。

『あれまあ、津波じゃ』

とわめくものもいます。秘蔵の子猫を馬程の大きな鼠がくわえ出し、屋根でイタチが躍りまわるほどの、神武以来の大痴話ケンカでありました。

このケンカが世間の評判となり、男はその場で親から勘当され、私もすぐに廓を抜けて駆け落ち。以来、その日暮らしのわび住まいこうなつたも男のためでございます。

アア、あんまりいっぺんにしゃべったので息が切れました。お茶を一つ下さいな」と話しました。

その身の上話に、姫君をはじめ、腰元たちが、

「なんとまあ、男に尽すひとだこと。でもまあ、そこまで落ちぶれても、思う男といっしよにいられるのだから楽しいでしょうに」と言うのと、

「でも、その先の話を聞いて下さいな。実は、その男の父親がやみ討ちにあつて殺されたのですよ。それで、どうしても父の敵を討たねばならぬと、私と縁を切り、行方知れずになつてしまつたのです。しかし、親の敵をねらうというのはまっかなうそでした。

- ①きつかけ。  
 ②二人の関係を絶つことも出来る。  
 ③最も都合なこと。絶好の機会。  
 ④他のものごとよせて言うこと。口実。  
 ⑤主君、主人、父母、伯叔、舅姑、兄弟など目上の者が殺されたとき、臣下や目下の者が、その恨みを晴らすために相手を殺すこと。  
 ⑥述べ立てることの内容。ことさらに言うことあるいは聞き手にとってことさらであると判断された場合という。言い分。  
 ⑦「一ぱい参る」は、一杯食う、まんまとまされる、の意。何でもお見通しはせずのお釈迦さまでも「かたきうち」では何も言えない。  
 ⑧「うまうまと」の転。首尾よく。巧みに。  
 ⑨だます。あざむく。  
 ⑩自分は楽しんで、わがまま勝手である。  
 ⑪女。  
 ⑫「いる」に軽い侮辱をあらわす接尾語「けつかる」をつけた語。  
 ⑬「腐る」「墮落する」に軽い侮辱をあらわす接尾語「くさる」をつけた語。あれこれ、ろくでもないことをするのが目に見えるようだ。  
 ⑭日本中の。  
 ⑮不運。  
 ⑯自分が過去に犯した罪悪を悔いて、それを打ち明けた咄、おろおろと取り乱して目にするむ涙。  
 ⑰分別を失い、おろおろと取り乱して目にするむ涙。  
 ⑱関係ない。  
 ⑲わたしたち。「こちひと」の転。単数、複数ともに用いる。  
 ⑳敬遠したい。遠ざけたい。  
 ㉑姫が先に同じに言われた言葉をほとんどそっくり八重桐に言うかたちでおかしみをねらう。

けれども、何をしおにのかれもせず。親御様の死なんしたを究竟一のかこつけに、敵討との口上は釈迦でも一ぱい参ること。まんまと私をたばかり、女房には紙子を着せ、その身はちゃんとなまとなま。若い女中に立ちまじり、三味線ひいていけつかり、くさりくさるを見る様な。日本国の姫御前の因果を一つにかためても、我が身には及ぶまい。初対面の皆様へ、ありし昔の懺悔ばなし。お恥ずかしや」とばかりにて、おろおろ涙にくれければ、「おお、道理道理。身にかからぬこちとさへ、けむとうてたまられぬ。さりながら、かまえて短気な心を持ちゃんなや。まだ話したいこともある。奥へ通せ」と、姫君は御簾の内に入り給えば、「さあ、苦しゅうない。奥へおじゃ。こちへこちへ」と人々は、皆々一間に入り給う。あと見送って、八重桐、「さらば、奥へ参って、にくさもにくし男の懺悔、言うてのきよう」と入らんとするを、時行取って引きもどし、はったとねめ、

私に飽きたのですが、別れる口実が見つからないので、親が死んだのをこれ幸いに、敵討ということにしたのです。そう言っておけばお釈迦様でも嘘だと言えないからなので、まんまとわたしをだまして一人になり、こうして女房にはみすばらしい紙子を着せ、自分の方は若い女に囲まれて三味線をひいて楽しんでます。どうせ、ろくでもないことをしてきたにちがひありません。どこのお姫さまよりも不幸なこのわたしでございます。初めて会った方々なのに、こんな昔のみつともない話をして、ほんとにお恥ずかしい限りでございます」と、涙目で訴えるのでした。「オオ、なるほど、他人のわたしでも、その男が憎くなる。しかし、短気をおこしてはなりません。まだまだ話したいこともあるので、奥へ通すがよい」と言いながら、姫君は簾のなかに入っていました。「サア、遠慮はいりませぬ。奥へいらつしやい。こちへ」と奥に入っていました。八重桐もそのあとについて、「では、わたしも奥に行つて、にくたらしい男の打ち明け話をしてこよう」と行こうとするのを、時行はひつつかんで引きもどし、はったとらみつつけて、

- ①遊女。  
②二人だけの相談と合意の上。「づく」は接尾語。  
③あてこすり。皮肉。

④有様。

- ⑤(自分のことに)あてはめて判断して。  
⑥むだぐち。出まかせのことば。

⑦悔しさをこらえきれずに流す涙。

- ⑧さももつともらしい。いかにも本当らしい。  
⑨何人。

⑩初段参照。

⑪たしかか。

- ⑫「定」は定まったこと、「誠」はうそや偽りでないこと、の意。「必定」を受け、これから話す内容が確かであることを強調する語。  
⑬誘いかけて一味にする。  
⑭知れわたっていること。

- ⑮天地を主宰する神。天帝。  
⑯弓矢をつかさどる神。武運を守る神。

⑰自分の身を強くつかんで。

「ええ、さすがは流れの女じやな。親の敵を討つまでと相対づくの離別ならずや。只今の言葉は誰に言うあてごと。いまだ敵の行方は知れず、心をくたく夫の体、あわれとも思わず、おのれが栄耀に引きあてて、面白そうなあだ口。ええ、うらめしや」

とばかりにて無念涙にくれければ、女房いよいよあざ笑い、「むむ、あのまがましい顔はいの。親の敵は幾人あるぞ。あなたの妹御、糸萩殿とやらんが先月二十三日、佐夜の中山で討ち給う物部の平太は敵ではないかいの」

時行はつとおどろき、

「何、妹が敵平太を討つたとは必定か」

「定か誠か。碓氷の荒童という人を語らい、やすやすと討つて、源の頼光さまを頼み駆け込みしとは、日本にかくれないこと」と、聞きもあえず、

「南無三宝、天道にも見放され、弓矢神にも捨てられし。口惜しの運命や」

と、我が身をつかんで泣きいたり。女房そばに立ち寄りて、

「エエ、さすが遊女あがりは口がうまい。だが、親の敵を討つまでと、お互い承知づくで別れたのではなかったか。誰をあてこすりてあんなことを言う。まだ敵の行くえは知れずにいるわしのこの苦勞をあわれとも思わず、出まかせばかり並べて……。エエ、うらめしい」

と無念の涙にくれて言いますが、女房八重桐は鼻であざ笑うだけ。

「まあ、そんなしららしい顔をしてよくまあ。ところで、うかがいますが、親の敵という方は何人いるのでございましょう。あなたの妹さんの糸萩という方が先月二十三日に小夜の中山で討つた物部の平太という方はあなたの敵ではなかったのですかね」

それを聞いたとたん、時行はつと驚いて、「なに、妹が敵の平太を討つたとな。確かか」「確かも何も、碓氷の荒童という人といつしよに、やすやすと討ちとって、そのあと、頼光様を頼って宿に駆け込んだという話は、日本国中、誰でも知っていますよ」

「ああ、わしは天にも見放され、弓矢の神々にも見捨てられた、ほんとうに無念な男じや」と、身をもんで泣いておりました。女房八重桐はそばに寄り、



① 糸秋のこと。

② 天皇に讒言し。

③ 天皇のことがめ。

④ ばかりの悪評を世間に言いふらすこと。「ふりよう」は「ふれよう」の転。

⑤ うとましい境遇に染まって。

⑥ 迷惑。

⑦ 親のかたき以上のかたきだ。

⑧ さあ。

⑨ 一門の名の恥。

⑩ まったく。  
⑪ 討とうとして討てるくらいなら。

⑫ わけ。  
⑬ 世をかくれ忍ぶ御身。

⑭ くだき落としたり。

「これのう、今悔やんですむことか。かたじけなくも頼光様、

妹御をかくまえ給う遺恨によって、敵の主人、右衛門の督平

の正盛、清原の右大将と心を合わせ頼光様を讒奏し、勅勘の

身となり給う。これほど大きな騒動を今まで知らぬとは、うろ

たえ者のうき名を世間へふりようということか。前後を思案し

て下んせ。日ごろの心に似ぬの。ええ、おとましい世につれて

心までが腐ったか」

と、すがり付いて泣きければ、時行つつ立ち、

「さては敵ゆえ、頼光の御難儀となつたるとや。妹に先越され、

親の敵は討たずとも、正盛、右大将は敵のかたきなり。いで二人

が首とつて頼光の御恩を報じ、名字の恥をすすがん」

と、おどり出ずるを引きとめ、

「それぞれそれ、それは皆悉気ちがい。討つに討たるるほど

ならば、頼光様に油断があるうか。かれらは威勢真つ最中、討

たれぬ子細があればこそ、日かげの御身となり給う。こなたが

今かけ出して心易う首取ろうとは、重ねて恥がかきたいか。

こなたが今まで色好み、娘をころりとおとしたと、首をころ

「そのように今になって悔やんでどうなりま  
すか。恐れ多くも頼光様は、妹御をかくまわ  
れた罪によって、敵の主人右衛門の督平の正  
盛と清原の右大将に讒言され、いまは勅勘の  
身となつておられます。こんな大事件を知ら  
ぬとは、愚か者のレッテルを公表するような  
もの。しっかりとしてください」  
とすがりついていっしょに泣いています。時  
行は立ち上がり、

「妹の敵討ちのために頼光殿にご迷惑がかか  
つているとな。妹に先を越されたこの身、敵  
は討てずとも、せめて憎い正盛と右大将の首  
を取つて頼光のご恩に報い、この身の恥をす  
すがねばならぬ」  
と躍り出ようとするのを八重桐は引き止め、

「そんな、気の違つたようなたわごとを言っ  
て。おまえ様に討てるような敵なら頼光様に  
ぬかりがあるはずもない。あの二人は天子様  
の意向をかさに着て威勢を振るっているお方  
頼光様といえども手が出せないわけがあるか  
らこそ世をはばかる身となつて苦労しておら  
れるのですよ。おまえ様がいま駆けだしてい  
つて苦もなく首を取つてやろうなどと言つた  
ところで、恥の上塗りになるだけ。おまえ様  
がこれまで色じかけで娘たちをものにしてき  
たのとはわけがちがいます」



①大きな違いがあること。

②困ったさま。ほとんど。

③まちがっていた。

④ものを言った舌を、まだ引きもせぬのに。言  
つてすぐ。

⑤御家来。

⑥一人で千人の敵に対抗できるほど強いこと。

⑦鬼と見ちがえる。

⑧いくじがない。強さが感じられない。

⑨棒でぶたれて。

⑩歯ぎしり。くやしがるようすを表わす。

りとおとすとは雲泥万里<sup>①</sup>」

と恥じしむる。時行<sup>②</sup>ほうど行きつまり、

「あつあ、そうじゃあやまった。しからばこれより頼光<sup>③</sup>の御行方  
を尋ね、御家来となり、御威勢<sup>④</sup>をかって正盛<sup>⑤</sup>が首引きぬかん」  
と、かけ出るをまた引きとどめ、

「たった今恥じしめた舌も引かぬに無分別<sup>⑥</sup>。武勇<sup>⑦</sup>ただしき頼光様、  
御内には渡辺の源五綱<sup>⑧</sup>とて、一騎当千<sup>⑨</sup>の兵。同じく碓氷<sup>⑩</sup>の荒童<sup>⑪</sup>。

鬼もあざむくその中へ、なまぬるいなりをして、『妹<sup>⑫</sup>に先越さ  
れ敵を討たぬ無念<sup>⑬</sup>ゆえ御奉公<sup>⑭</sup>いたしたい』と言わりようものか、  
言わしやるか。御取り上げもない時は、すすごとは戻られま  
い。棒<sup>⑮</sup>いただいて戻ろより、行かぬ方がはるかにまし。どうぞ  
分別<sup>⑯</sup>はないかいの。ええ情ないお人<sup>⑰</sup>や」  
と、突き倒してぞ泣きいたる。

時行道理<sup>⑱</sup>にせめられて、行きつ戻つつ歯<sup>⑲</sup>がみをなし、拳<sup>⑳</sup>を  
握り立ったりしが、「もうこの上の分別なし」と、皮籠<sup>㉑</sup>の中よ  
り氷<sup>㉒</sup>のようなる鎧<sup>㉓</sup>通しおっ取り、腹<sup>㉔</sup>にぐつとつき立て、背骨<sup>㉕</sup>  
をかけて引きまわす。

と散々悪態の限りをつきます。時行はほとほと行き詰まってしまい、

「たしかにそなたのいうとおりじゃ。ならば、これから頼光様の行方を尋ね、家来にしてもらい、その手下となって正盛の首を引き抜いてやろうか」

と駆け出そうとしますが、

「いま言つたばかりなのに、その舌の根もかわかぬうちにまた無分別なことを。頼光様には渡辺源五綱という一騎当千の強者がついておられますし、碓氷の荒童という方も鬼に引けを取らぬ強力とか。そんなご家来衆のなかにひ弱ななりそなたが、『妹に先を越されたい』と願ひ出たとて、家来にしてみらえるかどうか考えてごらん下さい。ダメだという、すすごとは戻って来られますまいに。とすれば、行かないほうがはるかにましではありませんせぬか。そのくらの分別は働きませぬか、ええ、情けないお人じゃ」

とこちらも突つ伏して泣いております。

時行はこうして次々に道理で責めたてられ、あつちへ行ったりこつちに戻ったりして歯がみを悔しがりながらこぶしを握って立っていました。

「もうこうなつたうへは、こうするしかない」と、皮籠のなかから、氷のように冷たい光を発する鎧通しを取り出し、腹にぐつと突き立て背骨まで通して引き回します。

- ①そなた。相手に対して親愛の心をこめて呼ぶ語。  
 ②中国、春秋時代の呉の臣。父と兄が楚の平王に殺されたため、呉に奔り、呉を助けて楚を破り、平王の墓をあばいて復讐した。のちに呉が越を破った時、呉王夫差が越王勾踐を殺さなかつたことを諫めていられず、のち讒言にあつて自殺した。  
 ③中国、秦末の武将。叔父項梁とともに、秦兵し、漢王劉邦と呼応して秦都咸陽を攻め、秦を滅ぼし、自立して、西楚の霸王となる。後、劉邦と天下の覇権を争つたが敗れ、烏江で自殺した。  
 ④漢の高祖に仕え、その身代わりになつて死んだ勇士。  
 ⑤機会が訪れないので力を發揮することができない。  
 ⑥だからと生きながらえて。  
 ⑦ふしぎにすぐれている。  
 ⑧世にもまれなこと。非常に珍しい。

⑨仏教で、修行の結果得られる何事も自由自在にできる超人的な能力。神通力。

⑩血は夕立のように勢いよく流れた。  
 ⑪死に際の執念。

⑫かたまり。

⑬しゃにむに。

⑭「汝(わ)。おまえ。」

女房、「これは狂気か」とすがり付けば、

「あつあつ、音高し音高し。おことが今の悪言は、伍子胥が呉王を諫めたる金言よりなお重し。おそらくこの一念、項羽紀信が勇氣にもおとるまじと思えども、時来たらねば力なし。それまでまだまだながらえ、臆病者・腰抜けと指さされんは無念の上の無念なり。我死して三日が内、御身が胎内に苦しみあらば、我が魂宿りしと心得、十月を待つて誕生せよ。神変希代の勇力の男子となつて、今一度人界に生まれ出で、正盛右大將を滅ぼさん。おことが身も今日より常の女にことかわり、飛行通力あるべきぞ。深山深谷を住家とし、生まるる子を養育せよ。さらばさらば」

と諸共に、劍を抜けば紅の血は夕立を争いし、最期の念ぞすさまじき。あら不思議や、切り口より焰のまろかせ、女房が口に入れば「うん」とばかり、そのまま息は絶えてけり。

かかるところに、若侍 五六十、無二無三にむらがつて、館の四方をおつ取りまき、  
 「やあやあ兼冬、右大將高藤公よりわが姫を召さるれども、頼光

女房があわてて「気が狂ったか」とすがりつきますと、

「ああ、声が大きい。そなたの今の言葉は、あの伍子胥が呉王をいさめたという言葉よりもっと重く感じられる。わしの一念は、項羽や紀信の勇氣にもおとらぬつもりじゃが、それをどうやって發揮したらよいかわからぬ。というて、だからだと生き長らえて、臆病者、腰抜けとうしろ指をさされても無念なことこのうえない。よいか、いまわしが死んで、三日のうちにそなたの胎内に苦しみがあれば、わが魂が宿つたと心得て、十月月あとに子供を産むがいい。神変希代の勇氣と力を持った男の子が生まれるはず。わしはそうやっていま一度この世に生まれ出で、正盛と右大將をほろぼすつもりじゃ。そなたの体も、今日からはなみの女とは異なり、飛行通力の能力が身につくはず。ただちに深山深谷に住み移り、生まれてくる子を育てるのじゃぞ。さらばさらば」

という声とともに、劍を抜きはなつと真つ赤な血が夕立のようにあふれ出てきました。時行のいまわのさわの念力というものは、さすがにすさまじいものでした。そして、その傷口からは炎のようなかたまりが飛び出してきてそのまま女房八重桐の口に入り、女房は「うん」と一声放つたまま息絶えてしまったのでした。

そこへ、若い侍が五、六十人、しゃにむに群がつて邸の四方を取り巻き、

①承知しないので。  
②ひどくはばかれる。おそれ多い。

③人の姿をした畜生。

④公家に仕えるさむらい。武士の中でも弱いものとする。

⑤ふせぎようもなく。

⑥正面に立ったやつら。

⑦守って。かばって。

⑧その家に代々仕える家来。

⑨とるに足りない。

⑩身分の低い女。

⑪なにもできるものか。

⑫命令すると。

⑬夫の魂がやどり。「宿り木」は、夫の魂が体  
に宿った意を掛け、また「梅と桜の花心」を  
言い起す。  
⑭夫の魂は妻の魂となり、また子となって生ま  
れ。からだの枕詞。「うつ」に「敵を」討つを  
掛ける。  
⑮遊女。  
⑯執念。  
⑰ふたかかえ。  
⑱ニレ科の落葉高木。高さ二〇メートルに達す  
る。  
⑳片手ねじり。

と縁組<sup>えんぐみ</sup>として承引<sup>しょういん</sup>なき条<sup>じょう</sup>、はばかり<sup>せんばん</sup>千万。それによつて「姫<sup>ひめ</sup>を  
ひつ立<sup>た</sup>て来た<sup>き</sup>るべし」との御使<sup>おんつかい</sup>、乱れ入<sup>い</sup>つて奪<sup>うば</sup>いとれ」  
と、おめき叫<sup>さけ</sup>ぶその声<sup>こゑ</sup>に、兼冬<sup>かねふゆき</sup>卿<sup>きょう</sup>驚<sup>おどろ</sup>き給<sup>たま</sup>い、  
「やあ、主<sup>ぬし</sup>ある娘<sup>むすめ</sup>を奪<sup>うば</sup>わんとは人畜類<sup>じんちくるい</sup>の右大将<sup>うだいしよう</sup>。返答<sup>へんとう</sup>するに及<sup>およ</sup>  
ばず。あれ追<sup>お</sup>つ散<sup>ち</sup>らせ」

とのたまえば、言<sup>い</sup>うに甲斐<sup>かい</sup>なき公家侍<sup>くけさむらい</sup>、防<sup>ふせ</sup>ぐ方<sup>かた</sup>なく見<sup>み</sup>えたる  
ところに、伏<sup>ふ</sup>したる女<sup>おんな</sup>むつくと起<sup>お</sup>き、表<sup>おもて</sup>に立<sup>た</sup>つたる奴原<sup>やつばら</sup>を、と  
つては投<sup>な</sup>げとつては投<sup>な</sup>げ、姫君<sup>ひめぎみ</sup>のおわします御簾<sup>みす</sup>を囲<sup>かこ</sup>うて立<sup>た</sup>つ  
たるは、さながら鬼女<sup>きじよ</sup>のごとくなり。

正盛<sup>まさもり</sup>が家<sup>いえ</sup>の子<sup>こ</sup>、大田<sup>おおた</sup>の太郎<sup>たろう</sup>、

「数<sup>かず</sup>にもたらぬ下主女<sup>げすおんな</sup>、何<sup>なに</sup>ごとか仕出<sup>しだ</sup>さん。あれ引<sup>ひ</sup>き出<sup>いだ</sup>せ」  
と下知<sup>げじ</sup>すれば、

「何<sup>なに</sup>、それがしを女<sup>おんな</sup>とや。おお、女<sup>おんな</sup>ともいえ男<sup>おとこ</sup>なりけり。胎内<sup>たいない</sup>  
に夫<sup>おつと</sup>の魂<sup>たましい</sup>やどり木<sup>き</sup>の、梅<sup>うめ</sup>と桜<sup>さくら</sup>の花心<sup>はなごころ</sup>、妻<sup>つま</sup>となり子<sup>こ</sup>と生<sup>う</sup>まれ、  
思<sup>おも</sup>う敵<sup>かたき</sup>をうつせみの、体<sup>からだ</sup>は流<sup>なが</sup>れの太夫職<sup>たゆうしやく</sup>、一念<sup>いちねん</sup>は坂田<sup>さかた</sup>の蔵人<sup>くらんど</sup>  
時行<sup>ときぎ</sup>、そのしるしこれ見<sup>み</sup>よ」

と、ふたかい余<sup>あま</sup>りの椋<sup>むく</sup>の木<sup>き</sup>を、片手<sup>かたて</sup>もじりに「えい、やっ」と

「やあやあ兼冬、右大将高藤公より娘のお召  
しがあつたにもかかわらず、頼光との縁組み  
を理由に断わるとは、無礼千万のふるまい。  
『ただちに姫を引つ立ててこい』との御命令  
じゃ。なかに入つて奪い取つてまいれ」  
という声に、兼冬卿はおどろいて、  
「なにをいう。主のある娘を奪うなどと畜生  
のように卑劣な右大将。返答するには及ばぬ  
追い散らせ」

と命<sup>めい</sup>じます。が、なにぶん公家侍のことで力  
がありませぬ。ふせぎようもなく突つ立つてい  
ますと、倒れていた八重桐がむっくり起き上  
がり、向かつてくるやつらをちぎつては投  
取つては投<sup>な</sup>げして、姫君のいる御簾のあたり  
にすつくと立っている様子はさながら鬼女の  
ようです。正盛の家来、大田の太郎が、  
「たかが女ではないか。何ができようはずも  
ない。やつつけろ」  
と命<sup>めい</sup>じますと、

「このわたしを女だとみくびるでない。姿は  
女だが、実は男なのだ。この胎内には夫の魂  
が宿っている。梅に桜がくつついたように、  
夫の魂は妻の魂、やがて子が生まれ、敵を討  
つ勇士に育つはず。身は流れの太夫八重桐な  
れど、心は夫坂田の蔵人時行その人じゃ。そ  
の証拠を見せてくれる」  
と言いつつ、二抱え余りの椋の木を片手ねじ  
りに「えい、やっ」とねじ折り、

① 引き返して迎え撃つ。

② そうだろうそうだろう。「さも候はんず」の  
転。

③ 「命」の枕詞。

④ どころもなく(立ち去ろうと)。  
⑤ 色白の意。「知らない」に掛け、また、「三十  
二相のかんばせ」を言い起こす。  
⑥ あらゆる美しさをそなえた顔。「三十二相」は、  
仏教で仏がそなえているすぐれた外見的な身  
体的特徴が三十二あるということによる数。  
⑦ 女の髪型の一。  
⑧ 仏教でいう容貌の猛悪な鬼。  
⑨ いかつく醜い顔をたとえた言葉。「鬼」は夜  
又の縁、「鬼がわら」は「唐門」などを言い  
起こす。  
⑩ 屋根が唐破風造になった門。  
⑪ 二階造りの門。  
⑫ 二本の主柱の前後に、二本ずつの袖柱のある  
門。屋根は切妻破風造とするのが普通。  
⑬ 土塀。

ねじ折<sup>お</sup>つて、寄りくる奴原<sup>やつばら</sup>はらはらはら、はらりはらりとなぎ  
立つ<sup>た</sup>るは、人間<sup>にんげん</sup>わざとは見えざりけり。この勢<sup>いきお</sup>いに恐れ<sup>おそ</sup>をなし、  
返<sup>かえ</sup>し合<sup>あ</sup>わする者<sup>もの</sup>もなく、みな散<sup>ち</sup>り散<sup>ち</sup>りに落<sup>お</sup>ちうせけり。

「おお、さもそうず、さもあらん。我が魂<sup>たましい</sup>は玉<sup>たま</sup>の緒<sup>お</sup>の、御命<sup>おんいのち</sup>  
つがなく行末<sup>ゆくすえ</sup>待<sup>ま</sup>たせまませ」

と姫君<sup>ひめぎみ</sup>に一礼<sup>いちれい</sup>し、

「今<sup>いま</sup>よりは我<sup>われ</sup>、いづくをそこ」

と白妙<sup>しろたえ</sup>の、三十二相<sup>さんじゅうにそう</sup>のかんばせも怒<sup>いか</sup>れる眼<sup>まなこ</sup>ものすごく、島田<sup>しまだ</sup>  
ほどけてさかさまに、たちまち夜叉<sup>やしや</sup>の鬼<sup>おに</sup>がわら、唐門<sup>からもん</sup>楼門<sup>ろうもん</sup>四<sup>よ</sup>  
つ足門<sup>あしもん</sup>、塀<sup>へい</sup>も築地<sup>ついで</sup>も飛<sup>と</sup>びこえはねこえ、はねこえ飛<sup>と</sup>びこえ雲<sup>くも</sup>を  
分<sup>わ</sup>け、行方<sup>ゆくえ</sup>も知<sup>し</sup>らずなりにけり。

寄<sup>よ</sup>つてくる敵<sup>てき</sup>をばったばったとなぎたおして  
いきます。全く人間<sup>にんげん</sup>わざとは思<sup>おも</sup>いません。そ  
の勢<sup>いきお</sup>いに恐れ<sup>おそ</sup>をなして、討手<sup>うつけ</sup>の方は相手<sup>あて</sup>にな  
るものもなく、皆<sup>みな</sup>ちりぢりに逃<sup>に</sup>げていきまし  
た。

「おお、どうせ、そんなものであるう。姫君<sup>ひめぎみ</sup>  
つつがなく行く末<sup>ゆくすえ</sup>をお待<sup>まち</sup>ちくだされ。いづれ  
望<sup>のぞ</sup>みのかなう日が来<sup>き</sup>ましようから」  
と、一礼<sup>いちれい</sup>し、

「さて、これからどこへまいろうか」  
という問<sup>と</sup>もなく、色白<sup>いろしろ</sup>の三十二相<sup>さんじゅうにそう</sup>の美<sup>う</sup>しいま  
なぎしがたちまち夜叉<sup>やしや</sup>のように変<sup>か</sup>わり、島田<sup>しまだ</sup>  
の髪<sup>かみ</sup>もほどけてさかさまになり、唐門<sup>からもん</sup>、楼門<sup>ろうもん</sup>、  
四つ足門<sup>よつあしもん</sup>、塀<sup>へい</sup>も築地<sup>ついで</sup>も飛<sup>と</sup>び越<sup>こ</sup>えはね越<sup>こ</sup>え、雲<sup>くも</sup>  
を分<sup>わ</sup>けて、行方<sup>ゆくえ</sup>もしれず飛<sup>と</sup>び去<sup>さ</sup>っていったの  
でした。



こもちやまんば  
嬬山姥 第三段

①心が正しくないのに言葉が巧みな人。へつらう人。  
②人をおとしめる速さは刃よりもなお鋭い。

③無法者。喜之介・小糸（糸萩）を指す。

④配下。部下。  
⑤そのうえ。

⑥世間をさわがせ乱す。  
⑦そしり訴えること。

⑧乳虎は授乳中の虎で、最も気が荒い。悪吏の甯成や授乳中の虎の荒い虎のように、右大将の恐ろしい口先。甯成は出世のためには手段を選ばず、周りに乳虎のように恐れられた。「牙」は「虎」の縁による。

⑨「蒼鷹」は白タカで、なまじけ知らずの役人にとえられる。悪臣に恐れられる邸都のような頼光の忠心。邸都は決して節をまげず、蒼鷹と恐れられた。「翼」は「蒼鷹」の縁による。

⑩旧国名。今の岐阜県南部。

⑪源仲国。宇多源氏。光遠の子。能勢氏を名乗る。「平家物語」では、勅を受けて、平清盛を恐れて嵯峨に姿を隠した小督の隠れ家を訪ねる人として登場。

⑫先祖代々。

⑬家来。

⑭なおざりなく。ごく親しくして心を許し合っていること。

⑮気にかかることもなく過ぎ。「夏」に「なく」を掛ける。

⑯らんかん。ですり。

⑰さしあげると。御たいくつでしょうと。

⑱丈の低いチガヤ、またはそれがまばらに生えている上に置いた露。浅くない思いをする意の「浅からぬ」が「あさちが露」を言い起し、粗末な家を暗示する。「露」が「玉」を言い起す。

⑲玉を敷いたように美しい昔の御所の秋。

①倭人の詞は甘きこと蜜のごとく、人をそこなうこと刃よりな

おすみやかなり。清原の右大将、平の正盛に荷担し、

「源の頼光武勇にほこり、狼藉者を引きこみ、民家をさわがし、

我々が手の者大勢討ち取り、あまつさえ都まで切りのぼらん企

て、上をかるしめ下をかたぶけ候」

と、再三讒訴しきりなれば、ついに甯成乳虎の牙にかかつて、

⑨邸都蒼鷹の忠心の翼も折れ、勅勘の身となり給い、美濃の国、

⑪能勢の判官仲国は累代の被官といい、内縁深きよしみによつて、

しばらく忍びおわします。判官の妻小侍従、一子冠者丸十六歳、

夫婦親子等閑なく、家内の男女いたわり仕え奉り、御心置く

方も、夏過ぎ秋もはじめなる、西表のおぼしまに、色々の燈籠

を飾らせ、「この夕ぐれの御つれづれ」と御盃を参らすれば、

頼光も浅からぬ浅茅が露に灯籠の、光りあいつつ玉敷ける、昔

の秋をおぼし出で、数盃をかたぶけ興に入り、長歌作り朗詠し、

心がねじけた人の言葉は、蜜のように甘いが、また刃よりも早く鋭く人をおとしめるものであります。清原の右大将は平の正盛に肩入れし、

「源の頼光は武勇をかさに着て狼藉者をかかまい、民家を騒がせ、我々の家来を大勢討ち取ったばかりか、都にまで攻め上ろうと企んでいる。これはお上を軽んじ、世間を乱す行いである」

と再三訴え出ましたので、ついにその讒言のえじきになり、頼光の堅い忠誠心もお上に届かず、いまは勅勘の身として朝廷に追われる身となりました。そこで、やむなく、先祖以来源氏に仕えてきた美濃の国能勢の判官仲国のもとにしばらく身をひそめることになりました。判官の妻は小侍従といい、二人の間には十六歳になる冠者丸がおります。夫婦親子とも抜かりはなく、この邸の人々はみな頼光を大切にして仕えております。時はいま、のどかな秋のはじめであります。邸の西表のらんかんに色々の燈籠を飾らせ、「御たいくつでしようから」と御盃をさし上げました。頼光も喜びつつ、まばらに生えたチガヤに置く露と燈籠が光り、玉をしいたように美しい昔の御所の秋の庭のさまを思い出し、数杯の盃



- ① 盃の酒にうつる影。
- ② 切子灯籠。角形の灯籠の角を切り落した形のもの。角ごとに造花をつけ、紙片を垂し、燈籠の四方に長く紙を垂したりする。以下、燈籠とそれと一緒に飾った造花を連ね、縁語や掛詞を用い、さまざまな恋模様を織り込み、流麗な一文となっている。
- ③ 太鼓型の燈籠か。
- ④ 「形」はかたち。「鳴り」に掛ける。太鼓の縁による。
- ⑤ 燈籠と一緒に飾っている。
- ⑥ 「揺り」の意を掛ける。以下、単なる植物名の解説は省略する。
- ⑦ 一本だけ離れて生えている薄。また、一株からのみ生えている薄。
- ⑧ すすきの穂がのびる意と、恋心があらわに出る意を表わす。「穂に出る」には隠れていたものが人目につく意もある。
- ⑨ 薄の穂が乱れるのと「葵」の茎が乱れるのと両方の意。暗に恋心が乱れる意も表わす。
- ⑩ 「逢う日」を掛ける。
- ⑪ 葵の花・花あやめの両方に掛ける。
- ⑫ 道理の意の「文目（あやめ）」をかける。
- ⑬ 牡丹の異名とされる。思いが「深い」の意を掛ける。
- ⑭ 「知らむ」に掛ける。
- ⑮ 「釣舟」は上からつるして使う花生け。空を背景として鑑賞する。なお、「水」は柳の縁語。
- ⑯ 赤い色の。恋に身を焦がす意と「漕がるる」を掛ける。
- ⑰ 彫物・蒔絵などで、模様を地より高く盛り上げてあるもの。
- ⑱ 文字や模様をすかして見えるように作った燈籠。
- ⑲ 額に似て横に長い燈籠。がくあんどん。「額」は花の名の「がく（くさあじさいの異名）」に掛けるか。
- ⑳ 出来映えが上品で優雅な。
- ㉑ 季節の花で作った髪「振り分け髪」を言い起す。
- ㉒ 「振り分け髪」は、男女ともに八歳ごろまでの子どもの髪型。左右に振り分けて垂れ、肩のあたりで切りそろえたもので、それを比べてつづつとした、意。『伊勢物語』に因む語で、「井筒」を言い起す。
- ㉓ 井筒形の燈籠。「井筒」は、危険を避けるために、井戸のまわりに設けた囲い。多く「井」の形に作る。「井戸屋かた」を言い起す。
- ㉔ 井戸に屋根を設けて小屋のようにしたものの。花の蔓。
- ㉕ ここは、井戸屋かたに朝顔が這いまつわるようにした。その「輪ごと」に、の意。「とほす」とも「しびきら」とあるので、造花で、一輪ごとに光るようにしてあるか。
- ㉖ 螢の名所。
- ㉗ あじろ風の棧を設けた燈籠。

歌い給うぞ面白き。

とうろうの段

かずかずめぐる盃の、影にうつろう燈籠の、色をかえ品をかえ、切り籠太鼓の形もよし。籠に入れたる造り花、桔梗、蓮葉、藤の花。風にもまれて百合の花。あの奥山のひと薄、いつ穂に出でてみだれ、みだれ葵の花あやめ。我が思いは深見草、誰かあはれと白菊や。紫苑鴈皮に罌粟しもつけの花桶に、しだれ桜や糸柳。水なき空の釣舟も、焦がるる色の紅椿。手まり山吹、かきつばた。花仙の姿置きあげに、文字をすかしのすかし燈籠額燈籠。手際やさしき花蔓、振り分け髪をくらべこし、井筒燈籠井戸屋かた。はいまつわるる朝顔の、花のうてなのりりんごごとに、とほすともしびきらきらと、さながら秋の螢とびかう宇治川の、あじろ燈籠もじ燈籠。すはま団扇唐団扇。扇車に水車。油煙につれてくると、まわり燈籠かげ燈籠。月のふけゆく夜あらしに、まわれまわれ品よくまわれ風車。小車

を傾けて楽しんでおります。長歌を作って朗詠したり、歌ったりする様子もまた素晴らしいものでした。

とうろうの段

何杯も重ねる杯に映る燈籠の色や形は様々。切り籠燈、太鼓形の燈籠もよい形をしています。燈籠の中に入れてある造花を見ていくと、桔梗、蓮葉、藤の花、風にもまれて揺れる百合の花。また、あの山奥のひと薄の穂のように隠れた恋にいつ身を焦がすことになるのでしょうか。また、一方、葵のように乱れて身を焦がし、花あやめのようにあやめもわからずぼうつとして生えている私の思いは深見草の名の通り深く恋に乱れています。しかし、それを誰が白菊、いえ、知るでしょうか。紫苑、鴈皮に罌粟、しもつけ花、花桶にはしだれ桜、糸柳、空を川の流れとして浮かぶ釣生花も、恋に焦がれる色の紅椿。手まり、山吹、かきつばた、かいどうの姿を浮き上がらせた燈籠、文字をすかしてあるすかし燈籠、額燈籠。出来映えのやさしげな花蔓。「振り分け髪をくらべこし」と詠んだあの有名な井筒の形の燈籠、井戸屋かた。その柱にはいまつわるる朝顔の花、花びらのひとひらひとひらがきらきらと灯火をたいいて輝いています。それはまるで秋に螢が飛び交っている宇治川のようにであります。網代燈籠、文字燈籠、すはま・団扇・唐団扇・扇車・水車模様の燈籠。灯火の油煙でくるくるまわる回り燈籠、影燈籠。夜がふ

- 29 もじをかざった燈籠。  
30 燈籠につけた模様の名。  
31 影絵の仕掛けを仕組んだ灯籠。以下の「くるくる」とまわりなど、また「風車」「小車」などを言い起こす。  
32 小さい車の意と、植物名を掛ける。
- ① 人目につかないようにしのんで行くときの車。「百夜の車」を言い起こす。  
② 夜ごと恋しい人のもとに通う車。深草の少将が小野小町のもとに百夜通うことを約束した話が有名。  
③ 夫のある女に言い寄るな。「引く」は車の縁語。  
④ 女の意に掛ける。  
⑤ 恋を「する」意を掛ける。  
⑥ 身分の高い人の前に出ること。  
⑦ ゆったりとくつろいですわること。  
⑧ 感謝の気持ちは決して浅くはないが。

- ⑨ おそれおおくも。  
⑩ 源経基。清和天皇の第六皇子貞純親王の子。武勇に高名。  
⑪ 現在の大阪府の西部と兵庫県の一部。家来。  
⑫ 正義に外れた方面。  
⑬ 味方をする人。  
⑭ 「悪道」に対し、真っすぐ正しい道。  
⑮ 四方の海。転じて、天下、世の中。  
⑯ 武家で、その家に代々仕える家来。  
⑰ 諸方から人馬などを駆り出して集める。  
⑱ みかどに申し上げること。  
⑲ 「佞臣」は、口先だけで、巧みにへつらう家来。「原」は、軽んじる意を添える。  
⑳ 首をかき切ること。また、その首。「かく」は、刃を首に当ててひたひたかくようにして切ること。  
㉑ 何もしないでほんやりしているさま。

の、花見車に忍びの車。ああ、ああ百夜の車。よそに主ある袖引くな。袖褌引くな、おみなえし。恋を董か美人草。四季に色ある造り花。手をつくしてぞ飾りける。

頼光甚だ興に乗じ、酒宴たけなわの折から、渡辺の綱、碓氷の定光、御前にまかり出で、

「誠にこの度判官殿の忠節にて、我々まで安座の段浅からず候えども、いつまでかく悠々としてもあられず。御大将は誰あらん、忝なくも六孫王の御孫、摂津の守源の頼光。郎等にはまづこの渡辺、新参の碓氷の定光。一席に只二人なれども両腕に百人ずつ、胴骨にも百人ずつ。おつ取ってこの座にばかり六百騎。何をうかうか待ち給わん。悪道には方人多く、直なる道には入る者少なし。右大将が威勢をかって平家盛んの世とならば、正盛四海を一呑みにし、万民のなげき遠かるまじ。兩人おいとま給わって都の体をもうかがい、諸国の御家人かり催し、咎なき旨を奏聞し、佞臣原一々にかき首し、御本意とげさせ奉らん。いかにしてもこの様に安閑と暮らしては、筋骨たるんで精根つき果て候えば早おいとま」

けて起こる夜風に、風車よ、優雅にまわりなさい。小車、花見車、そして忍びの車も。ああ、そういえば百夜の車。いくら恋しても夫のある女に恋をしてはなりません。女郎花ではないが女よ、恋を董、いや、するのですか、美人草のあなたは、と。四季それぞれに趣ある造花を、真心を込めて飾ってあるのです。

頼光はこの庭のさまを大変におもしろがっております。宴もたけなわになったころ、渡辺の綱と碓氷の定光が頼光の前に行き、「この度の判官殿の忠節によって、頼光殿だけでなく我々までもがゆったり出来るのはとてもありがたいことでございますが、いつまでもこのようにゆつくりとしていることも出来ません。大将殿は他でもない、おそれおおくも六孫王源経基殿の御孫にあたる摂津の守源頼光殿であります。そしてその家来としてこの渡辺と、新参者ではございますが、碓氷の定光が付き従っております。この場にいらぬのは二人だけですが、この両腕に百人ずつ、胴に百人、おおよその所六百騎の敵を相手に戦うつもりであります。それなのにどうしてこのようにぐずぐずと待っているのですか。道に外れた者たちには味方するものが多く、正しい者の所には人が集ってきません。とはいえ、右大将の権力をかさに着て、平家が力を持つ世になれば、正盛が天下を握り、万民が嘆き苦しむことは目に見えるようです。我々二人はおいとまいただき、都の情勢をうかがい、諸国に散っている源氏一族を集めた

①伊勢(今の三重県)へ行く道。また、伊勢。  
②紀伊の国(今の和歌山県)へ通じている道。  
また、紀伊の国。  
③北陸道の諸国。東山道の出羽国を含む場合もある。

④大通寺は鎮守社六孫王神社との関係で源氏との関係が深かったという。そこにあった池か。出会おう。  
⑤今から後。今後。  
⑥家来。特に、血縁関係にある者。

⑧うしろへ引き下がって。「しさりて」の転。

⑨(戦う)もととなる。  
⑩勇ましくて力強いこと。

とぞ申しける。

頼光聞こし召し、

「我もさこそ思いつれ。さあらば兩人は伊勢路紀の路へ赴くべし。我はまた北国にかかり、源氏志の勢を集め、都九条六孫王の誕生水にて出で合はん。門出といい、定光にはいまだ主従の盃せず。名乗りの一字をゆずる上は向後源氏の家の子ぞ」と、御盃を下さるる。定光しさって頂戴し、

「天が下に二人ともなき大將軍を主君に持ち、下地の勇力十倍増し。一騎当千と思し召され」と、三杯続けてつと乾す。能勢の判官座を立て、

「おお、めでたしめでたし。貴殿、渡辺殿の武勇にあやかり申す為、その盃を一子冠者丸に下されかし」とありければ、

「お辞儀も申すべけれども、武勇にあやかり給うため、お望みに任せん」

と、さす盃を冠者丸、戴き戴きうやまう体、母は見るよりうちしおれ、袂を顔におしあてて、つつむ涙も自ずから声に現

うえて、頼光殿が無実であることを朝廷に奏上し、心のねじけた者どもの首をひとつひとつき切つて、殿の志をとげさせたいと思つております。ともあれ、このようにくつろいで過ごしては、体もなまり、気力も無くなつてしまいますので、我々は急ぎここをおいとまいたしたいと思ひます」と申し上げました。

頼光はそれをお聞きになり、

「わしもそのように考えていたところじゃ。では、お前達二人は、伊勢、紀伊の方へ向うがよい。私も北陸へ向い、源氏に味方する者達を集め、都九条の大通寺にある経基公の誕生水の前でおちあうことにしよう。いざ、門出じゃ、とはいつても、まだ定光とは主従の杯をかわしておらなんだな。私の名前の一字をゆずったからには今後はそなたも源氏の一族に他ならぬぞ」と言いつつ、御杯を与えました。定光はその杯を受け取り、

「天下に二人とない大將軍を御主君にいただいて、私の力も十倍に増えたような気持ちでございます。一騎当千の活躍をご期待ください」と言いつつ、三杯続けて飲み干しました。

能勢の判官は座を立て、

「おおこれはめでたい。貴殿定光殿と、渡辺殿の武勇にあやからさせていただくため、その杯を我が子冠者丸にお与えくだいませぬか」と願ひ出ました。

①定光から盃をもらうのは定光より身分が下であることを意味する。それが不満なのだろうと推測し、綱が冠者丸の盃を受けてとりなそうとしたもの。

れ色に出で、人々「是は」と御座敷興さめてこそ見えにけれ。判官見かね、

「御祝儀の折から、不吉の落涙。狂気したるか。罷り立て」と引き立つる。渡辺とどめて、

「おお、もつとももつとも。定光の盃、不足に思われること、母御の気には至極道理。ここは綱が頂戴せん。冠者殿、いざさし給え」

と言いければ、母は漸う涙をおさえ、

「御不審は御ことわり。定光殿をゆめゆめかろしむにても候わず。我が身の運のつたなさとあの子が果報の薄きこと、日ごろくよくよ思うこと思い余りて涙がこぼれ、御祝儀をさませしぞや。御大将にも綱殿も御存知、定光殿への物語。わらわは始め小侍従の局とて、御父満仲公に宮仕え、源氏のたねを身にやどし、誕生せしはあの美女御前とつけ給い御寵愛ありしかど、頼光殿の御母、御台所の御心を憚り、出家にせんとて十一の春より十三の秋まで山へのぼせ給いしに、経の一字もならわず斬つつ張つつの弓馬の芸。満仲公の御憤りなだめても嘆きても、

③頼光の父。

②幸運。

④謡曲『仲光』に登場する人物。多田満仲の子で、摂津の中山寺で学問を修行させていたが、武芸に身を入れるばかりで、学問に心を入れなかつた。それを怒った満仲は、家臣仲光に言いつけて手討ちしようとしたが、仲光は一子幸寿丸を身代りに討つて、美女丸をひそかに逃したという。  
⑤満仲の奥方。  
⑥比叡山。  
⑦斬つたり叩いたり。  
⑧弓術と馬術。武芸。

「僭越ながら、我が武勇にあやかりたいとお言葉に従い、お望み通りに」

と、杯を差し出しました。その杯を冠者丸がいただき、うやうやしく呑もうとしたそのとき、冠者丸の母はよろこぶどころかとても悲しそうにしております。あたりをはばかって涙を隠そうとするそのたもとから、声までももれてしまいました。

「これはどうしたこと」

と一座の人々も興ざめな思いでいます。判官は見かねて、

「祝いの席にそのように涙をこぼすとは不吉なこと。気でも狂ったか。この場を出て行け」と叱り、出ていかせようとしたが、渡辺はそれを止めて、

「いや、もつともなこと。定光からの杯を不足に思われるのは当然。その杯はこの綱めがお受けいたしましょう。さあ冠者丸殿、注いでください」

ととりなしました。母はやつと涙を止め、「不審に思われるのはもつともなこと。私は、決して定光殿を軽んじているのではございません。我が身の不運やら、冠者丸の運命のつたなさについて、日ごろから思い悩んでおりますゆえ、涙を抑えきれず、めでたいお祝いに、興ざめなことをしてしまいました。」

とはいえ、御大将頼光殿も綱殿も私どものことはすでに御存知のはず、定光殿にもいましてお話をすことにしましょう。

私はもと、小侍従の局と申しまして頼光殿の御父満仲公にお仕えしておりましたが、満



- ①謡曲・幸若『仲光』に、多田満中の家臣として登場する人物。  
 ②謡曲・幸若『仲光』に、多田満中の子として登場する人物。  
 ③その場。さしあたり。  
 ④主君・主人・親などのごきげんを損じ、寵愛を失うこと。

- ⑤農村に住み、田畑を所有している武士。戦時には武士として戦い、平素は農民として農耕に従事する。戦国時代の末ごろからあらわれた。

- ⑥京都府綴喜郡井出町。歌枕で、蛙や山吹で有名。  
 ⑦おたまじゃくし。

- ⑧かえる。

御憎み晴れやらす、藤原の仲光に仰せ付けられ、首討たるるに極りしに、情ある仲光忠義を重んじ、我が子の幸寿丸を害し、あの子の首とて見せ参らせ、当座の命は助かりしが、終にそのこと顕れ、二度の御勘気御立腹。御親子の縁きれて、わらわ一所に判官殿に下され、今みずからは能勢の判官仲国が妻。あの子は一子冠者丸とは申せども、もとは満仲公の御子頼光の御弟、美女御前にておわします。ああ悲しきかなや、同じ源氏のたねと生まれ給う程ならば、御台所の御腹にも宿り給えかし。然らば出家の御沙汰もなく、頼光様は大将軍、あの子はまた副將軍と、千騎万騎の軍兵も従えなびけ給わん御身の、末代に残る源氏系図の巻にさえ、美女御前という名をけずって入れられず。漸うと郷侍 鋤鋤取りの大将とは、いたわしとも浅ましとも、数ならぬこの女の腹をからせ給うゆえ、御出家と仰せ出だされしが、果報の花のちり始め。井手の蛙の蝌の、小さき時は尾ひれあり。さながら魚のごとくにて、母蛙が親に似ぬ竜を産みしと悦べども、次第に尾ひれが手足となり、常の蟆となるゆえに、なげき悔やむと伝えしが、それは天地自然

仲公のご寵愛を受け、源氏の子をお腹に宿しました。そして生まれたのがあの美女御前と名付けた子で、大切にかわいがっておりました。しかし、頼光殿の母君にあたる御正室の御台所様をはばかり、出家させようと十一歳の春から十三歳の秋まで比叡山で修行をさせました。ところが、お経を一字も習わず、斬った張ったの武芸にばかり身をいれておりましたので満仲公はお怒りになり、いくらなだめてもお願いしても許さぬといひ、美女御前の首を取ってくるよう藤原の仲光にお言いつけになったのです。が、情けのある仲光殿は美女御前を救うため、忠義大事と、わが子の幸寿丸を殺して身替りにし、美女御前の首といつわって差し出し、その場はなんとか助かったのです。しかし、やがて事情がわかると、またもや御立腹になり、親子の縁をきられてしまい、いっしょに判官殿のもとにくだされてしまいました。そういう次第で、いま私は能勢の判官仲国の妻、あの子はその子の冠者丸と名乗るようになったわけでございます。しかし、もとはといえは満仲公の御子、頼光様の御弟の美女御前でございます。なのに、なんと悲しいことでしょう。同じ源氏の血筋に生まれるなら、御台所の御腹に生れたらよかつたものを。そうすれば出家を命じられることもなく、頼光様が大將軍なら、あの子は副將軍として、千騎万騎の兵士をも従える身となったことでしょう。とはいえ、いまこの身分では、末代まで残る源氏系図のなかに美女御前という名を書き入れることさえ



①普通の人の。  
②十分に仏の戒を守りなすきのため。

③水の濁った入江。かえるの住みかの意と涙に  
目がかもつている意を掛ける。

④『太平記』十、三浦大和合戦意見事に「古  
き諺に、見子不如父といへども、我先づ汝を  
以て上の御用に難立者也と思つて、常に不孝  
を加へし事、大きな誤也」とある。子の性  
質・行い・能力などについて最もよく観察し、  
その長所や短所を知っているのは親である、  
の意。

⑤深い御配慮。  
⑥悪逆な意を持つものの威勢。暴威。

の道理。みづからはたまたま源氏の大将を産みおとせし悦び  
は夢なれや。覚めては平人の子となり給うも、この母が戒行  
のつたなきゆえ」

と、つもる涙はにこり江に、

「夜昼泣かぬひまもなき、蟻に劣りしこの身や」

と、御前も人目もうち忘れ、かっぱと伏して泣きければ、君を  
始め渡辺定光諸共に、皆々袖をぞぬらさるる。

ややあつて頼光、

「小侍従のくやみ至極ながら、子を見ること父にしかずといえ  
り。満仲の深き御心入れこそありつらめ。今右大将正盛等が逆威  
にせめられし頼光が弟、美女御前とあるならば、かく安穩にあ  
るべきか。判官が子となりしゆえ、まずこの度の難をのがれし  
こと、父の慈悲のこれ一つ。御勘気の上からはものごとく出家  
ともなし給わず、判官が子に給わつて弓矢の家を立てさせらる。  
父の慈悲のこれ二つ。我世に出てもあるならば末を見よや、三  
つの慈悲。親のかたみは兄弟ぞ」  
とうち涙ぐみ給いければ、判官親子はあつとばかり、渡辺も

できず、郷侍、鋤鍬取りの大将として名を残  
すことになりました。なんともいたわしく、浅  
ましいことでございます。が、それもこれも、  
全てはこの私の腹から生まれたためござい  
ます。出家を命じられたのが、この子の不運  
のはじまり。井手の蛙は、わが子がおたまじ  
やくしの間は、尾ひれがあり魚のようなので  
その母は『親に似ぬ龍を産んだ』と喜ぶそう  
ですが、やがて尾ひれが手足となり普通の蛙  
の姿に育っていくと、なげき悔やしがると伝  
えられております。しかし、それは天地自然  
の道理というもの。私も、たまたま源氏の太  
将の子を産み落としたと悦んだものの、それ  
はすべて夢であつたのです。夢が覚めれば、  
こうして平人の子になってしまうのは、すべ  
てこの母が仏の教えを充分に守りとおしてい  
ないせいでありましょう」

と流れる涙はやむとぎがなく、「濁り江で夜  
昼たえず泣く蛙にも劣るこの身でございま  
す」と、頼光の御前もはばかり泣いている  
小侍従の姿に、頼光をはじめ綱も定光もも  
ら泣きをしておりました。しばらくして頼光  
が言いました。

「小侍従が悔しく思うのは当然であるが、し  
かし、子のことを最もよく知っているのは父  
だと言うではないか。その処置には、父満仲  
の深い御配慮があつたはずじゃ。いまもし、  
右大将正盛等の逆威に攻められているこの頼  
光の弟の美女御前と名乗つておれば、このよ  
うに安穩にはいられまい。判官の子とな  
つたが故に、この度の難を逃れることができ

- ①「立つ」は出発する意。「雲」は縁語で、「明くれば」を言い起す。  
 ②死者の魂。  
 ③持仏または祖先の位牌を安置しておく室。  
 ④身分の高い人の妻をさす語。ここでは能勢の判官の妻、小侍従。  
 ⑤「露」は命を暗示。  
 ⑥すみやかに菩提（悟りの境地）に達する意。回向のときの折りの言葉として用いる。  
 ⑦死者の成仏をねがって仏事を行なうこと。  
 ⑧心に念じ、仏名や経文を唱えること。

- ⑨仏教で、前世（ぜんぜ）・現世（げんぜ）・来世の三つ。過去・現在・未来。  
 ⑩生滅変化することなく、過去・現在・未来にわたって存在すること。  
 ⑪陰暦七月十五日を中心に行われる仏事。祖先の霊を自宅にむかえて供物をそなえ、経をあげる。  
 ⑫こは、盂蘭盆に祭られる祖霊。

- ⑬中を二段にして使うため二重にしてある箱で、外の縁にかけてつり下げた内側の箱。外箱の底の部分を見えないようにしてあるところから、本心を打ち明けないことや、隔て心や偽りの心があることにたとえられる。

- ⑭いまさら改って、わざとらしい。

- ⑮貴人がその座にあること。いらっしやること。

定光も、末頼みある源氏の光、かかげそえたる灯籠の、かげに門出の盃や。

おいとま給わり立つ雲の、明くれば七月十五日、亡き魂祭る持仏堂。北の方はただ一人香をたき、水手向け、ささぐる花は蓮葉の露の数々なき人の、頓証菩提と回向の折から、判官立ち出で、同じく香花奉り、しばらく念誦こと終わり、

「のう小侍従、あれ見給え。本尊は三世常住の仏菩薩。殊に今日は盂蘭盆にて、親祖父の聖霊、満仲公の亡き魂もこの持仏堂に来たらせ給う。尊霊の御前にて申すからは言葉にも虚言なく心にも懸子なし。御身もまた偽りなくまっすぐに返答あらば、語るべきことあり。心底聞かん」とありければ、

「ああ今めかし。何ごとか存ぜねども、常にも偽り申すにこそ。殊に大事の盂蘭盆の、年に一度のお客の聖霊、仏の前にて露程も虚言のお返事いたそうか。語らせ給え」と仰せける。判官うなずき懐中より文一通取り出だし、

「これ、これ見られよ。頼光これに御座のよし右大将伝え聞き、

たはず。まずこれが父満仲の慈悲の第一。また、御怒りになつたとはいえ、もとのように出家とはされず、判官の子として武士の家を立てさせようとしたのもまた、父の慈悲のゆえである。これがその第二。それに、もし私が世に出たならば、冠者丸の将来も心配には及ばぬ。ともに父の子であるからな。これが父の慈悲の第三というものじゃ」と涙ぐみつつ語る言葉に納得した判官親子は、そのまま平伏しました。綱も定光も、源氏の将来の威勢を樂しみにしつつ、さらに光を増した燈籠の光を受けつつ、門出の盃を干しました。

そして、綱と定光は伊勢、紀伊に向けて出立していきました。あけて次の日は七月十五日。亡き魂を祭る持仏堂で、北の方はただ一人香を焚き、水を手向け、蓮の花をささげて、その葉に宿る露のように散っていった多くの人々の極楽往生を願うために回向をしておりました。

そこに判官がやって来て、同じく香花を供え、しばらく念仏を唱えていました。それが終わってから判官は、小侍従に語りかけます。「のう、小侍従や。あれを見なされ。この御本尊は、過去・現在・未来と三世を守って下さる仏菩薩。殊に今日は盂蘭盆ゆえ、親祖父の御霊も、満仲公の亡き魂もこの持仏堂に来ていらっしやるはず。その尊霊の御前にて話すことゆえ、全くいつわりのない私の本心じや。そなたも、ぜひ正直に返答してほしいの

① いやおうなしに切腹させること。

② 神仏に誓いを立てた文書。違背したときには冥罰（みようばつ）をこうむることを明記する。

③ 道ならぬこと。道理から外れていること。力をかす。味方する。また、関係する。

④ 落ち度。ほうつておくこと。

⑤ あなた。軽い敬意を表す呼び方。

⑥ 願ひむなく。残念なことに。

⑦ 結局。所詮。

⑧ 返答。応答。

⑨ どんな人の目の届かないところも。

『急ぎ詰め腹切らするか、但しひそかにさし殺すか。首打つて出すにおいては、一子冠者丸は由緒ある者なれば、源氏の大将と奏聞し、取り立てん』との文に、起請を書き添えこされたり。されどもそれがし、かかる非道に与すべきか。『頼光をひそかに落とし奉り、右大将より咎めにあわば腹切るまで』と、心におさめ打ちなぐつておきけるが、御身昨日のくどきごと。『たまたま満仲の若君を誕生せし甲斐もなく、平人の判官が子と埋もるる冠者丸、明け暮れ本意なく悲しし』と、水に住む蝸まで思い続けて悔やみの体。母たる身にては道理なり、もつともなり。畢竟この判官が為には、我が子にて子にあらず。現世の親とは御身のこと。頼光を失い冠者丸を世に立つべきや。後悔のなき様に心の底をまつすぐに聞かまほしし』とありければ、小侍従はつと胸ふさがり、文くりかえし巻きかえし、顔をかたむけ目をふさぎ、胸に手を組みさしうつつむき、思案取りどり様々に、暫し答えもなかりしが、

「ああ、誠そうじゃもの。のう判官殿。たとえ頼光様、ここを助け落としても、かくまで栄うる右大将、御首見ずしては、雲

だが」

「何を今更改まったことをおっしゃるのでしようか。なんの話かはわかりませぬが、いつだって私は偽りを申しあげたことはございませぬ。まして今日は大事な盂蘭盆の日。年に一度お迎えする亡魂や仏様の前で、どうして偽りのお返事などいたしましょうか。どうぞ心おきなくお話しください」

という小侍従の返事に、判官はうなずき、懐から一通の手紙を取り出しました。

「この手紙をくらんなされ。頼光様がここにいらつしやることを右大将が伝え聞き、『急ぎ切腹させるか、さもなれば、ひそかに刺し殺せ。いずれにもせよ、頼光の首を討つて差し出せば、そなたの子冠者丸を、由緒正しい源氏の血筋であり、大将にふさわしいものと帝に進言し、取り立てるようはからつてやろう』と、起請まで書きそえて私のものと遣わされたのじゃ。むろん、なにゆえそのような非道なことに味方することができよう。『頼光殿を密かに逃がし、右大将から咎めがあつたなら、自らは腹を切るまでのこと』と、自分一人の心におさめ、ほうつておいたのじゃ。が、そなたの昨日の涙の訴え。『たまたま満仲殿の若君を生んだのに、その甲斐もなく、平人の判官の子として埋もれている冠者丸のことが残念で悲しくてなりませぬ』と、水に棲む蛙のことを引き合いに出しながらなげき悔やしがっていたそなたの思いは、母として当然のこと。この私にとって冠者丸は、たしかに我が子ではあるが、所詮、血のつながつ

①何も得るものはない。

の裏にもよもや助け置くべきか。時には冠者丸も世に出でず。

①一も取らず二も取らず、源氏の破滅この時なり。いたわしな  
がら討ち奉り、冠者を源氏の大將軍、清和の系図を継がせんは  
我が身の幸い、あの子が果報

と、言わせも果てず、

「おお、皆まで聞くに及ばず。さこそ思いて尋ねしこと。御首  
討つは今日の中。用意せん」

と立つ所を、

「これ、のう。御身の為には相伝のお主。世のそしり、天のと  
がめ、仏神のいかりも恐ろしし。みずからが一刀に騙し寄つ  
て刺し通さん。場所はこの持仏堂。千に一つも仕損ぜば、声を  
かくるを合図に駆けつけて、首取り給え」

「おお、いさぎよし。然らば御身討たれよ。次の間に忍びいて、  
声次第に馳け出でん」

「必ずせくまい」

「気遣いなされな、首尾よう」

と、わかれて座敷に立ち出ずる。あと見送りて北の方、

た本当の子ではない。本当の親はそなたしか  
おらぬ。それを思うと、頼光を殺して、冠者  
丸を世に立てたほうがよいのではないかと  
思われてくる。そこで、後悔のないように、  
いまここで本心を聞きたいのじゃ」

小侍は、「はっ」と胸がつかえ、手紙をく  
りかえし巻き返し読み、顔を傾け目をふさぎ、  
胸に手を合せ、うつむいて様々に考えをめぐ  
らせ、しばらくは返事もできませんでした。

が、やがて、

「ああ、本当にそうですね、判官様。たとえ、  
頼光殿をここからお逃がしても、いまこの  
ように羽振りのよい右大将のこと、頼光様の  
御首を確かめないでは、どこにも生かしてお  
かないでしょう。そうなれば冠者丸も世に出  
る機会はなく、すべてを失ってしまい、源氏  
は破滅してしまいます。となれば、おい  
たわしいことではありますが、頼光様を討ち、  
冠者丸を源氏の大將軍として立てる方がよい  
ということになります。清和天皇以来の源氏  
の嫡流を冠者丸に継がせることになれば、私  
にとっても幸いでございますし、あの子にも  
幸運となりましょう」

と返事しました。判官は、

「おお、あとは言わずともよい。そう思った  
からこそ、尋ねたのだ。では、頼光の御首は  
今日のうちに討つてしまおう。では、早速用  
意を」

と立っていこうとするので、小侍は、

「頼光様はあなたにとっては先祖代々の御主  
人。その人を討つては世のそしりはまぬがれ

②主従の関係が代々続いていること。



①舌を強調している語。転じて、ものを言うこと。おしゃべり。発言。

②すみずみまでさぐり見られ。見抜かれ。

③本当と感ぜられない。

④詮ずるところ。つまるところ。結局。また、こうなったからには。

⑤証人。

⑥夫を裏切る心のない忠実な妻。

⑦護身用の短刀。貞女の道を「守り」に掛ける。

⑧今日一日がこの世とあの世の境目だ。

⑨「生死（しょうじ）」を掛ける。

⑩片親でもある者は、今日は特別の祝日ゆえ。片親だけでも生きていることを喜ぶことを言う。

⑪無造作にたばねた髪。たばね髪。たばなど出してなく、冠者丸は死を覚悟し、首を切るのに都合のよい髪型をしていたことになる。

⑫「さにそうろう」の転で、応答の語。はい。そうです。そのことでございます。

⑬庭園に築いた山。

⑭私。丁寧な言い方。複数でも使う。

⑮湯や水で体を洗い清めること。汗を流すため、または、神事・仏事を行なう前に体を清めるために行なう。

⑯自分の髪を自分で結うこと。

「恥はずかしや。男おとこも女おんなも、つつしむべきは舌した三寸さんすん。子こを思おもうあ

まりの言葉ことばに心こころを見みさがされ、疑うたがい受うくるももつとも。言葉ことば

の言いいわけ誠まことしからず。所詮しよせん御身おんみ代がわりに、冠者丸かんじゃまるが首くび討うつて、

頼光らいこうの御難ごなんを救すくい、よこしまなき誠まことの心こころ、この仏ほとけこそ証しょう拠こぞ」

と、貞女ていじよの道みちを守り刀がたな、袂たもとの下したにおし隠かくす。数珠じゆずも我わが子こ

別わかれの涙なみだ、

「今日けふ一日いちにちを現世げんせ未来みらい」

障子しょうじをさつと開あけければ、冠者丸かんじゃまる立ち出いで、

「今日けふは仏事ぶつじの日ひとは申もうしながら、片親かたおやにてもある者ものはわきて

祝いわい日び。めでたく御顔おんかお見みせ給たまえ」

と、にこやかなるを見みるにつけ、母ははは心こころも乱みだるれど、さあらぬ

体ていにて、

「おお、この祝いわい日びに髪かみをも結ゆわず、取とり上あげ髪かみは何なにごとぞ。

頼光らいこうさまは何方いずかたにまします」

「さん候ぞうろう、築山つきやまの涼み所すずに御入おんいり。我われ等らもお側そばにありけるが、

残暑ざんしょしのぎがたく行水ぎょうすいいたし、髪かみもととき、自鬢じびんに取とりあげ、見苦みぐる

しからん」

ませぬ。天あまのとがめ、仏神ぶつじんの怒いかりも恐れねば  
なりませぬ。それよりは、この私わたくしが一太刀いちたてに  
だまし寄よつて刺さし通とおすことにいたします。場  
所ところはこの持仏堂ぢぶつどう。もし、私わたくしが仕損しとんじたその時  
は、声こゑを合図あひづに駆かけ付つけてきていただき、あ  
なた様さまが首くびを取とつて下さい」

「おお、いさぎよいことだ。ならばそなたが  
お討うちなされ。私は次の間に忍しのんでいて、声  
をかけ次第しだいに駆かけ出でることしよう」

「決してあせらないでください」

「そんな心配しんぱいはいらぬ。うまくいくようにな  
」  
と言いいつつ、判官はんくわんは小侍せうじ従じゆと別わかれて座敷ざしきへと  
出でて行いきました。

その後のちを見送みおくりつつ北きたの方は、

「ああ、なんと恥はずかしいこと。言葉ことばはつ  
しまねばならぬもの。子こを思おもう余あまり、思おもわず  
語かたつてしまった言葉ことばにいやしい心こころを見抜みかれ  
てしまった。疑うたがわれてももつとも。どんなに  
弁解べんげをしても取とり返かへしはつくまい。こうなつ  
た以上いじやう、頼光らいこう様の御身ごんみ替かわりとして、我われが子こ  
冠者丸かんじゃまるの首くびを討うち、頼光らいこう様の御難ごなんを救すくい、よ  
こしまな心こころなどないという誠まことの心こころを示しすしか  
あるまい。持仏堂ぢぶつどうの仏ほとけが証人しょうにんになつてくれる  
はず」

と、貞女ていじよの道みちを守るべく、守り刀まもりやを袂たもとの下したに  
押し隠かくしました。数珠じゆずをもみつつ祈いのりますが、  
その玉たまは我われが子こに別わかれる悲かなしみの涙なみだのように  
思おもわれます。

「今日けふ一日いちにちがこの世よとあの世あのよの境目さかいめ」  
と思おもいつつ、生死しんじの境さかいとなる障子しょうじをさつと開あ

①近世の髪型で、髪後の張り出した部分の名。男女ともにいう。

②能勢の判官。また、小侍従のことか。  
③「未来」は死後のこと。満仲。

④一重の着物。  
⑤死者の冥福を祈り、鎮魂を願ってなす行爲。

⑥いつなががあるかわからない。はかない。  
⑦自分のためにも他人のためにも平等の。

⑧はい。応答のことば。

⑨冠者丸が死を覚悟してかたびらを改めているのに、さらに小侍従が「かたびら着かえ……」と言うことを「かさぬる死に装束」とした。  
⑩白い一重の着物。死に装束に用いることが多い。「しら」に「知らず」を掛ける。  
⑪思いつかないのは、「そめ」は白かたびらの縁。

⑫「蟻螂」はカマキリ。カマキリが斧状の脚をふりあげて立ち向かって何の効果もないこと。諺で、身の程をわきまえずに強い者にはむかう意。  
⑬御刀に切られ。「佩刀」は、貴人が帯びる刀。

⑭家の端の方にある両開きの戸。

⑮急なできごとに驚いて身構えたり、改めて気がついたときに発する語。さては。

⑯かすかな物音の形容。

⑰刀身の鏞(はばき)をはめた所。はばきは刀のつばにつけた金具。

と、つとかき撫なずる手つき手もとも今の間の、形見と思えば胸迫せまり、物言ものいう声こえもしどろなり。

「これ冠者丸。現世の親より未来の親がまず大事。行水せしこそ幸い。かたびら着かえ身を清め、御経読んで、父聖霊の手むけ。若き身とて無常の命。いつ何時の定めはなし。自他平等の回向しや」

「あつ」

と答えて冠者丸、親のかさぬる死に装束。その身はそれともしら帷子、思いそめぬぞ哀れなる。

能勢の判官仲国は、

「妻の小侍従頼光を騙し討ちに討たんとは蟻螂が斧。かえって御佩刀にかかり顕れては一大事。あら気づかわし胸安からず」

と、仏間の妻戸にうかがえば、静かにお経の声聞こゆ。

「すわや、これぞ頼光の御声。かく御心をゆるされし上は何ごとかあらん。物音のそよともせば妻戸一重蹴やぶって、ただ一討ち」

と、はばき本ぬきかけて耳をそばだてひかえたり。

けると、ちょうど冠者丸がやってきて、「今日は死んだ人の霊を迎える魂祭り日。とはいえ、片親であれ生きてある者にとつては、格別に祝いたい日でもあります。どうぞ元氣な御顔をお見せ下さい」

と、にこやかな息子の様子を見るにつけ、母は心が乱れますが、何事もなかったような様子で、

「おお、この祝いの日に髪も結わずに、たばね髪とは一体何ごとですか。頼光様はどちらにいらつしやいますか」

「はい、築山の涼み所にお入りになっております。私もお側にいたのですが、残暑がきつく感じられましたゆえ、行水をいたし、髪もといてしまいましたので、自分で結いはしましたが、このように乱れていては見苦しかろうと思ひまして、ここに控えておりました」と、うしろ髪をかき上げるその手つきも、あとしばらくの間の形見かと思つと胸がつまり、何を言おうとしても声が乱れてしまいます。

「これ、冠者丸。この世の親よりも、あの世にいらつしやる満仲様にお祈りする方が先でしよう。幸い行水したばかりとのこと。すぐに着替え、身を清め、御経を読んで父満仲殿の霊に手向けをなさい。若いといつても、命ははかないもの。いつなん時失われるかわかりませぬ。人のためにも自分のためにもすぐに回向をしなさい」

「はい」とこたえて、冠者丸は、着替えに行きました。まるで親が死に装束を重ね着させるようなもの。それとも知らぬさまはまこ

①時間もたつた。「経」には「今日」、「日」もには巻物状のお経に付けてある「紐」を掛ける。

②ひるむまい。

③ここは、お経の読み方。

④涙で目がくらみ、決心もつきかねていたが。

⑤『妙法蓮華経』七、「観世音菩薩普門品」第二五にある句。観音は慈悲の眼で衆生を見、福が集ることは海のようにはかりしれない、の意。「現」は「眼」、「寿」は「聚」が正しい。

⑥仏教で、地底深くにある暗黒の世界。ここでは地獄をさす。

⑦悲しみのために気を失いそうになつては。

⑧お経を読み終わる時の意。「巻軸」は巻物状のお経の軸で、お経の最後がこれにつながっている。

⑨どうしようもなくなり。

冠者丸は一心不乱、読む御経の日もたけたり。

「ああ歎くまい、おくれまい」

と、母は刀をすりと抜き、うしろに立ち立ったれども、髪黒々と色白に、読踊の弁舌さわやかに、百人にもすぐれし生まれつき、見るに目もくれ心消え、太刀ふり上げし手も弱り、涙のやみに迷いしが、

「さてかわいいやな、後ろよりこの母が斬り殺すとはつゆ知らず、『慈現視衆生福寿海無量』と読むか、ふびんやな。親を殺す子にばかり天罰あたるは何ごとぞ。我がごとく、子を殺す親にも罰のあたれかし。奈落に早く沈みなば、この世の思いはせまいもの」

と、太刀ふり上げては泣きしずみ、消え入ってはまた振り上げ、声をも立てずかっぱと伏し、からりと投げし太刀よりも、胸を切りさく思いの刃、涙玉ちるばかりなり。御経もはや、巻軸の時刻過ぐれど、討つも討たれず、詮方つき、

「判官殿はおわせぬか。出合い給え」と呼ばわれば、

とにあわれなものでありました。

一方、こちらは、能勢の判官仲国、

「妻の小侍従がいくら頼光殿をだまし討ちに討とうとしても、まさに『蟪蛄の斧』。身の程知らずにもほどがある。逆に切られてしま、頼光殿に妻の心がばれてしまつては一大事。ああ、心配でたまらぬ」

と、仏間の妻戸から様子うかがうと、静かに御経を読む声が聞こえます。

「これは頼光のお声。このように御心をゆるし、油断なさっているようであれば、その首を討つのはなんでもないことだろう。かすかにでも物音がしたなら、妻戸一重を蹴破つて、ただ一討ちにしよう」

と、いつでも刀が抜けるようにつばもとをゆるめ、耳をそばだてて控えておりました。

持仏堂では、冠者丸が一心不乱に御経を読んでいます。時間がたつていきますので、

「ああ、嘆くまい、ひるむまい」

と、母は刀をすりと抜き、冠者丸の後ろに立つことは立ちましたが、髪は黒々としており、色白で、経文を読み上げる声もさわやかな、百人にもまさる勝れた生まれつきの我が子を討つかと思つと、母は目もくらみ、正気もなくなり、太刀を振り上げた手も弱り、涙に目がくらみ、なかなか決心がつきかねていました。

「ああかわいそうに。後ろからこの母が斬り殺そうとしていることは少しも知らずに『慈現視衆生福寿海無量』と読んでおる。かわいそうなこと。親を殺す子には天罰があたると

①心得た。かねてから待ち構えていた時に発する語。

②うしろへとびさがり。

③あつけにとられて。茫然として。

④そなた。敬意、または親愛の情を込めて呼ぶのに用いる。

⑤内々に話を通じておくこと。

⑥名譽に関する大事。

⑦殺して。

「さしつたり」

と、妻戸蹴やぶりとんで入る。冠者丸もとびしさり、互に顔をきつと見合わせ、あきれて言葉はなかりしが、母は泣く泣く声をあげ、

「御不審はもつとも。やれ冠者丸。右大将より『頼光を討ち奉れ。おことを源氏の大将とあおがんと』との内通。判官殿の名の大事、御身を害して頼光の御首と敵をたぶらかし、御難義救い、御身も母も末代に女の道、忠孝の名をとどめんと、この太刀をいくたびか打ちつけん、打ちつけんとはしたれども、愛しかわいに目もくらみ、どうでも母はえ討たれぬ。のう判官殿はやはやあの子を討つてたべ。

こりやうろたえな。お主といい、もとは兄。お命に代るは本望なり、ほまれなり。母方がいやしうて、未練の最期と笑わするな。目をふさぎ、手を合わせ、尋常に討たれてたも」とくどき給えば、冠者丸顔色さつと青くなり、わじわじ震い、「やあ、なんと。我等がこの首討たんとや。親分ながら判官殿はもと他人。頼みにしたる一人の母、情なや、むごらしや。か

⑧頼光はそなたにとって御主人であり、またもとは兄だから。

⑨わななくさま。寒さや恐怖のために震えるさま。わなわな。ぶるぶる。

⑩親に当る人。

⑪ほんのちよつとした。

いうが、私のように子を殺す親にも罰があたればよいのに。そして早く地獄に沈んでいつてしまえば、この世のこんな辛い思いはせずすむはずなのに」

と、太刀を振り上げては泣き沈み、気を失いそうになりながらまた振り上げ、それをくりかえすうち、とうとう声を立てずにつつ伏して、からりと太刀を投げました。母は、太刀よりも鋭い刃で強く胸を切りさかれるような辛い思いで、涙は玉が散るようにあふれ出るのでした。御経もはや読み終わる時刻になりましたが、どうしても討つことができぬまま、どうにもしようがなく、

「判官殿はいらつしやらぬか。お出合いくださいませ」と叫びますと、

「心得た」と妻戸を蹴破りすぐに飛び込んできました。冠者丸は後ろへ飛び下がり、互にきつと顔を見合わせ、茫然として言葉を出すこともできないうちに、母は泣きながら、

「御不審はもつとも、冠者丸。右大将から『頼光を討つて首を差し出せば、そなたを源氏の大将と認めよう』との手紙が届いたのです。これは、判官殿の名譽にかかわる大事ゆえ、そなたを殺し、頼光様の首と偽って敵をだまし、頼光様の御難儀を救えば、そなたも母も、末の世まで、女の道、忠孝の道を立てたという評判が立つはず。そう思って、この太刀を何度も打ちつけようとはしたけれど、愛しさ可愛さに目もくらみ、どうしても討つことができませぬ。お願いです、判官殿。早く早く



①無情な。冷淡な。

②情ない。嘆かわしい。

③刀の切れ味をみるために、ずたずたに試切(ためしぎり)にすること。

④あきらめて。  
⑤「捨てよう」の転。

⑥人間界。

⑦そなた。同輩やや目上の人に用いた。ここは小侍従のこと。

⑧商人百姓。  
⑨素性や身分・階級が下賤な男。相手にのしるときに用いられたりする。

⑩怒りなどの態度をやわらげる。

りそめのわずらいにも、薬よ灸よとのたまいしは偽りか。首討たる科ありとも、助くるこそ親の慈悲。つれない母や恐ろしや」

と、逃げんとするを、母とびかかって引きとどめ、

「ええ、あさましや口惜しや。やい、咎あつて討たるるほどならば、母がこの身を一分だめしに刻まれても見殺しにするものか。子の命は親の命。たとえ御身が思い切り、捨ちようというても捨てともない。御身が命は御身より、母が百倍惜しけれど、それを殺すは、人界の義理という字に責められし、母が心を思いやれ。死にともなくは殺すまい。せめて一言いさぎよく弓とりらしい言葉を聞かせ、恥をすすいでくれよ」とて、声をあげて歎かるる。判官あざ笑ひ、

「これこれ、御辺の心底は顕れたり。生きとし生けるもの、命惜しまぬ者やある。その一命を義によって捨つるを弓取り武士と名付け、惜しむは買人土民という。左様の下郎を御身代わりにとつて何の益あらん。この上は頼光の御運次第」とありければ、冠者色をなおし、

あの子を討つて下さい」と判官に言ったあと、冠者丸にむかい、

「うろたえてはなりません、冠者丸。頼光殿はそなたにとって御主人であるとはいっても、もとは兄。お命に代わるのは本望であり、誉れのはず。賤しい母に生れたため、未練いっぱい最後の最期であった、と後の世に人笑いにならぬよう、目をふさぎ、手を合わせて、立派に討たれなさい」

と説得しました。が、冠者丸の顔色はさつと青くなり、わなわなとふるえ、

「やあ、なんと、私のこの首を討とうというのですか。親にあたる人ではありながら、判官殿はもとは他人だからしかたないとして、頼みにしていた一人の母がこんなことを言うとは、なんと情けないこと。ほんとうにむごいこと。ちよつと病にかかった時に『それ薬を、灸を』と言われたのは偽りでしたか。もしも首を討たれるようなおとがめを受けたとしても、それを助けるのが親の慈悲のはず。なんと無情な母君ではあるまいか。ああ恐ろしや」

と、逃げようとするのを母はとびかかって引きとどめ、

「ええ、情けない。いまましい。とがめを受けて討たれるのであれば、母のこの身をずたずたに切り刻まれても、そなたを見殺しになどするものか。子の命は親の命。たとえそなたがあきらめたとしても、この私はあきらめませぬ。そなたの命は、この母の方が百倍も惜しく思うもの、こうして殺さねばなら

①お考え。とりはからい。  
②命拾いをした。

③不憫。かわいそう。  
④きつぱり。すつかり。

⑤太刀をふるう勢いで生じる風。「風」「さかり」  
「小椿」は縁語。  
⑥人生の最も盛んな時期。  
⑦椿の花の一輪が開いた形そのままに落ちるのを、首が落ちるのになどとえている。冠者丸が子供なので「小」とした。  
⑧こみあげてくる。  
⑨もとどり。髪を上げて束ねた所。

⑩前世の行いが悪く。仏教では、生れる前の世界を前世とし、そこでの行ないが悪いと、そのむくいとして現世に悪い結果があらわれると考える。  
⑪鳥・けもの・虫・魚など、人間以外の生きもの。こは人の道にはずれている者の意。冠者丸が頼光の身代わりに死ぬことを拒んだので、武士の道からはずれた者として「畜生」と称した。  
⑫人に合わせる顔がなく。  
⑬隠れて過す身から源氏の大將として世にお出になる。

⑭外の方にいる侍。

⑮なるべく早く。早急に。いそいで。

⑯承知か不承知か。否応。  
⑰御返事なさるがよろしかろう。

「ああ、ありがたき御了簡。命一つ拾いし」

と逃げ出づるを母とつて引きすえ、

「ええ、恥知らず。かわいさも不便さもふつとりと覚めはてたり。長き恥を見せんより、母が慈悲ぞ」

と言より早く抜きうち討つ太刀風に、さかりを待たぬ小椿や、首は前にぞ落ちにける。胸にせきくる涙をおさえ、髻ひつさげ夫に近付き、

「過去の業つたなく畜生を産みながら、人と思いで育てしは、面目なくも恥ずかし。かかる者を大將の御身代りとは恐れながら、我々が忠孝の志を立て給い、御情には君御出世の後までも、この子が最期は健気なりと、必ず恥を隠してたべ。言うに甲斐なき最期や」

と、またむせ返るぞ道理なる。

かかる所に外さまの侍六七人はせ来たり、

「やあ、右大將より『御返事遅し』とて使い度々に及び候。急々に有無の御返答然るべし」  
とぞ申しける。判官少しも騒がず、

ぬのは、人間界の義理という文字に責められたからに他なりません。この母の心を思いやつてくだされ。死にたくなければ、殺さずにおきますが、せめて一言、いさぎよく、武士らしい言葉を聞かせて、いまの恥をすすいでくだされ」  
と、声をあげて嘆いている。判官は笑いながら、

「これ、そなたの心底ははつきりわかった。生きとし生けるもの、命を惜しまないものがどこにあるか。その一命を義によっていつでも捨てる覚悟をしているものを武士と名付けている。命を惜しむものは買人土民にほかならぬ。このような命を惜しむ下郎を頼光殿の身代りにしてもよいことはあるまい。この上は、頼光殿の御運にまかせましょう」と言いましたので、冠者丸はほっとした様子で、

「ああ、ありがたいとりはからいでございませ。命拾いをしました」  
と逃げ出していくのを、母はつかまえて引きすえ、

「ええ、この恥知らずめ。もはや、かわいさもあわれさもすっかりさめてしまいました。命長らえて恥をさらすより、こうするのが親の慈悲」

と言うやいなや、抜きうち首を討ち落としました。その太刀に、人生のさかりを待たずに、冠者丸の首は椿の花が落ちるように前にほとりと落ちてしまいました。胸にこみあげてくる涙をおさえつつ、その首をひっさげて

①瀬戸際。

②武士としてのしあわせ。「冥加」は神仏の加護によるしあわせ。  
③同じことなら。

④同じ血筋の別れ。肉身。

⑤髪の生えぎわの丸いひたい。冠者丸はまだ少年なので、生え際をこの形にしている。  
⑥左右を剃りあげて前髪の生えぎわを角形にしたひたい。頼光の方は成人に近いのでこの形にしている。  
⑦今のままで。

⑧かみそりを入れて角額にすれば。  
⑨そっくりだ。間違いないだ。  
⑩櫛などの化粧道具をいれる箱。

⑪母様へ。母様にさしあげる意。

⑫あるいは。もしかすると。

⑬松は千年も栄えるが、朝顔はほんの一時を一生とする。  
⑭すべては前世にさだまっており、この世はほかない夢のようなもの。  
⑮前世。  
⑯現実。死や夢ではない状態。  
⑰そうだから。だから。  
⑱勘気。不興。

⑲七度この世に生まれ変わること。転生し得る極限の回数を表わし、未来永劫・永遠などの意を表すときに用いることがある。

「あれ聞き給え。君の御難儀只今に極まって、先途の御用に立つことは、御身誠の志。弓矢の冥加にかないたり。とてもことに最期清くせざりしことの残念さよ。血の別れとて、顔ばせは頼光に似たれども、丸びたいと角びたい、この分にては渡されず。この首に角入れば頼光にまがいなし」と、櫛筒引き寄せ髪をとぎ、元結とれば髻の中、一通の文を結びこめ、「母さま参る、冠者丸」と書いてあり。夫婦不審はれやらず、

「さては覚悟のありけるか。ただしは何ぞ、望みごとでもありけるか」  
と、泣く泣く開き読みあぐる。声も涙に埋もれて、文の言葉もしどろなり。

「松は千歳を盛りとし、朝顔は一時を一期とす。万事は前世に定まる夢、何をうつつと定むべき。しかれば我等、満仲公の不教を受け、判官殿の子となり、十三の春より十六のこの秋まで、養い親の御厚恩、申すにも言葉なく、ことさら母の御恩徳、七生生まれ変わりても、報じ方なく存ずる折節、我が首討つて頼光

夫に近づき、

「前世の行ないが悪かったため、こんな畜生めを産んでしまったのに、これまで人間と思つて育てた自分がとても恥ずかしいことです。このような者を頼光殿の御身代りにするのは恐れ多いことですが、私たち親子の忠孝の志を聞き入れていただくようお願いいたします。頼光殿が世に出られました後には、この子の最期は健気だったと語つて、この子の恥を隠してくださるようお願いする次第でございます。それにしても、なんとという最期」と、またむせびあげて泣いているのは当然であります。

そのような折も折、外にいた侍が六七人走り来て、

「右大将から御返事が遅いといつて使いが何度も来ております。急いで承知か否かの御返事をなさるのがよろしいかと存じます」と伝えてきました。判官は少しも騒がず、「あれを聞くがよい。頼光殿の御難儀はいよいよのつびきならぬものになってきております。このときに御役に立つのは、冠者丸、そなたの本望であつたはず。それはまた、弓矢をとる武士の冥加にもかなうもの。同じことならいさぎよく死ねばよかつたものを。そうでなかつたのはまことに心残りなこと。とはいえ、この首は、御兄弟のことゆえ、頼光殿とよく似てはいるが、丸びたいと角びたいの違ひだけはかくせない。このままでは右大将に渡すわけにもいかぬので、この首に角入れをして頼光殿に似せることにいたそう」

① 御自分の身にかえての。

② きつと。多分。

③ 態度や様子などがみすばらしい。見苦しい。

④ 物心がついてから。

⑤ 臨終の時。死にぎわ。最期の時。

⑥ 生まれかわり死にかわる長い未来。未来永劫。

⑦ 三世にわたる、あらゆる仏たちも御覧になって下さい。

⑧ 成長するまで。

⑨ かえすがえすお名残はつきません。

⑩ 手足と胴。からだ。

の御身代りとの志、物かげより見参らせ、望む所と存ずれども、常々母の御不憫、荒き風にも当てられず、御身にかえての御寵愛。その期に臨んでは歎きに沈み、よもや討ち給うまじ。所詮我ら臆病者、未練の体を見給わば、御憎しみの怒りの刃、御心やすく討ち給わんと、わざとさもしき卑怯の最期。命惜しむと思すなよ。西東覚えてより、ついに一度も御気に違し事もなく、一生の別れ今際の際、御腹立ちの御かおばせ見奉らん悲しさは、来々世々の迷いなり。さりながら君には忠、親には孝、母の貞女の道立てば身においての悦び。三世の諸仏も照覧あれ。命はさらに惜しからず。悲しみの中の悲しきは、年たくるまで母上の御寝間近く起き臥して、今宵よりの御歎き思いやられていとおしく、御名残は尽きせず候。かえすがえすと書きとどむ。

母は文を身につけ首かきよせ、抱きついてかっぱと伏し、声をあげて泣き給う。思い切ったる判官も、わつとばかりに五体を投げ、消え入るばかりに歎かるる、心の内こそあわれなれ。

母は涙のひまよりも、

と櫛笥を引き寄せ、髪をとき元結をとりますと、髻の中に一通の文を結びこめてあります。その表には、「母さま参る、冠者丸」と書いてありました。夫婦は不思議に思い、「さては覚悟していたのだろうか。あるいは何か願いごとでもあったのだろうか」と泣きながら開いて読みあげていきますが、その声はやがて涙声となり、文の言葉も乱れていくのでした。

「松は千年も栄えるといいますが、朝顔はほんの一時だけの生であります。すべてのことは前世から定まっております。この世ははかない夢のようなもの。何がたしかなものなのでしょうようか。」

私は父満仲公の御機嫌を損じ、判官殿の子となり、十三の春から十六のこの秋まで、養い親として御厚恩を受けておりましたが、その感謝の気持ちをお申しあげる機会はありませんでした。また、母の御恩にも、七回生まれ変わっても報いるすべがないと思っておりますが、そんな折も折、私の首を討って頼りましたが、そんな折も折、私の首を討って頼光殿の御身代りにするとの御意向を物かげで聞き、まさに、このときこそ、これまでの御恩に報う機会であると思いました。が、日頃、母が私を荒き風にも当てぬようにとご自身の身にかえて大切にしてくださるその愛情のほどを思うと、いざ私を斬ろうとしても、歎きのために討つことはおできにならないだろう、とも思われます。が、私が臆病者で未練がましいふるまいをすれば、憎しみの怒りの刃で私をたやすく討つことができるはず、と考え



①人は血筋のよしあしが自然と態度に現れてしまう。  
②父系の血統。血すじ。それを伝える子。  
③少しも知らず。

④おそれおおい。  
⑤「冥加」は神仏のご加護による幸運。救われようがない。  
⑥人が死んで、また次の生を受けない間。

⑦思慮分別がないことだ。考えがさはかである。  
⑧冠者丸はわたしにとって本当の主君である。

⑨何の役にも立たず、むだに死ぬこと。  
⑩結縁のため（僧体となるように）剃刀で髪剃（こうそり）をするつもりで、額に剃刀で角をいれよう。  
⑪大切にしているのは天の誠の道。これを守れば守ってくださる仏様。「いただく」は剃刀をいただく意と天の誠の道をいただく意を掛ける。  
⑫盂蘭盆。精霊会。「玉」はみがくの縁語。  
⑬蓮葉は魂祭に用いることからの縁語。「はちす葉のにこりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざむく」（『古今集』三、僧正遍昭）による。  
⑭「予謂ヘラク菊ハ花之穩逸ナル者也。蓮ハ花之君子ナル者也」（『古文真宝』後集、愛蓮説、周茂叔）による。  
⑮儒・仏二道の教えに明るい人。判官の心はたのもしい。なお「天の誠の道」「忠義をみがつく」「君子」は儒教、「御仏」「後世」「玉まつり」「蓮葉」は仏教関係の語で、二教一致の思想を表す。

「ああ、人は筋目が恥ずかしい。さすが満仲の御胤にてありし者。このお心とはつゆ知らず、臆病なりと心得て、いやしき母が口にかけて、言い恥じしめたる勿体なさ。恐れがまし、冥加なや。中有の旅の御供して言いわけせん」と太刀取りあぐれば、判官おさえて、

「ああ不覚なり。御身はたしかに生みの母。我ばかりは現在の主君。死なば我こそは死ぬべけれど、頼光かくと聞こし召さば、よもながらえんとはのたもうまじ。時にはこの子も犬死に。我々夫婦も不忠の者。敵の使いしきりなり。ひそかに頼光をおとし参らせ、ひとまずこの首の額に知識のかみそりを」

「いただく天の誠の道。守れば守る御仏に、後世をまかせてこの世には、忠義をみがく玉まつり。濁りにしまぬ蓮葉の花を君子にたとうれば、儒仏の教えくらからぬ人の心ぞ頼もしき。」

て、わざと見苦しく卑怯なまねをお見せしたのでございます。でも、私が命を惜しんでそうしたとはお思いにならないでください。ものごころがついて以来、ついに一度もあなたの御氣持ちに違うような事もなくきたのに、一生の別れ、最期のときに、あなたの御腹立ちの御顔を見なければならぬ悲しさは、未来永劫の迷いとなることでしょうか。しかし父上は主君に忠を尽くし、私は親に孝、母上は貞女の道を貫くことができたすれば、それが私にとってなよりの悦びです。仏もすべて御覧になっているはず。この命を決して惜しむものではありません。ただ、これまで母上の御寝間近くで暮らしてきたのに、私が死んでしまったあとは、どんなにかさびしく思われることだろうと思うと、それだけが悲しくつらく思われてなりません。名残は尽きませんが、かえすがえすも……」

と、文はそこで書きさしたままになっていました。母はその文を身につけて、冠者丸の首をかきよせ、抱きついてつつ伏し、声をあげて泣いております。すでに見限っていたはずの判官も、わっとばかりに五体を投げ出し、氣を失うほどに歎いておりました。そのさまはまことにあわれをさそうものでありました。

母は泣きながら、

「ああ、やはり血筋は争えぬもの。さすがは満仲の御子じゃ。このような深いお心とは少しも知らず、臆病だといって、いやしいこの母の口で恥ずかしめたのは神をも恐れぬこと

でした。まだ、冥土の旅は終わっていないはず、私もあの子の旅の御供をして、言いわけをしよう」

と太刀を取りあげましたが、判官はこれをおさえ、

「なんとあさはかなことを。そなたはたしかに冠者丸の生みの母。そして冠者丸は私には現在の主君。死ぬならば私こそ死んだほうがよいはず。だが、頼光殿がいまのこの次第をお聞きになったならば、けっして自分だけ生きながらえようとはなさらないはず。それに、われわれ二人が死んでしまつては、この子の死は犬死になつてしまいます。そうすれば、我々夫婦も不忠の者ということになつてしまふではありませんか。頼光の首をわたせという敵方の使いはなおやむことがありません。このうえは、頼光殿をひそかにおとし申しあげるため、この首の額に角を入れて、この子を出家させたことにしましょう。そうして、われらの誠の道を守つてくださる仏に後世をまかせ、この世にいる間は、忠義のために死んだ者を手厚くまつり、たたえていくことにしようではないか」と説得したのでした。

濁った泥田から生えても、その濁りにそまらぬ蓮葉の花は、君子にたとえられますが、儒仏の教えに明るいこの人々の心は、まことに頼もしいものであります。

こもちやまんば  
おぼろ姫 第四段

- ①「あだなりと名にこそたてれば桜花年にまねる人もまぢけり」(古今集)、「読人しらす」による。「伊勢物語」十七段にも同様の歌が見える。
- ②「花は根に鳥はふるすにかえるなり春のときを知らぬ人ぞなき」(千載和歌集)、「崇徳院御製」による。「かえる」は「帰る(都)に掛ける」。
- ③「世の中は何か常なるあすか川昨日の淵ぞ今日に瀬となる」(古今集)一八、読人しらす、「飛鳥川の淵瀬常ならぬ世にしあれば、時移り、事ざり、楽しむ悲しむゆきかたひ、花やかなりしあたりも人すまぬ野らとなり、変らぬ住家は人あらたまりぬ」(徒然草)二十五による。「うき」「淵瀬」「流れ」「くみ」は緑語。
- ④頼光が放浪の身となったことを暗示。
- ⑤命が助かった。三段参照。
- ⑥「生田の川に身を捨てて、防ぎ戦ふと申せども、森の下風木の葉の露、落されけるこそあはれなれ」(謡曲「千手」)による。「森」に「漏り(逃れ)」を掛け、「しずく」は「落人」を言い起す。
- ⑦履き慣れていらつしやらない。「召す」は身につけることの尊敬表現。
- ⑧じょうぶなわらじ。古くは合戦用に武士が用い、のちには小児がはいたという。
- ⑨稲田に仕掛けて、雀や鹿などを追うための装置。「無く」と掛ける。
- ⑩岐阜県の南宮山を指す。「美濃」は「あはれなる」身と掛ける。以下「忙然として立ち給う」まで、旅行場面を表現する道行文。旅情を表現するために旅の道々の光景や名物、名所・古跡などをふんだんにおりこみ、韻律を調えるための語がちりばめられている。本文では頼光の忍びの旅のあわれさを盛り込んでいる。
- ⑪「いさ知らず」と掛ける。
- ⑫牛馬の飼料とする草。
- ⑬「知らん」の音が「紫蘭」に通じることから「花によそえて」とする。
- ⑭「あなずる」は、ばかにする意。「葛葛葛」は「ずる(＝つる)」の連想。
- ⑮藤古川・相川の川上流に位置し、北を伊吹山系、南を鈴鹿山系にはさまれた狭隘な地で、古代に三関の一つ不破関が設置された場所。中山道の宿駅として交通の要衝であった。壬申の乱や関ヶ原の戦いの合戦場として特に著名な地。
- ⑯美濃国にある山。現在のどの山にあたるのかは未詳。「杣」は植林された山。
- ⑰「関よりかさくく雨、時雨に過て降くれば、道もいと悪しくて、心より外に笠縫の駅(むまや)といふ所にとまる。旅人は蓑うち払ふ夕暮の雨に宿借る笠縫の里」(十六夜日記)を踏まえる。笠縫は鎌倉街道(美濃路)の宿駅。

あだなりと名にこそ立てれ桜花、名にこそ立てれ桜花。散り  
もついに根に返る、都の春をたのみても、うき世の淵瀬常  
ならぬ、流れの行方くみて知れ。  
源の頼光は判官夫婦が情にて御命のがれしと、またもやよ  
そに森の下風、木の葉のしずく、落人の身となり給う。戦場出陣  
の折ならで、召しもならわぬ武者わらじ、それにはあらぬ藁ぐ  
つに御足を痛ましめ、草の露散るかげにだに、今は憂き身を置  
く方も、鳴子にさわぐ群鳥の、ちりぢり別れ落ち給う、御有様  
ぞあわれなる。  
美濃のお山はそなたとも、いさ白菊や秣刈る、牧のわらべ  
に道問えば、花によそえて「知らん、知らん」と、子どもさえ  
あなずる葛葛葛、這いひろごりて行く先を、せきとどめよと関  
が原、日高の杣もうち曇り、さつと袂に一しぐれ。しばし宿借  
る笠縫の里をはるかに見渡せば、野分に乱す萩薄、野守の鏡う

桜の花はすぐに散ってしまいましたが、しかし、散ったとはいえ、その花びらは地面にかえっていきますが、かえるところを持たないのは、いまの頼光の身分であります。都で春を楽しんでいたその身が、ままならぬ浮世のならいゆえに、行くえも知れぬ浪々の身となつてしまったのです。

判官夫婦の情によりなんとか命だけは助つたものの、またまた、森に吹く風や木の葉のしずくを身に受けて放浪する落人の身になつてしまいました。戦場に出陣するときにはく武者わらじ同様、はき慣れぬわらぐつに足をいため、草葉の陰にも身を休めるところはなく、鳴子に驚いて鳥の群がちりぢりになるように、郎党らと別れてちりぢりに落ちのびていくそのさまはまことに哀れなものであります。

美濃の山がどこかわからないのでまぐさを刈る少年に道を尋ねたところ、「知らん、知らん」と(はなの名のように)言うだけで、子どもにさえもあなどられていきます。葛や葛がはい広がっていくのを防ぐように、人の往来をせきとめるような名の関ヶ原を越え、日高のあたりでは空がかきくもり、さつとひとしぐれがきます。「しばし宿借る笠縫の里」の

- 18 秋に吹く暴風。二百十日、二百二十日ごろに吹く台風。以下「吹き払え」「伊吹」「暮く」などの多くの縁語を用い、頼光の不安定な境遇を表現。
- 19 山中にある池など。物を映す水面を鏡と見、山中にあるので、野守が用いる鏡と見立てた表現。「野」は「うずもれし」を言い起す。
- ① 「曇り」は鏡、「吹き払え」は「野分」の縁。
- ② 現在の岐阜県垂井町。
- ③ 身分の低い者。農家や狐師など。
- ④ 仏教で、色・声・香・味・触の五つの感覚から生れる欲望。世俗的な人間の欲望をさす。
- ⑤ 仏教では喜・怒・哀・楽・愛・悪・欲、儒教「礼記」では喜・怒・哀・懼・愛・悪・欲をいう。
- ⑥ 現在の岐阜県各務原市。近世、鶴沼うぬま。「罪を」得る」と掛ける。「不和」を掛ける。
- ⑦ 「美濃のお山」と同じ。「不和」を掛ける。
- ⑧ 日没を知らせるために、夕方の六ツ時(今の午後六時ごろ)につく鐘。
- ⑨ 鐘の鳴る音の形容。
- ⑩ なんとなくものさびしく。
- ⑪ 春の夜の夢の浮城とだえて峰に別る、横雲の空(『新古今集』、定家)を踏まえる。
- ⑫ 鹿が妻を慕って鳴く声。古くから歌の題材となつてゐる。こは「かけ橋とだえし」たためんに別れ別れになつてゐると想定した表現かといしがつて。
- ⑬ 「さらぬだに世のはかなさを思ふ身にぬえなされたるあけぼの、空(『山家集』)のようにはかなさや物寂しさを象徴する。
- ⑭ 「焼野の雉子夜の鶴、梁の燕も皆子ゆゑこそ物思へ(『福曲』唐船)などのように、子をおしむことを象徴する。
- ⑮ 近江・美濃の国境の地。長久寺。古くは、全二五軒のうち近江側の二十軒は「たけくらべ」と呼ばれ、美濃側五軒は寝物語の里とも呼ばれた。壁一重を隔てて両国の者が寝ながらにして物語をするほど近いという意からの名。
- ⑯ 「沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす(『平家物語』)。
- ⑰ 「否にはあらぬ」は、否定できない、の意。「稲葉山」は金華山のこと。岐阜市のほぼ中央部にある山。「否」は「稲葉山」を言い起す。
- ⑱ 「青野」は不破郡のうち、旧中山道沿いの街村形態をなす。「太平記」の北畠顕家と土岐頼遠の合戦等で著名。「世におおう」時を得て栄えよう」の意に掛ける。
- ⑳ 岐阜県垂井町。中山道と美濃路の分岐点で古くより交通の要衝。
- ㉑ ともに岐阜県大垣市。中山道の宿場町であった。青墓は「延喜式」に見える東山道不破駅があったとする説もある。
- ㉒ 「言う」に掛ける。

ずもれし、うき世の曇り吹き払え。伊吹の里に軒端茸く、苦は荒みてさびしきも、絵に写しては美しき、賤が藁屋に立つ煙、消えては結びなびきては、風のまにまに立ちまよう。ああ人界の善悪に、誘われなびく人心、かくやとばかり観ずれば、五欲七情さまざまの、罪をうるまの里近き、友にも疎く親しきも、不破の中山山深く、木の間に洩るる入相の、鐘こうこうと物すごく、谷の架け橋とだえして、峰に妻恋う鹿の声、子をかなしみて猿鳴く。夜半の鶴鳥夜の鶴、涙を添うる種ならし。暮れ行く空は風絶えて、四方の山々黙然と、座禅の相をあらわせば、谷の川音しんしんと、寝物語は美濃近江、国の境よ世の中の、盛者必衰の境かと、我が身に問えば我が答え、否にはあらぬ稲葉山、後に見なしていつかまた、世にも青野が原ならば、今を昔の世がたりと、思い続けて行く末は、垂井赤坂青墓も、それぞればかり夕間暮れ。松の嵐のとうとうとう、さらさらさつと吹きおろし、雲の行き来もよそよりは、はや暮れすぎて物すごく、名をだに知らぬ山中に、忙然として立ち給う。

草木しげつてがながんたる岨陰、横折れし枯木の枝を見上ぐ

文句を思いつつ遠く見渡すと、野分に乱れるススキが見えます。野守の鏡の曇りを吹き払う野分が、埋もれてつらい世を送るこの身のうさを吹き払ってくれないだろうかと思いつつさらに進んでいくと、伊吹の里は軒端の苦も荒れてもの寂しいさま、しかし、絵に描けば美しいかろうと思いつつ、粗末な藁屋から立ちのぼる煙は消えてはまたたなびき、風に吹かれて迷っているようであります。人の心もこのように善と悪に迷い、五欲七情のゆえにさまざまの罪を得るのでしよう。その「得る」ではないが、うるまの里に近い友とも疎くなり、親しい友とも不和になるかと思われ名の不破の中山を越えようと、木の間から漏れ聞こえる入相の鐘の音はなんとなくものさびしく、谷の架け橋も途絶え、峰の妻を恋う鹿の声や、子をいとおしむ猿の声、夜半の鶴や鶴の声は、涙をさそうものであります。暮れ行く空は風が絶え、四方の山々は静まりかえって僧の座禅の形に見え、谷の川音はひそひそと寝物語の声のよう。そして、この地はまさにその名のとおり美濃と近江の国の境にある寝物語の里。国の境が世の中の盛者必衰の境であろうかと我が身に問いつつ、稲葉山をうしるに見つつ、青野が原を越え、いつかまた世に合い栄えたならば、この苦しい旅も昔物語となるだろうと思いつつ、先は垂井・赤坂・青墓の地。夕暮れになると、松の嵐が吹きおろし、雲の動きも早く、日も暮れてものさびしく、名さえ知らぬ山中に、頼光一行は呆然としてたたずんでおりました。



23 「はや」に雲の行き来が「早い」の意と、「はやくも」日が暮れたの意をかける。  
24 山や岩などが高くけわしくそばだつ様子。巖殿。  
25 がけの陰になつてるところ。岩山の陰。  
① これはどうしたことだろう。

2筋の通らない。わけのわからない。  
3びつくりさせる。おどろかす。  
4蔑視、憎しみ、期待外れ、驚きなどの感情を込める語。

5糸萩から譲り受けた名刀の名。一段参照。  
6見守りつづけて。

7なめらかですべるように。

8横柄な様子で出す声。遠慮のない高声。

9長野市長野の元善町にある寺。古くから信仰をあつめていたが、江戸時代に入ってから庶民の圧倒的な支持を受け、一生に一度参詣しないと極楽に往かないという信仰も広がり、それに伴って「牛に引かれて善光寺参り」などの霊験譚が数多く生まれた。  
10近ごろになく、の意。全くもって。たいそう。  
11たいへんぶしつけなことではあるが。「無心」は無遠慮なさま。  
12おまえ。対等以下の相手に対して用いるのが普通である。  
13木綿の綿入。転じて、粗末な衣服をいい、他人の着物を卑しめてもいう。  
14不明。  
15言い終わらせないで。  
16年少の男子を軽んじていう語。  
17気のきいたことをする。こしやくなことをする。  
18それはこちらの台詞だ、の意。「一跡」は自分の占有のもの、の意。「裏を食わす」は相手の先手をうってだしめく、うらをかくの意。  
19ばか者。  
20大怪我をするぞ。「まくる」は「する」の意の軽侮語。

れば、こはいかに、老若男女の血汐の生首、梢にひつしとかけたるは、ただ熟柿のなつたるところとなり。頼光ちつとも臆せず、

「むむ、いわれぬ狐狸殿、落人とあなどつて魂を抜かんとなし、ものものし」

と髭切抜きかけ、またたきもせず守りつめて立ち給う。時にむこうの木陰より、小山のような大男、丸太舟を漕ぎ出すごと

くぬめくつて歩み寄り、頼光の足元へどつかと座りし有様は、追いはぎの大将と看板打たぬばかりなり。頼光ものさばり声、

「こりやこりや男。うぬが面つきただ者ならず。商売も合点なり。それがしは善光寺参詣の上方者。路銀をきらし一宿すべ

きようもなし。近ごろ無心千万ながら、わぬしが常々盗み貯めし金銀衣類は言うに及ばず、身にまといし古襦袢、腰に差いた候いしもはややぬいで渡せ。命ばかりは助けてくれん」

と言わせもはてずからからと笑い、

「やあら、でつちめが味をやるよ。身が一跡のせりふの裏を食わす痴れ者。意地張つて大怪我まくらんより、うぬが襦袢、腰

高く険しい岩に横に折れてかかっている枝を見上げると、何とこのことでしょうか、老若男女の血に染まった生首が梢にびつしりかかっている、まるで熟柿のようであります。が、頼光は少しも臆することなく、

「むむ、道理の通せぬ狐や狸が、落人とあなどつて驚かそうとしているのだな。なんと大げさな」

と髭切を抜きかけ、まばたきもせずじつとにらんで立っていました。と、そのとき、向こうの木陰から、小山のような大男が丸太舟を漕ぎ出すようになめらかな動きで歩み寄り、頼光の足元へどつかと座りました。その姿は、「追いはぎの大将」と看板を出していませんでした、すぐにそれとわかる有様でありました。頼光も声を張って、

「これ、ここにいる男。お前の面つきはただ者ではない。おまえが何者かも分かっている。俺は善光寺に参詣途中の上方の者であるが、路銀をきらして宿もとれぬ。まことにぶしつけながら、お前がいつも盗んで貯めて置いてある金銀衣類はもちろんのこと、着ている綿入れと腰の刀もはやく脱いでこちらに渡せ。命だけは助けてやろう」

と言いつつも終つてやろうと笑い、

「いやいや、こわつぱめが、小癪なことを言う。意地を張つて大怪我するより、お前の綿入れと腰に差したなまくら刀を早くここへ差し出せ。渡さぬと言えば、ほれ、この生首と

①赤さびた鈍刀をさしていうことば。相手の刀を侮蔑している場合にも用いる。  
②隠さないで全部出せ。  
③渡さぬなどとほざくならば。「だて」はことさらにそのような様子をする意。

④……であるようだ。「にこそあるなれ」↓「にこそあるなれ」↓「にこそあるなれ」↓「にこそあるなれ」と転じてできた語。  
⑤のびのびと横になっている。

⑥もはや我慢ができなくなり。

⑦神のように絶大な武威。すぐれた武威。  
⑧知恵と勇気のあること。また、その人。  
⑨人、または君主が守るべき根本的な二種類の徳目。「中庸」は智・仁・勇。「書経・洪範」は正直・剛克・柔克など、書によって差があるが、儒教が優勢であった日本では、「三徳」といえば智・仁・勇をさす。  
⑩困ったさま。ほとほと。とんと。

に差いた赤鯛も早くここへまけだせ。渡さぬだてを吐き出さば、こりや、この首の連中に加えん。西の枝か東の枝か、さあさあ望め」

と詰めかくれど、頼光返答もし給わず、

「ああ、この程の旅疲れ。とろとろと寝てくれん」

と岩角にかけ上がり、首二つ三つひつつかんで飛び降り、

「おお、日本一の枕ごさんなれ」

と両足ずつとふみのばし、ゆたかに臥したる御有様、不敵にも

また恐ろしし。

山賊今はたまりかね、柄に手をかけ抜かん抜かんともがけ

ども、神武智勇の名将の、三徳兼備の威に押され、眼もくら

み腕しびれ、覚えずふるい出でけるが、さすがの山賊ほうど呆

れ、

「我十余年の今日まで多くの者に出会いしが、一度もかようの

不覚は取らず。さもあれ御身ただ人ならず。つつまず語り聞か

されよ。のう底の知れぬ相手じゃ」

と、舌を巻いてぞいたりける。

なった連中の仲間にしてやろう。西の枝がいいか、東の枝にするか、さあ、どちらがいい」と詰めよりますが、頼光は返答もいたしませ

ん。「ああ、旅の疲れが出たようじゃ。少し寝ようかの」

と岩角に駆け上がり、首を二つ三つ三つかんで飛び降り、

「おお、これは日本一の枕じゃ」

と両足を伸ばし、のびのびと横になったその有様は、大胆不敵で、はたからみると恐ろしいほどでした。山賊はもう我慢ならず、刀の柄に手をかけ抜こうともがきますが、三徳を

兼ね備えた神武智勇の名将の威光に押されてしまい、眼もくらみ腕もしびれ、思わずふる

えが起りました。さすがの山賊もあきれは

て、

「わしは今日まで多くの者に出会ってきたが、

このような不覚は一度もとつたことがなかった。そなた、ただ者ではあるまい。隠さずに

名乗りなされ。まことに底知れぬ相手じゃ」と降参して、言いました。

①場所もあろうに。適当な場所は他にいくらでもあろうに。

②もと、集団で事を起したり行動した場合の中心人物の意。転じて、悪名高い人物、悪党の親分。さらに転じて、一党の首領。  
③今から後。今後。  
④主人の履物を持って、外出のときに供をする者。

⑤思いつめた言葉のはし。  
⑥並々でない。ひととおりでない。

⑦平安時代中期に実在した武人。九五〇―一〇二二。源頼光の四天王のひとり。伝説では、頼光にしたがって丹波大江山の盗賊酒吞童子を討ったという。通称は六郎。末武とも表記。

⑧旅人、通行人などを脅かして、金品、衣服などを強奪する賊。

⑨「草も木もわが大君の国なればいづくか鬼のすみかなるべき」〔太平記〕十六、日本朝敵事〕による。謡曲にもよく引かれる。

頼光うち笑ませ給い、

「おお、さもあらん。およそこの土に生ある者、我が名を知らぬことやある。源の満仲が嫡子、摂津の守頼光ぞ」

と、聞くよりはつと飛びしさり、頭を大地にすりつけ、

「ああもつたいなや、もつたいなや。さればこそはじめより世の常ならず見奉り候。さては平の正盛、清原の右大將が讒言

にて、かかる御身となり給うよな。所こそあれ、この所にて会

い奉るも宿世のご縁。我は卜部の熊竹と申す山賊の張本。向後

一命をなげうち君に仕え奉らん。御沓取りとも思し召され候

えかし」

⑤おもと思い入ったる詞の末。頼光御喜色ななめならず。

「おお、頼もしし。然らば今日より主従ぞや。子孫に長く武功

を伝え、幾千代かけし寿に、卜部の末竹と名乗るべし」

とのたまえば、

「ありがたし、ありがたし。昨日までは追剥ぎ、今日よりは忝

くも源氏の郎等卜部の末竹、御供申す。山も谷も草も木も皆我

君の御領内。この山の獣も鳥も虫も皆傍輩。かけたる首は傍輩

頼光は笑いながら、  
「この世にある者で、私の名を知らない者はおらぬはず。わしは、源満仲の嫡子頼光である」

これを聞くやいなや、山賊は、さつと前を飛びのき、頭を地につけ、

「ああ、もつたいないこと。初めからだのお人ではないと思っておりました。さては平

正盛・清原右大將の讒言によつてこのようなお姿になつてしまわれたのですな。場所もあ

らうに、このような山の中でお会いしたのもなにかの縁でございます。私は卜部熊竹と申

す山賊の首領でございます。これよりは一命をなげうち、あなた様にお仕え申し上げます。

沓取りにでもなんにでもお使い下され」

と、心から心服した様子でいう言葉を聞いて、頼光の喜びはなみたいていではありませんでした。

「おお、これは頼もしいこと。では、今日からわしの家来になるがよい。子孫に末永く武功を伝えるようにとの祈りをこめて、卜部の末竹と名乗るがよい」

と言いました。

「ありがたし。ありがたし。昨日まではただの追い剥ぎでしたが、今日よりは、恐れ多く

も源氏の家来に加わり、卜部の末竹と名乗つて頼光さまのお伴をいたします。この山も谷

も草も木もみな頼光さまの御領地。この山の獣も鳥も虫も皆われらの仲間でございます。

- ① 去つていくときに、後に残しておく贈り物。また、それを残すこと。
- ② 山路をふりかえりながら帰る。同じような句をくりかえしているのは謡曲を意識しているためか。次句より「山巡りするぞ苦しき」まで、謡曲『山姥』による。
- ③ 一つの洞穴状態の谷に声もきこえず。人がだれもいないことを表わす。
- ④ 流れるさま。
- ⑤ 「真如」は仏教で一切衆生の真実のすがた。月の澄みきつた光はこれを照らし出すという。
- ⑥ 峰の松が高々とそびえ。
- ⑦ すずと変わりなく安楽であること。
- ⑧ もと『和漢朗詠集』下、帝王、小野國風の詩『源平盛衰記』などに引用され、謡曲『山姥』に取り入れられたか。刑罰に用いるむちはやわらかな蒲としたが、それでも用いることもなく朽ちて、空しく螢となつて飛び去り、君を諷める時打ち鳴らすはずの鼓は、誰も打つ者がなくて深く苔むし、鳥も鼓の音に驚くことがない、の意。無事平穏な世界であることと表わす。
- ⑨ 一心に思いつめて生まれ変わつて鬼女となつた。「仮に世を変化して、一念化生の鬼女となつて」(謡曲『山姥』)による。
- ⑩ 陸前(宮城県・岩手県・陸中(岩手県・秋田県)・陸奥(むつ)青森県・陸前(福島県)磐城)の奥州五国の古称。出羽・山形県・秋田県を加えた奥羽、また、今の東北地方を漠然とさしていることもある。
- ⑪ 福島市にある山。山頂に羽黒神社がある。
- ⑫ 甲斐国(山梨県)にある高山。特に富士山または赤石山脈の主峰である白根山をさすともいう。甲斐ヶ根。
- ⑬ 現在の長野県木曾郡一町の、裏木曾山(岐阜県恵那郡三ヶ村山)を含めた地域の総称。
- ⑭ 群馬・長野両県境にそびえる三重式火山。
- ⑮ 滋賀・岐阜県境にある伊吹山地の主峰。
- ⑯ 滋賀県滋賀郡志賀町の地名。
- ⑰ 滋賀県大津市、比叡山にある延暦寺の三塔の一つ根本中堂の北方の横川谷の峰にある堂塔およびその地域。
- ⑱ 「山姥」は、山中に住むいやしい者。きこり・炭焼き・漁師など。「樵路」は、きこりなどの通る山中の小路。『古今集』仮名序の「薪負へる山人の花の蔭に休めるがごとし」による。また、以下、「言わば言え」まで、謡曲『山姥』による。
- ⑳ 雪と月と花。風雅なもの代表。
- ㉑ 「よし足」は「善し悪し」を掛ける。「足引き」は「山」の枕詞で、足を引く意を含む。良し悪しかわからないが、足を引かずりながら山巡りするのは大変です。
- ㉒ 「問う」を掛ける。

の鳥殿への置土産。さらばさらば」  
 と見かえるや、山路かえるや一洞空しき谷の声。山高うして海  
 近く、谷深うして水遠し。前には海水瀼々として、月真如の  
 光を掲げ、後ろには嶺松巍々として風常楽の夢を破る。刑鞭  
 蒲朽ちて螢空しく去る。諫鞞苔深うして、鳥驚かずとも言い  
 つべし。  
 心は昔に変わらねども、一念化生の鬼女とや、人は陸奥の信夫  
 の山にあるかとすれば、今日は甲斐嶺木曾の山、昨日は浅間  
 伊吹山、比良や横川の花曇り。雪を荷ないて山賤の、樵路に  
 通う花の陰。休む重荷に肩を貸し、月を伴う山路には雪月花を  
 弄ぶ。心は賤の目に見えぬ、鬼とや人の言わば言え。よし足  
 引きの山姥が山巡りするぞ苦しき。  
 暮るるも早き山陰に行き暮れ給いて、頼光、道なき方に踏み  
 まがい、里はいずくと誰にかも、東西分かず立ち給う。御供の  
 末竹、辺りを見廻し、  
 「や。あれに柴刈る女休らうからは、人里もはや遠からず。究  
 竟の案内者。これ女、この山は何と言う。麓の里へ下る者、

かけておいた首は仲間の鳥への置土産にいた  
 しましよう。それでは」  
 とふり返りながら、山路を案内していきます。  
 さてそこからは、洞穴のような谷、人の声  
 も聞えませんが、高い山なのに、海が近く、し  
 かも、谷は深く水は遠く真下に流れています。  
 前方には海の水がなみなみとたたえており、  
 澄みきつた月の光は人々の迷いをはらす真如  
 の光のようにこの世を照らしています。後ろ  
 には峰の松が高々とそびえ、吹く風はこの世  
 を常に安楽だと思っている人々の迷夢を破る  
 かのようです。静かなこの地の様子は、「刑  
 罰に用いる鞭はやわらかな蒲としたがそれ  
 も用いられることがなく、ついには朽ちて螢  
 となつてむなく飛び去り、君を諷めるため  
 に打ち鳴らすという鼓は、誰も打つ人がいな  
 くて深く苔むし、鳥も鼓の音に驚かない」と  
 という無事平穏な時代を伝える古詩を連想させ  
 ます。  
 さてここは、一心に思いつめたため鬼女の  
 姿になつた山姥のすみか。ある時は信夫山に  
 いたかと思えば、今日は甲斐・木曾の山、昨  
 日は浅間山・伊吹山、そして比良や比叡山の  
 横川の谷の花曇りの中に身をおき、背に山の  
 雪を負いつつ、きこりが山道の花の下で休ん  
 でいる時には肩を貸してその荷物を一緒に荷  
 つたり、月のきれいな山路では雪月花を樂し  
 む心もあります。が、いやしい人間にはその  
 心が分らず、姿だけを見て、私を鬼と言っ  
 ています。そう呼ぶのもしかたのないことで



①新潟県の南端、青海(おうみ)町の南にある山。古来、難所として知られる。

②中国四川省の川。繩の橋で知られる。特に、中国北西部のゴビ砂漠およびタクラマカン砂漠をさしていることが多い。

③広大な砂漠。砂が河のように流れるという。④パミール高原の中国名。西域の重要な交通路で、中国勢力圏の西境となっていた。⑤越後国と越中国の境をなす川。

⑥柴を売り歩く女。また、柴刈りの女。

⑦ぶしつけでない。風情がある。  
⑧粗野でいやしい姿の中にも、やさしい風情のどこに見られる表現。

⑨以下、「山姥もなかは無からざるべき」まで、謡曲『山姥』による。

道引せよ」

と言ひければ、

「これは信州上路の山の頂、御覽のごとく道もなく、麓の道とて東北は五十余里秋田の地、幾重の谷峰、繩を渡して橋となし、恐ろしや唐土の蜀川、天竺の流砂、葱嶺とやらの難所にも勝るとかや。北は越後越中の境川、これも谷二つ越え、十里に余れば、今日のうちには思いもよらず。おいとしや我等が方に泊めましとう候えども、いずれも若き殿たち、この柴嬢が住家はお嫌であらん」

と言ひ風情、ふつつかならぬ山人の、薪に花とはこれならん。

頼光うち笑み給ひ、

「いや、それは逆様。荒くましき若者ども、そなたこそ厭われん。行き暮れたる山道、柴刈りはおろか、山姥の住家でも苦しからず」

とのたまえば、はつと驚く顔ばせにて、

「むむ。さては自が山姥と見えけるか。山姥とは山に住む鬼女よし鬼なりとも人なりとも、山に住む女なれば、さ見給うも理

す。しかし、どちらにしてもこの山姥の姿で足を引きずりながら山を廻り歩くのもまた苦しいことではありません。

日の暮れるのが早い山の陰で、頼光一行は道に迷つてしまい、人里がどこにあるかも尋ねようがなく、どの方向に行けばいいかわからず、立ちつくしていました。お供の末竹がまわりを見回し、

「あそこに柴を刈る女が休んでいますので、人里はここからそんなに遠くはないでしょう。ちようどおあつらえむきの案内人じゃ。もしもし、この山は何という山じゃ。我らは麓の里へ下る者だが、案内してくれまいか」と言いました。すると女は、

「ここは信州の上路の山の頂上でございます。ご覽のように道もなく、麓に下る道といつても、東北のほうに五十余里行けば秋田の地ですが、谷と峰が何重にも重なって、橋といえは繩を渡してあるだけ。あの恐ろしい中国の蜀川、インドの流砂、葱嶺という難所よりも険しい道です。北は越後と越中を分ける境川に出ますが、これも谷を二つ越えねばならず、ここから十里以上ありますので、今日のうちには行けないでしょう。我が庵に、とは思いますが、若い方々には、賤しい柴売り女の住家はお嫌でしょうに」

と語る様子はなんとも風情があります。頼光は微笑みながら、  
「いやいや、それは逆じゃ。荒々しい若者どもをそなたのほうこそ嫌に思うじゃろう。山

① たくさんの織機。または、糸数の多い巾の広い織機とも。  
② 「窓の梅」は「枝の鶯」を言い起こす。

③ 世の中はつらい、の意。「世を憂う」「空蟬の殻」「唐衣」と、連続的に掛ける。

④ 多くの物音。  
⑤ 布を打って柔らかくし、つやを出すために用いる木、または石の台。また、それを打つことやその音をもいう。

⑥ 船を打ったり機を織ったり、また、馬に鞭をあてたりする時などの音を表わす語。

⑦ 堅い物のひびく音。「唐衣」と縁語。

⑧ そう思ったり見たりするの人もそれぞれによる。

⑨ 仏教で、人の心を煩わし、身を悩ます一切の妄念。

⑩ 煩惱を断つて得られたさとり智慧。

⑪ 頼光一行を貴人とみて、一段高い所に座を設けた。

⑫ 紅の花は花園に植えても目立つ。すぐれた者はどんなところにあってもすぐに人目に立つ意のたとえ。  
⑬ 風采。

や。そも山姥は生所も知らず、宿もなし。ただ雲水を頼りに  
て至らぬ山の奥もなく、人間ならずと恐るれど、ある時は山が  
つの山路疲るる肩助け、里まで送る折もあり、またある時は織姫  
の五百機立つる窓の梅、枝の鶯、糸繰り綿繰り紡績の宿に身を  
置き、人に雇われ手間仕事、櫛さえ取らぬ乱れ髪、女の鬼と  
は理の、世を空蟬の唐衣、千声万声の砧に声のしつていしつ  
てい。しつていからころ槌の音、こたまに響く山彦も、皆山姥  
が業なりと、思うも見るも人心。煩惱あれば菩提あり。仏あ  
れば衆生あり。衆生あれば山姥もなかは無からざるべき。  
都に帰りて夜がたりにせさせ給えや。夜すがら語り参らせん」  
と庵に誘い入りにける。小高き所を設い、頼光を請じ奉れば、  
「いやいや。さようになさるる者ならず。一夜の程は軒の下に  
も明かすべし。見申せば一人住みの女性、この方へおかまい  
なく渡世の営みせられかし」  
と辞し給えば、  
「いや、紅は園生に植えても隠れなし。大將軍の御骨柄、紛う  
ところ候わず。まことや源の摂津の守殿は、清原の右大將平

道で行き暮れた一行ゆえ、柴刈りの家どころ  
か山姥の住家であつても大丈夫じゃ」  
とたわむれを言いますと、女ははつと驚いた  
顔つきで、  
「なに、私が山姥に見えましたか。いや、山  
姥とは山に住む鬼女ですが、たとえ鬼であれ  
人であれ、山に住んでいる女ならば、麓の人  
にはそう見えるのも当然。人は、『そもそも  
山姥とは、生れた所も知らず、住む所も定ま  
っていない。ただ流れる雲や水のように山の  
すみずみまで至らぬところはないもの。それ  
ゆえ人間ではない』と恐れております。しか  
し、ある時はきこりが山路で疲れているのに  
肩を貸して、里まで送つたこともあります、  
またある時は、機を織つて忙がしくしている  
女の人たちを助けるため、その窓の梅の枝の  
鶯が入るようにしてその家に入り、糸繰りや  
綿繰りを手伝つて紡績の宿に身を置き、人に  
雇われて手間賃をいただく仕事もしました。  
櫛で髪を整えずいつも乱れた髪なので、女の  
鬼と言われるのは当然ですが、この世の中は  
なんとも辛いところ。砧を打つ音がしつてい  
しつていときこえ、槌の音がからころからこ  
ろと聞こえ、それが山彦となつて響くのも皆  
山姥の仕業だと見たり思つたりするのは、す  
べて人の心のしわざです。煩惱があるから菩  
提があり、仏があるから衆生があります。衆  
生があればどうして山姥がないことがあり  
ましよう。都に帰つて夜のお伽話にでもなる  
でしょうか。それでよければ、夜もすがら山  
姥のことを語つてあげましよう」

①どんなものを（…すればよいか。どれかを（…したいのだが）。  
②今の福岡県筑紫郡太宰府町。

③鬼女が留守の間に室をのぞくなど言い置いて出るのは、謡曲『安達原（あだちがはら）（黒塚）』の趣向。  
④すぐに。

⑤すぐに。

⑥魔物やばけもの。

の正盛らまさもりが讒奏ざんそうにて御身おんみを危あやぶめさすらえさまよい給たまうとは、山やまの奥おくにも隠かくれなし。それとも名乗なり給たまいなば、自みづからが身みの上うえをも語かたり参まいらせん。定さだめて旅疲たびづかれ、何なにをがな御おんもてなし。折おりふし山やま々やまの木この実みも皆落みなおち果はてぬ。げに思おもい付ついたり。筑紫つくし宰府さいふの山やまに、いひがぐり一ひと枝えだ昨日きのうまでありしもの、これを取とつて参まいらせん」

と、表おもてに出いでしが振ふり返かえり、

「必かならず必かならず奥おくの一ひと間まを覗のぞき給たまうな、見み給たまうな。追おつ付つけ帰かえらん。待まち給たまえ」

と、岩根いわねを踏ふむこと飛鳥ひちようのごとく、山深やまふかく飛とんで入いりにけり。

末武横手すえたけよこてを打うつて、

「筑紫宰府つくしさいふまでは五百余里ごひやくより。今いまの間に帰かえらんとや。きやつが仕方かたい分ぶん、始はじめから飲のみ込こまず。君きみの武功ぶこうを押おさえんと魔障ましょう変化へんげのなす所ところ、追おつかけて討うちとめん」

と、馳かけ出いづるを、

「やれ待まて。変化へんげと知しつて立たち騒さわげば、彼かれに心こころを奪うばわるる。この方ほうは静しずまって却かえつてきやつを誑たぶらかし、なぶり殺ころしに退治たいじせん。

と庵あんに導まりていきました。

小高こたかい所に座ざを設たけて、頼光たのひつを招まき入れましたが、

「いやいや。われらはそのような扱あいを受けるとの者ものではございませぬ。一夜いちやだけのことでですから、軒のきの下したでも夜よを明あかすことが出来こます。見みれば、お一人ひとりでお住すまいのご様子ようす、われらにおかまいなく、お仕事をなさつてください」

と遠慮えんりょしましたが、

「いいえ。紅べにの花はなは花園はなぞのに植うえても目立めだつものでございます。あなたさまは、間違まちがいなく大將軍だいしやう軍の貫禄くわんろくがございませぬ。源げんの摂津せつしんの守殿しゆでんが清原きよはらの右大將みぎだいしやうや平へいの正盛まさもりらの讒奏ざんそうにより、危あやない目に遭あひ、放浪はうらうしておられることは、こんな山の奥おくにも伝つわつてきています。あなた様が源げんの頼光たのひつであると名乗なつてくださるならば、私の身みの上うえも語かたることになります。長い旅たびでお疲れつかれのはず。なんのおもてなしもできませんが……、山の木きの実みも皆落みなおちしてしまいましたし……。ああ、筑紫太宰府つくしさいふの山の栗くりの木きにいひがぐりが一ひと枝えだありましたので、いますぐそれを取とつて来こましよう」

と、外とちに出いていきましたが、振ふり返かえつて、

「絶対に奥おくの一ひと間は覗のぞかないでくださいませ。すぐ戻かえつてまいりますので、しばらく待まつていてください」

と、岩いわを踏ふんで、鳥とりのように山深やまふかく飛とんで入いつて行いきました。

末竹すえたけは思おもわず手てを打うち、

「筑紫つくしの太宰府さいふといえは、ここから五百余里ごひやくより。

① 気おくれしている。臆病だ。

② 乱れた産髪。

③ これのようだ。「これなるめり」の転。

④ 羅刹のいる国。食人鬼の国。また、地獄。

⑤ 異常な緊張感、寒さ、恐怖などのために、ぞつとして身の毛が立つ。身の毛がよだつ。

⑥ 源氏重代の名剣。源満仲が罪人の首を討ったとき、膝まで切れたという。本話では坂田時行の妹糸萩から譲り受けたことになっている。第一段参照。

⑦ 身を引いてかわし。

⑧ 情けないことよ。

⑨ 太刀の閃(ひらめ)く光。

⑩ 本来の性質。本性。

⑪ (隠れていたものが)外に現れ出て。「枯野の薄」は「穂」を言い起こす。過去に犯した罪悪を後悔して、人に打ち明けること。また、他人に話にくいことを打ち明けることにもいう。

⑬ 別れたくもないのに別れる不本意な別れ。なごり尽きない別れ。  
⑭ 梓で作った弓。弓で射た矢のように別れてはなればなれになる意か。

さもあれ彼が言葉に従い、奥の間を見ずにおかんでもおくれたり」

と、主従覗き見給えば、あら凄まじや五六歳の童、五体の色は朱の如く、おどろの産髪四方に乱れ、餌食と思しく鹿・狼・猪を引き裂き積み重ね、木の根を枕に臥したる様、誠の鬼の子、これなんめり。知らず我羅刹国に来たるかと、身の毛いよ立つばかりなり。

時を移さず主の女、栗を手折って振り担げ、帰る所を頼光膝丸を抜き放し、はたと打てば、ひらりと外し、ちようど切れば、はつと開きしさつて睨む顔 変わり、角は三ヶ月、両眼は寒夜の星と輝けり。怒れる面にはらはらと、零るる涙にくれながら、「うたてやな、恥ずかしや。恨みなき我が君に仇をなさんと思わねども、御太刀かげに驚きて自性を現し候ぞや。この上は力なき枯野の薄穂に出でて、身の上懺悔申すべし。

我もとは遊女の身。坂田の何がしと幾世をかけし契りの中。夫の父を物部という者に討たせ、その敵討たんため、あかぬ別れの梓弓、夫の運命つたなくて妹に先越され、親の敵を討

すぐに帰ってくるとは信じられませぬが、どうも、あの女の言うことははじめからよくわかりません。あなた様の武功をやつつけようとする魔物や化物ではありませんまいか。追いかけていつて、討ち殺してきましょう」

と、馳け出そうとするのを、「待て待て。変化と知つて騒げば、かえって正気を奪われることになるぞ。今は静かにして、我らが逆にあいつをたぶらかし、なぶり殺しにして退治することにしよう。それはともかく、あの女の言うとおりに奥の間を見ずにすまずのも臆病なこと」

と思ひ、皆で覗いて見ますと、おどろいたことに、そこにいたのは五、六歳なる子供でした。とはいへ、体の色は朱のようで、産髪は四方に乱れ、食糧と思われる鹿・狼・猪を引き裂いて積み重ねてあり、木の根を枕に横になっています。まことに、鬼の子というのはこれを言うのでありましようか。まるで、地獄の羅刹国に来ているかと思われ、身の毛もよだつ思いがしたのでした。

と、すぐに女主人が栗の枝を肩に担いで帰つてきました。待ちかまえていた頼光が名剣膝丸を抜き放し、はつたと打ちかかりました。すると、女はひらりと身をかまし、またちようど切ると、女はまたはつと身を退いてかわしました。そうやってにらみあっているうちに、女の顔つきが変わり、三ヶ月のような角が生えて、両眼は冬の夜の星のように輝きました。そして、女は怒った顔にはらはらと涙を流しながら、



①この世に生きていること。また、その間。この世。  
②日本に二人とない。日本一の。  
③一騎で千人の敵を相手に戦えるほど強いこと。  
④同じ仲間のうちの残った者。残党。多く悪者についていう。

⑤立てた刃に身を伏して自害する。  
⑥ただならぬ身となり(「妊娠して、なみなみならぬ子を持ち」。「望月の影」は満月の光。「持ち」にかけ、深くまで光がとどくことから「深く」を言い起す。  
⑦人里をはなれた。「人倫」は人間。  
⑧一つのことを心に思いつめたため、鬼となつて角が生え。  
⑨目に光を帯び、邪も正も本来差別はなく一つだという絶対平等観をもつて見るときは、謡曲「山姥」による。  
⑩以下、「めぐりめぐりて」まで、謡曲「山姥」をふまえる。  
⑪吉野のこと。奈良県の吉野川流域をいう。  
⑫大和国磯城郡(奈良県桜井市)初瀬(はつせ)にある山。長谷寺(はせでら)がある。  
⑬奈良県南葛城郡葛城村にある山。以上の三所は桜の名所。  
⑭白くて、霞も桜と見分けがつかず、すべてを桜かと思つて。さえた。  
⑮澄んだ。さえた。  
⑯長野県更科郡の姥捨山。月の名所。  
⑰滋賀県滋賀郡の比良山。比良の暮雪は近江八景の一。  
⑱石川県石川郡の白山。雪で有名。

⑲頼光のこと。  
⑳坂田の侍行。  
㉑源頼光の家来。四天王のうちの二人。前出。  
㉒代々同じ主家に仕える家臣。主家に事あるときは、最後まで主人と運命をともにするのが常であった。

たぬのみか、そのことゆえに源氏の大將漂泊の御身となり給う。  
『今生のこの身にてこの鬱憤晴れがたし。腹かき切つて魂魄汝が胎にやどり、日本無双の大力、一騎当千の男子と生まれ、敵の余類をほろぼさん』  
と天に訴え地に叫び、誓の刃に伏したりし。  
それより我が身もただならぬ子を望月の影深く、人倫はなれし山にこもれば、いつのまにかは山めぐり、一念の角そぼだち、眼に光る邪正一如と見る時は、鬼にもあらず、人にもあらず、名は山姥が山めぐり。春は三吉野・初瀬山・高間の山の白妙に、まがう霞もそれかとて、花を尋ねて山めぐり。秋はさやけき空の色、変わらぬ影も更科や、姥捨山の名にめでて、月見るかたにと山めぐり。冬は冴えゆく比良が嵩、越の白山しぐれ行く雲を起こして雲に乗り、雪をさそいて山めぐり。めぐりめぐりて我が君に、めぐりあいしも我が夫の念力通力神力にて、渡辺の綱・碓氷の定光、ただ今これへ招くべし。あわれ我が子をも譜代の家人と思しめし、敵御征罰の御馬の口をも取るならば、父が

「情けないこと。恥ずかしいこと。恨みも何も無いあなたさまに仇をなす気はないのに、太刀の光に驚いて、思わず本性を出してしまいました。こうなつたうえは、私の身の上をすべて打ち明けることにいたしました。」  
私はもともとは遊女の身、坂田の何がしと契りをおぼした仲でございます。夫の父は物部という者に討たれ、その敵を討つためにやむなく夫と別れたのですが、武運つたなく、妹に先に敵討ちをされてしまいました。そのため、『親の敵を討てなかつただけでなく、われら兄妹の敵討のために源氏の大將が流浪の身になつてしまわれた。この世に生きながらえても、この鬱屈した思いは晴らしようもない。ここで腹をかき切つて死に、私の魂魄をおまえの胎内にやどらせ、日本一の大力、一騎当千の男子と生まれかわることにより、敵の残党をほろぼそう』と天に誓ひ、自害したのでした。それから間もなく、わたしは懐妊し、このような子を儲けたのでございます。そのため、人里はなれた奥山にこもり、いつのまにか山めぐりをする身となり、積つた一念のため角が生えました。邪正一如の目で見れば、鬼でもなく、人でもなく、山姥となつて山めぐりをする身でございます。春は吉野・初瀬山・高間の山が白くかすみさまを花かとたずねて山めぐりをし、秋は澄んだ空にまなく照らす月を更科の姥捨山でながめようと山めぐりをします。冬は冴え返る寒さのなか比良が岳へ飛んで行きます。また、越の白山では、しぐれ行く雲を起して雲に乗り、雪

- ① 一生の終り。死に際。臨終。  
 ② 日ごろからの望み。  
 ③ 死んで地獄道や畜生道におちて受ける苦しみ。  
 ④ 仏となり煩惱・生死などすべての束縛から解放されること。  
 ⑤ この世とあの世。

⑥ 渡辺の綱と碓氷の定光。

⑦ 旧国名で、今の長野県。

⑧ 人の智慧ではわからない不思議なこと。  
 ⑨ 卜部の末武。源頼光の家来の四天王の一人。末竹とも。

① 一期の素懐を遂げ、母が鬼女の苦患をのがれ、成仏得脱疑いなし。二世の苦しみ助かるも、ただ大将の御慈悲」

と角を傾け、手を合わせ、ひれ伏してこそ泣きいたれ。

かかる所へ綱定光、木草おし分け、

「やあ我が君、これにござ候。兩人今夜信濃路を通りしに、誰が言うともなく、『源の頼光は、この山のあなたに、あの谷のあなたに』と、手を取って引くがごとく、覚えずこれまで参りし」

と申し上げれば、頼光、鬼女の神変くわしく語り、奇異の思いをなし給う。

さて、兩人を末武に引き合せ、

「この上は女が望みに任せ、汝が一子に主従の契約せん。これへ召せ」

とのたまえば、母は悦び、

「快童丸、快童丸」

と呼びければ、

「あい」

を降らせて山めぐりをします。こうして山々をめぐっているうちにあなた方にめぐりあったのも、我が夫の念力によるものでしょう。

その神通力で、渡辺の綱殿も碓氷の定光殿も、すぐにここに呼び寄せてみせます。そして、もしかなくことならば、我が子をも譜代の家人として加えていただき、敵征伐のときには、御馬の口なりと取らせていただけるならば、子供の父坂田時行の死に際の願いがかなうというもの。さらにまた、鬼女となったその母も、地獄の苦しみをのがれ、成仏得脱することは疑いなくことでしょう。二世の苦しみから救われるかどうかは、大将殿の御慈悲にかかっております」

と角を傾け、手を合せ、ひれ伏して泣いておりました。

そこへ綱と定光が草木を押し分けてやってきました。

「やあ、頼光様はここにおられましたか。二人で今夜、信濃路を通りかかったところ、誰が言うともなく、『源の頼光は、この山のむこう、あの谷のこちら側におられます』と、手を取って導かれるような感じで、自然とここにたどり着きました」

と申し上げましたので、頼光はそれは鬼女の神通力によるものであることをくわしく語り、互いに不思議な思いにつつまれておりました。さて、兩人を末武に引き合せたのち頼光は、「この上はそなたの望みどおり、お前の生んだ子と主従の約束を結ぶことにしよう。さあ、その子をここに呼ぶがいい」

①真言密教で信仰する明王の一。愛欲に執着する煩惱(ぼんなん)がそのまま悟りの境地であることを表わす明王。赤身、頭髮を逆立て、三目六臂(さんむくろっぴ)、獅子冠をいた、だく怒りの形相で、赤蓮華の上に座し、六臂に金剛鈴などを持つ。  
②思い違いをする。  
③無礼者ののしるべきの語。  
④あちらの方。

⑤あなた。

⑥できるかぎり。

⑦成長していく将来。「生い先(おいさき)」。  
⑧口にまかせておこなことを言うこと。

⑨家来として、まず試しに行なう奉公。  
⑩してほしいと望むこと。

⑪さっと。すっと。  
⑫岩。

と答えてつとつと出で、どつかと坐したる顔の色。

「のう、母様。あれはどこのおじ様じゃ。みやげもらおう、嬉しい」

と、手を叩いて悦びし。愛敬あつてすさまじき。さながら愛染明王の笑い顔かとあやまたる。母立ちよつて、

「やい、慮外者。あなたは常々言い聞かせし源の頼光様。今日よりおことが殿様。『御奉公精出しましよ』と申しやいのう」

と教えられ、  
「はっ」

と手をつき一礼し、  
「随分奉公精に入り、敵の首いくつでも引きぬいてあげましよ」

と、老い先みえたる広言に、御悦びは浅からず。母重ねて、  
「あの岩窟に熊・猪を追い入れ置き、折々力を試し見れば、御覧

候へ、あのごとく引きささき候」  
「これ、お目見えのしるしに相撲所望」

と言いければ、ずんど立つて、岩屋の口に立てたる磐石かろがると取って投げのけ、両手をひろげつつ立つ所に、内より荒

と言いましたので、母は悦び、

「快童丸、快童丸」

と呼んだところ、「あい」と答えて、奥に寝ていたさきほどの子がつとつと出てきて、どつかとすわりました。

「ねえ、母様。あれはどこのおじ様じゃ。おみやげをもらおう、ああ嬉しいこと」  
と、手を叩いて悦んでいます。その姿は、愛敬はあるものの、ものすごいもので、まるで愛染明王の笑い顔かと思われるほどです。母は立ちよつて、

「この無礼者めが。こちらの方はいつも言い聞かせていた源の頼光様ではありませんか。今日からはお前の殿様になるお方ですよ。『一生懸命御奉公をいたします』と御挨拶を申しあげなさい」

と教えられると、「はっ」と手をつき一礼し、  
「一生懸命奉公し、敵の首をいくつでも引きぬいて上げましょう」

と、先々頼もしい言葉。頼光のお悦びもなみひとつとりのものではありませんでした。母は重ねて、

「あの岩窟に熊・猪を追い入れて、時々この子の力を試しておりますので、ぜひご覧ください。あのように引きささいてしまいますよ」と言葉を添えました。そこで頼光が、

「家来になった最初の仕事として、おまえの相撲をとるところを見たいもの」と所望しますと、すっと立ちあがり、岩屋の口に立てた大石をかると持ち上げて投げつけてから、両手をひろげつつ立つていま

① どうしても。

② どの気管の通っているところ。  
③ 力がくじける。

④ 一間は約一・八メートル。

⑤ 喜ぶこと。満足すること。

⑥ 力の強いこと。また、力の強い人。

⑦ もと元服の時に冠をつけたことから、元服のこと。ただし、怪童丸(金時)はまだ一、二歳。

⑧ 欲界の六欲天の中で、最下層に当る天。須弥山(＝仏教で、人間の住む世界とは別にあり、非常に高い所とされる)の中腹にあって、四方を鎮護し仏法を守護する四天王と、その眷属が住む。

⑨ 須弥山に住む持国天(東方)、広目天(西方)、増長天(南方)、多聞天(北方)、四天王。四方の服従しない民の意。中国で、自国を中華・中国と称するのに対し、四方の国を東夷・南蛮・西戎・北狄と称したのにならった言い方。

⑩ 中央政府に盾つく辺境の諸族。古代中国で国境を接した八つの異民族をさしたのにならった言い方。  
⑪ 天下。

⑬ 福井県遠敷郡の山。甲賀三郎兼家が鬼退治をした伝説がある。

熊とんで出るを、

「どっこい任せ」

としつかと抱く。熊こととせせず、ねぢ付けんすれども、い  
つかな動かばこそ。からみつけばこじ放し、組みつけばおし伏  
せ、うめきたける喉笛を二つ三つ叩きつけ、ひるむ所を取つて  
おさえ、片足つかんでくるくるくる、二三間かっぱと投げ、

「ああくたびれた。乳が飲みたい、母様」

と母が膝にぞもたれける。

頼光はなはだ御悦喜あり。

「ためしなき強力、母が子にてありしよな。則ちただ今冠さ  
せ、坂田の金時と名付け、四王天の四天を表し、定光末武綱金時、  
頼光が家の四天王。四夷八蛮を切りなげ、源氏の威光、四海  
に照らさんしるしぞ」  
と、各さざめきあい給う。

綱・定光言葉をそろえ、

「君は知ろし召されずや。近江の国高懸山には悪鬼住んで国民  
を悩まし、折々は都がたへも現るるゆえ、諸国の武士に悪鬼退治

した。岩屋の中から荒熊がとんで出てきました  
たが、「どっこいしよ」と言いつつしつかり  
と抱きかかえました。熊は、ねぢ伏せようと  
かかりますが、いっこうに動きません。から  
みつけばこじ放し、組みつけばおし伏せ、う  
めき声をあげる熊の喉笛を二つ三つ叩きつけ、  
ひるむ所を取つておさえ、片足をつかみ、  
くるくるくると二三間向こうに投げつけまし  
た。それから、

「ああ、くたびれた。かか様、乳が飲みたい」  
と母の膝にもたれかかっています。頼光は大  
いに喜び、

「並ぶものがないほどの力持ちじゃ。やはり  
この母の子だけある。ではすぐに元服させ、  
坂田の金時と名乗るがよい。四王天の四天に  
あやかり、定光・末武・綱・金時、この四人  
を頼光四天王と呼ぶことにしよう。四夷八蛮  
を切りなげ、源氏の威光を天下に示すこと  
になろう」

とお互い喜び合いました。

そのとき、綱と定光が口をそろえて、  
「頼光様は御存知ないかもしれませぬが、近  
江の国高懸山に住む悪鬼が民をなやましてい  
るといことです。時々には都にもあらわれて  
悪さをするため、諸国の武士に悪鬼退治の宣  
旨が下つていふことですが、誰も引き受  
ける者がいないそうです。」



① 天皇の命令を伝える公文書。

② 国家または君主に尽くした功勞。てがら。  
③ ほうび。

④ 公けの定を書いて人目を引く所に高くかかげた板札。

⑤ 武士としての運命。  
⑥ めでたいしるし。

⑦ 事の起こる前ぶれ。めでたいしるし。前兆。

⑧ 生まれたところ。

⑨ 深山に住み、不思議な能力があるという女。

⑩ いちばんのり。さきがけ。

⑪ よくやった、よくやった。  
⑫ 仏・菩薩が衆生を救済するため、人の姿をか  
りて現われること。化身。  
⑬ 春、野原などに立ちのぼる気。日射のために  
熱くなった空気が光が不規則に屈折して起こ  
る現象。目には見えるが実体のないところか  
ら「ありともなし」とも「につづけ、次に「か  
げ」を言い起す。  
⑭ 影が身にそうように、常に離れずつきそって

の宣旨<sup>①</sup>下るといえども、お請<sup>う</sup>け申<sup>もう</sup>す者もなし。

『武勇<sup>ぶゆう</sup>に長<sup>ちやう</sup>ぜし武士<sup>もののふ</sup>、鬼神退治<sup>きじんたいじ</sup>あるにおいては、勲功<sup>②</sup>勸賞望<sup>③</sup>みに任<sup>ま</sup>せらるべし』

との高札所<sup>④</sup>々に立てられたり。この勢<sup>いき</sup>いに悪鬼退治<sup>あくきたいじ</sup>思<sup>おほ</sup>し召<sup>め</sup>し立<sup>た</sup>ち給<sup>たま</sup>え」

と勸<sup>すす</sup>め申<sup>もう</sup>せば、頼光<sup>らいこう</sup>、

「それこそ武運<sup>ぶうん</sup>ひらくべき瑞相<sup>⑥</sup>。多くの人数<sup>にんじゆ</sup>無用<sup>むよう</sup>なり。主従<sup>しゆじゆう</sup>五人山<sup>やま</sup>つづきにわけ入<sup>い</sup>って、鬼神<sup>きじん</sup>が自在<sup>じざい</sup>に身<sup>み</sup>を變<sup>へん</sup>じ、千騎<sup>せんぎ</sup>とならば千騎<sup>せんぎ</sup>を討<sup>う</sup>ち、万騎<sup>まんぎ</sup>とならば万騎<sup>まんぎ</sup>を討<sup>う</sup>ち、天下太平<sup>てんかたいへい</sup>の忠義<sup>ちゆうぎ</sup>をあらわし、敵<sup>てき</sup>を亡<sup>ほろ</sup>ぼす前表<sup>⑦</sup>、はや打<sup>う</sup>つ立<sup>た</sup>て」

とすすみ給<sup>たま</sup>えば、金時悦<sup>きんときよろこ</sup>び、

「おお、鬼神退治<sup>きじんたいじ</sup>、面白<sup>おもしろ</sup>かろう。これ人々<sup>ひとびと</sup>、この金時<sup>きんとき</sup>は生所<sup>⑧</sup>も知らず、宿<sup>やど</sup>もなき山姥<sup>やまんば</sup>の子なれば、産所<sup>さんじよ</sup>も山<sup>やま</sup>、産屋<sup>うぶや</sup>も山<sup>やま</sup>、育<sup>そだ</sup>つ所<sup>ところ</sup>も山<sup>やま</sup>なれば、山道<sup>やまみち</sup>の先陣<sup>せんじん</sup>仕<sup>つかまつ</sup>る」

と、まつ先に立<sup>た</sup>って出<sup>い</sup>でければ、

「おお、でかしたでかした。心<sup>こころ</sup>にかかる事<sup>こと</sup>はなし。母<sup>はは</sup>はもとよ<sup>り</sup>化生<sup>けしやう</sup>の身<sup>み</sup>。ありともなしとも陽炎<sup>⑩</sup>の、かげ身<sup>み</sup>に添<sup>そ</sup>うて守<sup>まも</sup>りの

『武勇にすぐれた武士が、鬼神退治をすれば、望みどおりの褒美をとらす』

という高札があちこちに立てられております。ぜひ、今のこの勢のまま、悪鬼退治に出かけることにしてはいかがでしようか」

とすすめたところ、頼光は、  
「それこそ武運がひらけるべきめでたい兆候であるぞ。多くの人数はいらぬ。われら主従五人が、この山を越えてわけ入ることにしよう。その悪鬼が變じて千騎となれば、われらがその千騎を討ち、万騎となればその万騎を討つのだ。そして、われらの天下太平のため、忠誠の心を天下にあらわすことにしよう。これは敵を亡ぼすよき兆候、すぐに出発することにしよう」

と勇み立ちました。金時はよろこび、  
「おお、鬼神退治とは、おもしろい。みなさま、この金時は、山姥の子です。産まれたところも山、育ったところも山なので、山道の案内は私がいたします」

と、まつ先に立ちあがりました。  
「おお、よう言うた。もう心配することはない。この母はもとよと化生の身。ありともなしとも言えぬ陽炎のようなもの。そなたの身にいつでもより添うて守り神となつてそばにいきましょう。さらば金時、さらば我が君」

- ①もう最後だ。これまでで終りだ、という意味で用いる。
- ②福井県南条郡にある山の名。「帰る」に掛ける。以下、謡曲『山姥』による。
- ③かかる月。「いざよう」は、もとは立ち休む意。
- ④空の中ほど。
- ⑤自由自在の超人間的な不思議な力。神通力。
- ⑥仏教の考え方で、車輪が回転して止まらないように、人は三界（過去・現在・未来・六道（地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天））を生きかわり死にかわり巡ること。
- ⑦むやみやたらな執念。晴れやらぬ意で雲にたとえる。
- ⑧雲や水のように、いろいろかたちを変えたものの。
- ⑨庵と見えたのも流れ去るように次第に消え形がなくなり、「ちりちり」は、次の「塵積つて山姥となる」を言い起こす。
- ⑩山の塵が積もつて山姥となった。

神。これまでぞ金時、これまでぞ我が君」

いとま申して帰る山の峯にいざよう月かと思れば、まだ中空

に暮れぬ日かげの暮れしも通力。庵と見えしも輪廻をはなれ

ぬ妄執の雲水。ながれながれて谷に音あり、こずえに声ある。

風にきえきえ、嵐にちりちり、塵積つて山姥となる、鬼女

がありさま見るや見るやと峯にかけり谷にひびきて、今までこ

こにあるよと見えしが、山また山に山めぐり、山また山に山め

ぐりして、行くえも知らずなりにけり。

と別れを告げて山姥は帰っていきます。

帰っていくその山の峯には月がいざようよ  
うに見えましたが、実はまだ日は中空にあり、  
暮れていないのに暮れたように見えたのでし  
た。これも山姥の通力のせいであります。ま  
た、庵と見えたのも、輪廻をはなれられない  
山姥の妄執が、雲や水のようになり、やがて  
庵の形をなして見せたものでした。が、それ  
らは、またもとの雲や水となり、流れ流れて  
消えようとしています。谷には水音がし、こ  
ずえにも風の音がしています。それも次第に  
きえぎえになり、嵐にちりちりになりながら  
消えていきます。その塵が積つて山姥の姿と  
なっていたのです。その鬼女の姿が、あち  
らに見え、こちらに見え、峯を飛びかけり、  
谷にその声がひびいて、今までここにあるよ  
うに見えたのが、山また山へとめぐりゆき、  
どこへ行ったかわからなくなってしまうたの  
でした。

こもちやまんば  
 嬬山姥 第五段

- ①玉の美しいうてな。立派な高殿。以下、「山路かな」まで、謡曲『張良』による。「哀猿月にさげぶ」まで、もとは『和漢朗詠集』猿謝観による。  
 ②黒色の鶴。二十歳を経て黒色に変じたという老鶴。  
 ③揚子江の上流、四川省の谿流の名。古来猿の声が詩歌によくよまれて有名な地。  
 ④夜を五つに区分したときの第五をいう。五更。午前四時頃。  
 ⑤悲しげな声で鳴いている猿。  
 ⑥どことなく殺風景である。何となく趣がない。  
 ⑦連れていき。  
 ⑧鳥も通わないほど高く険しい。  
 ⑨けわしい所。難所。

- ⑩世の中の根柢のない風説だろう。  
 ⑪まことかうそか。真偽。  
 ⑫さらに、とり囲んで討ち取ってしまおう。  
 ⑬凱旋。  
 ⑭ここにいる人達よ。

- ⑮笑い声を表わすことば。

① 瑤台霜満てり。一声の玄鶴空になく、巴峡秋深し。五夜の哀猿月にさげぶ、物すさまじき山路かな。

かくて頼光、四天王を相具し、鳥も通わぬ高懸山、屏風を立てたるごとくなる、悪所をきらわず主従五騎、木の根に取り付き岩間をつたい、足に任せて行く先も、次第次第に道くらく、山とも谷とも知れざれば、とある木の根に腰打ちかけ、しばらく休らい給いける。頼光、仰せありけるは、  
 「かほどけわしき山中を、もう二三里も過ぎぬれど、何の不思議なきことは必定世俗の虚説ならん。実否をただし、重ねて取り巻き討ち取るべし。いざ凱陣せん、人々」  
 と、言わせも果てずあら恐ろしや、虚空に数万の声ありて、「不思議なきや不思議ありや、思い知らせん思い知れ、えいえい」  
 どっと笑う声、波の打ちくるごとくなり。時に向こうの松が枝

立派な高殿には一面に霜が降り、老いた鶴が一声空に向かつて鳴き、巴峡に秋が深まり、明け方には猿が月に向かつて泣き叫んでいるという詩を思わせるほどさびしい山路の風景であります。

源頼光は四天王をともない、鳥も通わぬけわしい崖の続く近江高懸山の高く険しい道を越えていきます。主従五騎は、木の根に取り付き岩間をつたって足に任せて行きました。だんだんと暗くなり、山と谷との区別もつかなくなってきましたので、あたりの木の根に腰を掛け、しばしの休息をとっておりました。頼光が、

「これほど険しい山中を、もう二、三里も歩いてゐるのに、何も起こらぬことからすれば、どうやら悪鬼の噂は根も葉もない風説のようだ。事情を調べて、噂を流した張本人を突き止め、討ち取ってしまうことにしよう。さあ、ものども、都に凱旋じゃ」と、言いも終わらぬうちに、虚空から数万人の声が聞こえてきました。

「不思議なことがあるのかないのか、本当のところを思い知らせてやろう。さあ、思い知れ。えい」  
 とどっと笑う声がまるで波が打ち寄せてくる

①『土蜘蛛草紙』に同様の化物が登場する。  
②お歯黒をつけ。歯を鉄漿で染めていること。  
③明るくかがやくさま。  
④ららんと輝く血走った眼の様子を氷に流した朱にたとえている。  
⑤にっと思ひありげにほほえむ。

⑥廓で遊女に言い寄る語調。  
⑦お目にかがる。「見参」を略したものに、婉曲のための接尾語「もじ」をつけた言葉。遊里で用いられた。  
⑧恋の悩みを起す原因となる人。  
⑨何かを願うときの祈りの言葉。どうか。是非とも。  
⑩思いの深さ次第なら。「心中すく」は、あくまでも相手への愛情をつらぬくこと。  
⑪青森県上北郡甲地村の千曳神社の石。坪村の石を坂上田村麻呂が地中に埋めたが、後にその石を坪村から数千人の手でここまで引いたという。

⑫そのとき。以下、謡曲『大江山』によるか。

⑬かみなりといなじかり。

⑭意味不明。鬼の言葉らしく、無意味の音を並べたものか。

⑮仏神や諸天、鬼などの配下の異類をいう。  
⑯心得た。待てました。「さ」+「しる(知)」の連用形+「たり」が一語化したもの。

⑰超人間的な能力を自由自在にあやつれること。

に、五尺余りの女の首、鉄漿ぐるに色白く、眼の光赫奕と、川辺の氷一面に朱を流せしがごとくにて、にっと思ひありげにほほえむ。末武すすみいで、

「ようよう、どうもどうも。鬼の娘に御見もじ。この末武が思いのたね、八幡一夜のお情けあれ。心中すくなら後とも言わず、今日の前に陸奥の、千曳の石とわが恋と、重き思いをくればよ」

と、大石を「えいやつ」と片手につかんで投げつくれば、変化の首はそのままに、かき消す様にぞ失せにける。時に山河振動して雷電稲妻おびただしく、二丈余りの悪鬼の形、火炎を降らし枯木をなげかけ、石上につっ立ち、

「しうぞくだつばがながんがっ」  
と呼ばわる声に、ここの山かげ谷かげ岩かげ、杉の木の間で散らし、あまたの眷属、一度にどっどおめいてかかる。「さしつたり」

と頼光、髭切をさしかざし、数万の中へ乱れ入り、おめきさけんで戦いける。通力自在の变化だに、名剣の徳に恐れ、大半ほ

ように聞えてきました。それにあわせて、向こうの松の枝に五尺余りの女の首が現れました。お歯黒をつけて色が白く、眼はららんと輝き、まるで川に張った一面の氷に朱を流したようで、にっと思ひえんだ表情は身の毛もよだつほどでした。

末武が前に出て、  
「ようよう、どうもどうも。鬼の娘さんよ、お初にお目にかかります。この末武の思いをかなえてくださいまし。ぜひとも一夜をとみにしてください。わが思いの深さのほどを見せてさしあげましょう。陸奥の千曳の石とわたしの恋の思いと、どちらが重いでしょうか」

と言いつつ、大石を「えいやつ」と片手につかんで投げつけました。すると、化け物の首はたちまちかき消すように失せてしまいました。と、その時、山や河が振動し、雷といなびかりがおびただしく鳴り、二丈余りの鬼が姿を現し、火炎を降らし、枯れ木を投げかけ、石の上に立って叫びました。

「しうぞくだつばがながんがっ」  
その呼び声にあわせて、そこらじゅうの山かげ、谷かげ、岩かげ、杉の木立の間にかくれていた大勢の手下の者が、一度にどっどわめきながらかかってきます。

「心得た」と頼光は髭切をさしかざし、大勢のなかに乱れ入って、わめきちらしながら戦いました。通力自在の化け物といっても、名剣の力にはかないません。みんなやつつけられてしまいました。



①未詳。にっと笑った顔の鬼か。「破顔」は、顔をやわらけて笑うこと。ほほえむこと。

②そうはさせない。

③「言う」を掛ける。

④どれが紅葉か手か、区別がつかない。

⑤一丈は約三丈。

⑥恐ろしい力を持つ鬼。変化。悪鬼。

⑦一尺は約三〇寸。

⑧膝の関節。膝がしら。

⑨届けばなんとかなるが、届きそうになく。

⑩大きな鬼の足元に組み付く小さな金時を、楠

の大木に絡みつく朝顔にたとえている。

⑪寿命の長い木で、大木になる。

⑫命の長さ。

⑬肝が太くて、ものに恐れぬさま。

⑭いらいらして。

⑮胴の骨。あばら骨。

⑯空中で。宙で。

⑰もと、後から相手の両腕を両手でしっかりと

きしめること。ここは相手の両脚を後からし

っかりだきしめ、脚の自由を奪っている。

⑱誉めるときのかげ声。いよいよ。ますます。

ろび失せにける。大将破顔鬼、怒りをなし、頼光をめがけ飛んでかかるを、金時表に立ちふさがり、

「やあやあ、させぬさせぬ。顔の赤いのが自慢か。そっちの顔が赤ければおれが顔も真っ赤いな。母様よりのゆずりの力のあんなばい見よ」

と、夕日にかがやくもみじ葉の、いづれをそれと紅の、両手をかけて組んだれども、二丈に余る鬼神の姿、二尺に足らぬ金時が、膝ぶしまでも届かばこそ。幾年ふりし楠の根をまたいたる朝顔の、朝日に消ゆる命の程、危うくもまた不敵なり。鬼神いらつて片手をのべ、金時が胴骨つかんでかろとさし上げ、微塵になれと投げつくれば、宙にてひらりとね返り、落ち様に鬼神の両足一つにつかんで羽交い絞め、大地にどうど打ちつけ、起き上がるを踏みたおし、打ちふせねじふせたたきふせ、馬乗りにしつかと乗り、一息ほつとついたりしは、悪鬼にまさりし勢い。

「げに山姥のご子息。いやいや」

どつとぞ褒めにける。渡辺・末竹・定光など、「我も我も」

大将の破顔鬼が怒りの形相もあらわに、頼光をめがけて飛びかかるところを、金時が正面に立ちふさがり、

「やあやあ、そうはいかぬぞ。顔が赤いのが自慢なのか。そっちの顔も赤いが、おれの顔も真っ赤。母様ゆずりのこの力を見てみる」と言いながら、紅葉のような両手で組みあいました。二丈にも余る鬼神に対して、二尺足らずの金時がいくら手を伸ばしても、膝がしらまで届くかどうかです。金時の命は、楠の根に絡みついた朝顔が朝日にあつてすぐしほむように、危ないようにみえましたが、金時の方は恐るる様子はありません。鬼神はいらした様子で片手を伸ばし、金時の胴骨をつかんで軽々と差し上げ、木っ端微塵になれ、と投げつけましたが、金時は空中でひらりと回転し、地面に落ちる寸前に鬼神の両足を後ろからつかんで羽交い締めにし、大地にどんと打ちつけました。さらに起きあがろうとするとところを踏み倒し、打ち伏せねじ伏せ、叩き伏せて、しっかりと馬乗りになって、ほつと一息ついていました。その様は、悪鬼よりもすさまじい勢いがありました。

「なるほど、山姥の息子だけのことはある。いやいや、すごい力じゃ」と、一同がいつせいに褒めたたえました。そして、渡辺、末武、定光たちもわれ勝ちに集まってきて倒れた鬼に幾筋にも縄をかけました。

「おお、気分がよいのう。さっぱりしたぞ。では、このまますぐに都へ連れて参ろう」

①私にまかせろ。さあ、こい。よしました。

②未詳。作品当時の木遣り歌の一節か。「本綱」は重いものに綱をつけて引く時の、もとなる綱。または本綱に付けて引く時の、本綱の間、または本綱に付けて、補助とする綱。また、それを引く人。  
③重いものを皆で運搬するときに歌う労働歌の一。長く引いて歌うので、文句の意味がわかりにくい。「せい」「やあ」「ひよえい」は木やりの長く引いて歌う部分を表わすか。  
④皆で意見を述べ合うこと。第二段参照。頼光は将来の婿。

⑤天皇の命令を記した高札のおおせのままに。  
⑥近江の国の別称。今の滋賀県。

⑦都（京都）に入ること。貴人に使う。  
⑧天皇に申し上げること。  
⑨言葉巧みにふるまい、心の正しくない臣。

⑩頼光の功に対する賞と、右大将らの讒言に対する罰。

⑪公卿殿上人。三位以上の人（参議は四位でも）を月卿、四位・五位の清涼殿の殿上の間に昇ることを許された人（蔵人は六位でも）を雲客という。  
⑫平安時代の公卿。八八九〜九四九。天慶四（九四一）年関白太政大臣となる。「関白」は、天皇を補佐して政務を執り行う重職。  
⑬ここは、紫宸殿の南階段。

とはせ集まり、千筋の縄をぞかけたりける。

「おお心地よし、いさぎよし。ただこのままに都へひけ」

「合点じゃ、まつかせ」

金時が胴より太き大綱をしつかとつかんで、

「やあ、やるぞえ。本綱中綱、木やりでせい。やあ天魔のひよ

えい、えいえい」

天魔の通力をことごとくほろぼして、凱陣あるこそめでたけれ。

かくて帝都には高懸山の変化の討手、諸卿僉議ある所へ、大

納言兼冬公参内あり、

「さてもそれがしが婿、源の頼光、勅宣の御高札に任せ、江

州高懸山に分け入り、変化を生け捕り、入洛仕つて候えども、

勅勘の身を憚り、それがしを以て奏聞仕り候。早く佞臣の実

否をただされ、賞罰を願ひ奉る。それぞれ」

とありければ、金時が縄取りにて、三人四方を取り囲み、庭上

にひつすえたる鬼神は、怒りおめく声宮中に鳴り渡り、帝を

はじめ月卿雲客・宮女・上下の男女まで、恐れおののくばか

りなり。関白忠平、御階近く出でたまひ、

と頼光が言うと、「よしました、お任せください」と、金時が自分の胴より太い大綱をしつかりとつかんで、

「やあ、いくぞ。本綱、中綱、木やりでセイ。ヤア、天魔のひよえい。エイエイ」

と唄いながら引いていきます。悪鬼どもをことごとく滅ぼして、都に凱旋していくのはまことにめでたいことであります。

都の方では、高懸山の悪鬼を亡ぼした者たちについて、朝廷の公卿たちがいろいろ話しかつているところへ、大納言兼冬公が参内してきました。

「皆様、わが婿、源頼光が、勅命の宣旨による高札に従い、江州高懸山に分け入り、変化どもを生け捕りにして、都に入ってきておるとのことです。ただ、勅勘の身であることをはばかり、わたくしが代わって帝に申し上げる次第でございます。早速、佞臣どもの真偽をただし、あらためて賞罰のご判断をくだしていただきますようお願いいたします」と言いながら、「それぞれ、ここへ」と呼び込みました。

金時が縄持ちとなり、他の三人と力を合せて四方を取り囲み、鬼神を宮中の庭に引っぱり込んできましたが、怒りわめいて大声を上げ、宮中に響き渡りました。帝をはじめ公卿たち、宮女以下、そこに居合わせたものは皆、その声におびえおののくばかりでした。関白忠平が階段の近くに出てきて、

- ① 天皇が感心なされること。御感（ぎよかん）。  
 ② 民間から出て官に仕えること。  
 ③ お許し。御許可。  
 ④ 早く早く。  
 ⑤ 平安時代には淀付近をさして言ったが、江戸時代には宇治川・桂川・木津川が淀付近で合流してより下流、難波の津に至る間をいう。  
 ⑥ 罪人などを責（す）で巻いて縛り、水中に投げ入れて殺す刑罰。柴漬。  
 ⑦ 天皇のお言葉。  
 ⑧ 相手を見下し威圧するように。  
 ⑨ 屈託なく高らかに笑うこと。

- ⑩ 「天下」を支配する君主、の意で、天皇のこと。  
 ⑪ 天皇の仰せ。

⑫ 都（京都）の中。

- ⑬ たまたまそこにいるすべての。  
 ⑭ 不機嫌な顔色になつて。

⑮ 罪人として討つこと。

⑯ 末武。

- ⑰ だらだらと。  
 ⑱ お願ひ。

「変化退治の武功、叡感浅からず。この恩賞によって頼光出仕御免あり、はやはや鬼神の頭を切り、淀川のふし付けに沈むべしとの綸言なり」と、言葉もいまだ終わらぬに、渡辺居丈高になりからからと笑い、

「こは一天の君の勅諭とも覚えぬものかな。もとより罪なき頼光が御免ありとは何のこと。鬼神退治の恩賞は望み次第との御高札によつて、我々一命を投げ打ち鬼神を生け捕り候えども、いまだ洛中に平の正盛という恐ろしき鬼神住んで、科なき者を讒し国土をさわがし候。きやつを我々に賜わつて、この鬼神と一所に退治仕らん。これ第一の望みなり」と、憚りなくぞ申しける。関白殿をはじめ、あり合う諸卿色を損じ、

「威勢さかんの正盛、たとえいかなる誤りありとも、誅せんこと叶いがたし。何にても外の義を望むべし」とありければ、定光をはじめ、末竹・金時口々に、「叶わぬ望みをまだまだと申しても無益の至り。この方御無心申

「頼光の変化退治の手柄については、帝も感心しておられる。この功績により、頼光は以後朝廷への出仕を許すのであった。はやくその鬼神の首を切り落として、淀川に沈めてしまふようにとの帝のお言葉であるぞ」という言葉もまだ終わらないうちに、渡辺綱が高笑いしつづ、

「これはこれは、天下を治める帝のお言葉とも思えぬ。もとより罪のない頼光殿に対して『出仕を許す』とはどういうことでござろうか。『鬼神を退治したあかつきには恩賞は望むまゝ』という御高札の内容であつたから、我々は一命をなげうつて鬼神を生け捕りにしてきたが、まだ都には、平の正盛という恐ろしい鬼神が住んで、罪のない者をうまい言葉でおとしいれ、この国を混乱させておりますぞ。やつを我々の方に差し出して下されば、この鬼神とともに退治いたしましょう。これがわれらの第一の望みです」と、はばかりことなく申し上げました。

関白殿をはじめ、居合わせた公卿たちは不機嫌な様子で、

「いま全盛を誇つている正盛に、たとえどんな誤りがあつたとしても、罪人として討つことはできぬ。それ以外なら何でもよい。他のことを望むがいい」という返事でありました。定光をはじめ、末武、金時も口々に、

「われらの望みが叶わぬのならば、これ以上いくら言つてみてもしようがない。われらの願ひが聞き入れられぬなら、そちらの命令も

①相談。

②内裏。

③悪意をもって害を加えること。うらみ。

④すんでのことに。もう少しで。

⑤早まったこと。軽はずみなこと。

⑥T字型の横木に布を垂れたもので、貴人などの居場所のそばに置いてへだてとしたもの。

⑦集まって相談し、判定すること。本来は歌合などの場合という。

⑧京都の裁判・警察の事をつかさどる役人。

⑨「引き伏せ」の転。

⑩いっそのこと。どうせならば。ついでに。

⑪かしら。

⑫右大将という役目の者。

さぬからは、そつちの御用も承らぬ。この談合ささりつと元へ戻し、この鬼神の縄を切りほどき庭上に放ち、我々も腹かきやぶり、ともに悪鬼と現れ、禁裏はおろか日本国に仇をなさん

と、すでに縄を切らんとす。卿相雲客、

「あらこわや。やれ待て渡辺、粗相しやるな。定光末竹殿、金時とやら、よい子じや頼む縄とくな。鬼を放してたまるものか」

と、御簾や几帳に身をちぢめ、震いわななき給いける。関白道理に服し給い、奏聞衆議判力なく、檢非違使勅をこうむりて正盛に縄をかけ、四天王に渡さるる。「こはありがたし」と引つぶせ、

「さあ一人はかたづけたり。とてもものことに、清原の右大将高藤という大悪人の鬼神の棟梁も賜わらん」

と言上すれば、諸卿目と目をきつと見合わせ、かたずをのんでおわします。関白殿眉をひそめ、

「かたじけなくも高藤は女院の御弟。いかに罪科あればとて、右大将の官人、武士の手へ渡されし古例なし。この義において

聞くわけにいかぬ。話し合はこれでおわりにして、この鬼神の縄をほどいて庭に放ち、我々も腹かき切つて、みんな悪鬼に生まれ変わり、都はおろか、この国じゅうに恨みを晴らしてやろうではないか」

と、今にも縄を切るうという勢いです。公卿たちは、

「ああ怖いことを。まあ待て、渡辺、早まったことをするな。定光、末武殿。金時とやら、よい子じやから。頼む、縄とかぬようにな。鬼を放したりされてはたまらぬ」

と、御簾や几帳に身を隠し、ふるえわななきています。

関白殿はその道理に納得し、頼光らの願いを受けいれました。これにより、これまでの決定は白紙に戻され、勅命を受けた檢非違使が正盛に縄をかけ、頼光と四天王に引き渡しました。

「これはありがたい」と引き伏せたのち、

「さあ、これでひとり片付いた。ついでのこと、清原の右大将高藤という大悪人で、鬼神の棟梁も引き渡してもらうことにしよう」

と申し上げましたので、他の公卿たちは目と目を見合わせ、固唾を飲んでおります。

関白殿は顔をしかめ、

「恐れ多くも高藤公は帝の女院の御弟君にあられる。たとえどんな罪を犯していたとしても、右大将ほどの身分の方を武士の手に引き渡した例は古来ないことである。この願ひ



は叶うまじ」

とのたまえば、

「むむ、ごもつともごもつとも。ならぬことをぜひとは申さず。

さらば鬼の縄とけ」

とつと寄れば、

「ああ気の短い、渡辺殿。談合しよう綱殿」

と、慌て騒ぎ給う所へ、右大将つとかけ出で、

「推参なるわつぱども、おのれらごとき匹夫の分にてそれがし

をほろぼさんこと、蓮の糸にて大石を釣りさげんとするに似た

り。早くその場を立ちのくべし」

とあざ笑って立ったりける。綱はたまらずかけ出で、高藤が諸膝

かいてどうぞ引っしき、

「やあ、匹夫とは誰がこと。おのれが罪は天下一統存じの所。白

状に及ばず」

と、高小手にぞいましめたり。時をうつさず舅、中納言兼冬

卿、頼光を誘引し参内あれば、叡感はなはだうるわしく、源氏

の本領もとのごとく鎮守府の將軍に任せられ、兼冬の娘おも

だけは叶えるわけにはいかぬ」  
と言いました。

「なるほど、それはもつともなこと。叶えられぬことを無理にと言うわけにはいきませんなあ。では、この鬼の縄をとくことにいたしましう」

と、鬼神にすつと寄っていきます。

「ああ、待て待て、気の早い。渡辺殿。もう少し話し合おうではないか、綱殿よ」

と、慌てて大騒ぎをしています。そこへ、右大将がすつと駆け出てきて、

「無礼な小僧どもめ。おのれらごときいやしい分際で、この私をほろぼそうなどは、笑止の沙汰。蓮の糸で大石を釣り上げようとするようなもの。早くこの場から立ち去れ」

と、あざ笑いながら立っていました。

綱は我慢できずに駆け出して、高藤の両膝をすくつてどんと倒し、

「やい、いやしい者とは誰のことだ。おのれの罪はこの国の誰もが知っていること。さあ白状するまでもない」

と言いながら、高小手に嚴重に縄をかけてしばりあげてしまいました。

ほどなく、舅の兼冬卿が頼光を伴って参内いたしました。帝のお喜びは大変なもので、源氏の領地はもとどおりに復され、さらに鎮守府の將軍に任せられました。

① 無礼な小僧共。「推参」は、自分のほうから無理に押しかけていくこと。

② いやしい者の分際で。

③ 蓮からとった繊維で大石を釣りさげようとする。無理なことのため。

④ 両膝をすくつて。

⑤ 引き敷き。

⑥ この国のみんな。

⑦ 白状するまでもない。

⑧ 両手を背のうしろに回し、首から肘、手首にかけて嚴重に縛り上げた。

⑨ いざない導くこと。

⑩ 奈良、平安時代、陸奥国で蝦夷地経営に当たった軍政機関。

①官職に任命する。  
②めでたい日。

③鹿児島県佐多郡南四〇キロメートルにある硫黄島とも、薩摩諸島の古称ともいわれている。古代の流刑場。喜界ヶ島なども。

④君主が下に対して言うことは。天皇のことは。

⑤切ろうとして切れないのは夫婦、主従、一門、一家、縁者、親類の強い縁である。  
⑥切っても切れない縁の流れをくんで、その源である源氏の子孫も次々とふえて繁昌し、国も繁昌する。流れ・汲んで・源は縁語。徳川氏は系図上、清和源氏の新田氏の支流の末裔となっており、本姓は源姓。したがって源氏の氏の繁昌を祝うことは徳川家の繁栄を祝うこととなる。  
⑦農作物の出来がゆたかに多い。  
⑧中国の神仙思想で説かれる仙境のひとつで、三神山のひとつ。渤海湾に面した山東半島のはるか東方の海中にあり、不老不死の仙人が住むと伝えられるところ。蓬萊山。  
⑨(蓬萊国のように)めでたい日本の国が治まる。「秋津島」は日本の国の古称。

だか姫、四位の女官に補せられ、御祝言の吉日まで勅諭あるぞありがたき。

さて、

「右大将の配所は鬼界が島へ、正盛は鬼神とともに誅すべし」との綸言、

「こはありがたしありがたし。それ計らえ」

「承る」

と、正盛を引き出だし、首宙に打ち落とし、残る鬼神は四天王がなぶり殺しの手玉ぞと、定光末竹両足取れば、金時片手に角を持ち、えいえい声して引く程に、なんなく首をねじ切つて、左右へさつと、退いてものかぬは夫婦主従一門一家、縁者親類豊かなる流れを汲んで、源の氏も繁昌国繁昌、五穀豊饒の民繁昌、蓬萊国の秋津島、治まる御代とぞ祝いける。

兼冬の娘のおもだか姫は四位の女官に任命され、祝言の日どりまで帝の指示があるというまことにありがたいことでありました。

また、

「右大将は鬼界が島へ島流しにせよ。正盛は鬼神とともに成敗するように」

という天皇のお言葉がありましたので、一同は、

「これはありがたいありがたい。さあ、そのとおりにするぞ」

「承知した」

というわけで、正盛を引き出し、首を宙に打ち落とししました。残る鬼神は「四天王がなぶり殺しにするおもちやだ」と、定光、末武が両足をつかまえ、金時が片手で角を持ち、えいえいと声を上げて引きますと、難なく首はねじ切られ、左右にさつと離れました。

しかし、切っても切れないのは夫婦、主従、一門、一家、縁者、親類の強いきずなであります。その縁の流れをくんで、その源である源氏一族は繁昌、国も繁昌、五穀は豊かに実って民も繁昌。蓬萊国のようにめでたい日本の国が治まるすばらしい御代だと祝うのであります。

尾口のでくまわし教材作成委員会

木越 治（金沢大学人間社会学域歴史言語文化学系教授）

道下 甚一（東二口区文弥人形浄瑠璃保存会会長）

中内 幹雄（深瀬のでくまわし保存会事務局長）

村上和生雄（白山市教育委員会文化課主査）

協力者

木越 秀子（金沢大学大学院人間社会環境研究科博士後期課程在学）

丸井 貴史（金沢大学大学院人間社会環境研究科博士前期課程在学）

国指定重要無形民俗文化財 尾口のでくまわし

## 姫 山 姥

発行 平成二十二年三月

編集 尾口のでくまわし教材作成委員会

発行 加賀の民俗文化財活用委員会

委員長 喜田 紘雄

石川県白山市殿町三十九

白山市教育委員会事務局文化課内

TEL〇七六―二七四―九五七三

印刷 能登印刷株式会社 金沢市武蔵町七番十号